

資料集(14)

デモクリトス

A 生涯と学説

生涯

1

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 34 ff.）

デモクリトスはヘゲストラトスの子（ただしアテノクリトスの子としている人もあれば、ダマシッポスの子としている人もいる）で、アブデラの人。あるいは、二三の人によれば、ミレトスの人であった。彼はマゴス僧やカルダイア人から教を受けた。ヘロドトスもまた語っているところによると、クセルクセス王が彼の父のところで賓客としてもてなしを受けたときに彼の父のもとに指南役としてそれらの人たちを残して行ったのであり、それらの人たちから彼は、まだ子供であったときに、神学や天文学に関することを学んだのである。しかし後には彼はレウキッポスに近づいた。またある人によれば、アナクサゴラスにも近づいたが、この人より40歳若年であった。だがパボリノス¹は『歴史研究雑録集』の中で、アナクサゴラスについてデモクリトスは次のように語ったと述べている。すなわち、太陽や月についてのアナクサゴラスの見解はアナクサゴラス自身のものではなく、古くからあったもので、剽窃したものだというのである。(35) また彼は、アナクサゴラスが彼を受け入れなかったので、アナクサゴラスに対して恨みの気持を抱き、アナクサゴラスの宇宙体系とヌース〔知性〕に関する教説をさんざんにこき下ろしたとのことである。そうだとするならば、どうして彼は、一部の人たちのいうようにアナクサゴラスの弟子といえるだろうか。

ところでデメトリオス²が『同名人録』において、またアンティステネス³が『哲学者の系譜』において述べているところによると、彼は神官たちから幾何学を学ぶためにエジプトに赴いたし、カルダイア人⁴に会うためにペルシアにも紅海にも出かけて行ったとのことである。またある人のいうところによると、インドで裸の行者とも交わったし、エチオピアにも行った。また彼は三番目の兄弟として〔父の〕財産を分与されたが、その際、多くの人たちのいうところによると、旅に必要であったために銀貨による少ない取り分の方を選び取った。兄弟たちはそれをずるく見越していたとのことである。それでも彼の取り分は100タラントンを越えていたが、彼はそのすべてを〔旅に〕使い果たすとデメトリオスは語っている。また彼は庭園の一部を小区画に区切ってそこに閉じこもっていた。ある日彼の父が犠牲にするために牛を連れてきてそこに繋いだが、彼は、犠牲の祭礼を執り行うからと牛のことを話して彼を立ち上がらせるまで、かなりの間そのことに気づかないでいた。それほどにも彼は勉強熱心であったとデメトリオスは語っている。デメトリオスはまたこうも述べている。「彼はアテナイにも行ったが、名声を軽んじていたので認められることに熱心でなかったようであり、彼の方はソクラテスを識っていたが、ソクラテスの方は彼を識らなかったように思われる。というのも、わたしはアテナイにも行ったが、わたしと認める者は誰もいなかったと、彼自身語っているからである。」

(37) 「もし『恋がたき』がプラトンのものなら⁵、その中に登場する無名の人物、オイノピデス⁶やアナクサゴラス一派の人たちとは別の人で、ソクラテスを相手にした集まりの中で哲学について論

じている人物、そしてソクラテスがその人に哲学者は五種競技の選手のようなものと語っている人物、その人物はおそらく彼〔デモクリトス〕であろう〔『恋がたき』136 A〕。まさしく彼は哲学における五種競技の選手だったのであり、というのも彼は自然学や倫理学はいうに及ばず、数学にも一般的諸理論にも習熟していたからであり、また諸種の技術についても十分な経験を有していたからである」とトラシュロス⁷は語っている。「言葉葉は行ないの影である」とは彼のいである。だがパレロンのデメトリオス⁸は『ソクラテスの弁明』において、彼がアテナイを訪れたことは一度もなかったと語っている。そしてこのことは、もし本当に彼があれほどの国家を軽視したとするなら、〔自分を〕それ以上のものと考えていたということであり、ある場所から名声を得るより、むしろその場所に名声を授ける方を本懐としたということであると。(38)彼がどのような人物であったかは、彼の著作からも窺われる。彼はピュタゴラス学徒の崇拜者であったように思われるとトラシュロスはいう。のみならず、彼は同名の著作においてピュタゴラスその人に言及し、彼を賛美しているのである。彼は一切をピュタゴラスから得ているように思われるのであって、もし年代上の妨げがなかったなら、彼の弟子であったとすら考えられよう。しかしいづれにせよ、ピュタゴラス学徒の誰かから彼は学んだのであって、そのことは彼と同時代に生きたレギオンのグラウコス⁹の語るところである。キュジコスのアポドロロス¹⁰もまた、彼はピロラオスと一緒に暮らしたと語っている。

彼は時々ひとりになって墓地で過ごし、表象をさまざまな仕方で試してみる練習をしたとアンティステネスはいう。(39)またアンティステネスのいうには、彼は外国旅行から帰ってきてからというもの、全財産を使い果たしてしまっていたためにはなはだ哀れな状態で暮らしていた。そして困窮していたために兄のダマソスによって養われていた。だが、ある未来のことを予言したことで評判を博して、その後は多くの人々から神を宿せし者という名声を受けるに値する人物と見なされた。しかし、父祖の財産を蕩尽した者は祖国に埋葬される資格なしとの法律が〔その当時アブデラに〕あったので、アンティステネスがいうには、彼はそのことに気づき、誰か妬み深い者とか密告者連中から査問の対象にされるのではないかと恐れて、彼の著作の中でも第一級の作品である『大宇宙』を人々の前で朗読した。そしてそのことによって500タラントンの榮譽を得たとのことである。それだけではない。銅像を建立されるという榮譽も得た。そして100歳以上も生きた後、死んだときには国家の名において埋葬されたという。(40)しかしデメトリオスは、『大宇宙』を朗読したのは彼の身内の者であり、贈られたのも100タラントンでしかなかったと語っている。ヒッポボトス¹¹もそれと同じことを語っている。

アリстокセノス¹²が『歴史覚書』においていうところによれば、プラトンは集めえた限りのデモクリトスの著作を燃やしてしまおうとしたが、ピュタゴラス学徒のアミュクラスとクレイニアス¹³が「そんなことをしても何にもならない、それらの書物はすでに多くの人々のもとに流布しているから」と諭して、彼を引き止めたとのことである。だがプラトンがそうしようとしたのは明らかである。というのも、プラトンは過去の哲学者のほとんどすべてに言及しているのに、デモクリトスには一度もはっきりとした形では言及していないからであり、彼に対して何らかの反論をする必要があると思われる場合ですらそうだからである。明らかにプラトンは哲学者の中で最高の者になろうとすれば、彼にとってデモクリトスが〔最大の〕ライバルになろうことを知っていたのである。それはともかくとして、ティモン¹⁴もまた彼のことを称賛して、次のように述べている。

例えば思慮深きデモクリトス、言葉の牧人、

両面を弁えて語りしこの人物をわたしは第一級の者たちの間に認めたるなり。

(41)ところで年代に関しては、彼自身が『小宇宙』において語っているところによると、アナクサゴラスが老人であったときに彼はまだ若く、アナクサゴラスより40歳年少であった。そしてこの

『小宇宙』はイリオン〔トロイア〕の陥落から730年後に纏められたものであると彼自身が語っている。アポドロスが『年代記』においていうところによれば、彼は第80オリュンピア祭年〔前460-457年〕に生まれたことになっている。しかしトラシュロスが『デモクリトスの書物を読むための手引き』においていうところでは、第77オリュンピア祭年の第3年目〔前470年〕が彼の生年であり、彼はソクラテスより一年年長であった。だとすれば、彼はアナクサゴラスの弟子のアルケラオスやオイノピデス一門の人たちと同時代人ということになるろう¹⁵。事実彼はオイノピデスにも言及している。(42) 彼はまたパルメニデスやゼノン一門の人々が唱えた一者の説にも言及している。この人たちは彼の時代に極めて有名だったのである。またアブデラのプロタゴラスにも言及しているが、この人がソクラテスの同時代者であったことは一般に認められているところである。

『散策』の第8巻においてアテノドロス¹⁶は次のような話を伝えている。〔ある時〕ヒポクラテスが彼のところにやってきたが、彼は〔かねて〕ミルクを持ってきてくれるように注文していた。その持ってきてもらったミルクを見て、「これは初子を生んだ黒い山羊のものだね」と彼はいったのである。その観察の正確さにヒポクラテスは驚嘆したとのことである。それだけではない。ヒポクラテスにはひとりの娘がついてきていたが、最初の日には彼はその娘に「今日は、お嬢さん」と挨拶した。だが次の日には「今日は、奥さん」と挨拶したのである。事実その娘は夜の間に誘惑されていたのである。

(43)デモクリトスの最期は次のようなものであったとヘルミッポス¹⁷はいう。彼はもうすでにたいへんな高齢になっていて、臨終間近にあった。そこで彼の妹は、テスモポリア祭¹⁸の期間中に彼が死ぬようなことになれば、女神への務めを果たせなくなると悩んでいた。それで彼は心配しないようにと、毎日彼に温いパンを持ってくるように指示した。そしてそれを鼻にあてがって、祭の期間中自分を持ちこたえさせたのである。祭の期間（それは三日間であった）が過ぎると、彼はまったく苦しむことなく人生を終えた。ヒッパルコス¹⁹のいうところによると、その時彼は109歳であったという。『パン・メトロン』の中の彼に寄せるわれわれの一片はこうである。

一体誰がかくも賢明に生まれついていたであろうか。誰がこれほどの業績を打ち立てたであろう。

全知なるデモクリトスがなし遂げしほどの業績を。

この人は、死が近づきつつあったとき、三日の間家の中で持ちこたえ、パンの温かい湯気で自分をもてなしていた。

この人の人生はかくのごときのものであった。

(44)彼の考えるところは以下のごとくである。万有の原理は原子と空虚のみであって、それ以外のすべてはあると思われているだけのものなのである。世界は無限〔無数〕であり、生成し、消滅する。何ものもあらぬものから生じてくることはないし、またあらぬものへと消滅して行くこともない²⁰。また原子は大きさと数において無限であり、万有の中を渦を巻いて運動している。そしてそのようにしてすべての合成物、すなわち火、水、空気、土を生み出したのである。なぜならこれらもまた幾種類かの原子からなる合成物だからである。これらの原子は影響を蒙ることもなければ、変化することもないが、それはそれらの固さによる。太陽と月は滑らかで円い形をしたそういった塊〔原子〕から構成されており、魂も同様である。そしてこの魂は知性と同一のものである。われわれの視覚は剥離像〔エイドーラ〕が飛び込んでくることによる。(45)すべては必然によって生起するのであるが、それは渦が万物の生成の原因だからであって、この渦のことを彼は「必然」といつているのである。人生の目的は明朗快活さにある。だがそれは、一部の人たちが聞き違えて理解したように快樂と同じものではなく、それによって魂が恐怖や迷信、その他どのような情念によっても乱されることなく、静

穏に、そして落ち着いた状態で過ごすことになる、そういったものなのである。これを彼は「仕合せ」とも、またその他多くの別の名称でも呼んでいる。性質は習慣的なものであり、本性的には原子と空虚あるのみ。以上が彼の考えるところである。

彼の著作は・・・[本章のA33に掲載]・・・。

(49)デモクリトスという名の人物は六人いた。第一は〔今われわれが述べた〕この人。第二はこの人と同時代のキオスの音学家。第三は彫刻家で、アンティゴノス²¹が言及している人。第四はエペソスの神殿やサモトラケのポリスについて書いた人。第五はエピグラム詩人で、明快で華麗であった人。第六はペルガモンの人で、修辞学の論文によって知られる人。

- (1) パボリノスは紀元2世紀の前半に活躍したガリアのアレラテ〔アルル〕出身の弁論家、哲学者。ギリシア語で著作した。アナクシマンドロスの章A1の注2参照。
- (2) マグネシアのデメトリオス。前1世紀にローマで活躍した著述家。タレスの章A1の注42参照。
- (3) 前200年頃活躍したロドス出身の歴史家。『哲学者の系譜』『ロドス史』などの著作があった。特に『哲学者の系譜』はディオゲネス・ラエルティオスによってしばしば引用される。
- (4) 南部バビロニアに定住したセム系アラム人の民族。新バビロニア王国はこのカルダイア人たちの王国。彼らは天体現象に異常な関心を持ちつづけ、長年にわたってその現象を観察、記録しつづけた。タレスの章A11「ヨセフス」の注1参照。
- (5) 対話篇『恋がたき』は一般にはプラトンの偽書とされている。
- (6) 前5世紀の中頃に活躍したキオス出身の天文学者。タレスの章A17の注1参照。
- (7) エジプトのメンデスないしはアレクサンドリア出身の天文学者、占星学者。紀元36年没。プラトンの対話篇を四部作の形に編集した編纂者として知られる。
- (8) パレロンのデメトリオスについては、タレスの章A1の注3参照。『執政官録』の著者として有名であるが、その他にもここに挙げられている『ソクラテスの弁明』をはじめとして、『老年について』『文体について』『七賢人の箴言』など多くの著作があった。
- (9) 前5世紀の後半から前4世紀の前半にかけて活躍した音楽理論家。南イタリアのレギオン出身。詩や音楽について著作した。
- (10) キュジコスのアポドロロスについては、生涯、年代ともによく知られないが、ただデモクリトスの信奉者であったこと、またデモクリトスにならって人生の目的を魂の感動に求めたことがプリニウスやクレメンスの言及から知られる。
- (11) 生涯、年代ともに不詳の著述家。哲学の学派についての著作があったようで、ディオゲネス・ラエルティオスによってしばしば活用されている。
- (12) タラス出身のペリパトス派の哲学者。音楽理論に優れ、「音楽家」と呼ばれた。ピュタゴラスの章3の注1参照。
- (13) アミュクラス、クレイニ阿斯ともにプラトンとほぼ同時代のピュタゴラス学徒という以外、不詳。
- (14) 懐疑派の哲学者ティモンについては、クセノパネスの章A1の注1参照。
- (15) これらの報告を総合して一般にデモクリトスの生涯は前460～370年頃と推定されている。彼の学説は初期ギリシア自然哲学のそれに属するにせよ、年代的には彼はソクラテス(前469～399年)やソピストたちの同時代者であった。
- (16) キリキアのタルソス出身のストア派の哲学者。アルキュタスの章A8の注1参照。

- (17) 前3世紀の後半に活躍したスミュルナ出身の伝記作家。『哲学者伝』の著者。タレスの章A 1の注36参照。
- (18) 豊穡と多産を祈願して女神デメテルを祭った祭礼。デメテルのテスモポロス(「法をもたらす者」という別称からきている。全ギリシア共通の祭礼で秋の一定の時期に(アテナイではピュアネプシオンの月〔今日の10月から11月に当たる〕の11日から)三日間にわたって女性のみによって執り行われた。アリストパネスはこの祭りを主題にして喜劇『女だけの祭』を書いている。
- (19) 天文学者のヒッパルコスのことか。天文学者のヒッパルコスは前2世紀のニカイアの人。数学、とくに三角法を使って天文学の分野で輝かしい成果をあげた。パルメニデスの章A 48および注1参照。
- (20) この「何ものもあらぬものから生じてくることはないし、またあらぬものへと消滅して行くこともない」(μηδέν τε ἐκ τοῦ μὴ ὄντος γίνεσθαι, μηδὲ εἰς τὸ μὴ ὄν φθείρεσθαι) というのはギリシア自然哲学共通の大原則で、シンプリキオスはこれを「(ギリシア)自然学の共通の公理」と呼んでいる。
- (21) カリュストスのアンティゴノス。前3世紀のエウボイア島カリュストス出身の彫刻家、散文作家。アナクサゴラスA 1の注16参照。

2

『スーダ』(「デモクリトス」の項)

デモクリトスはヘゲシストラトスの子(ある人によればアテノクリトスないしはダマシッポスの子)で、哲学者のソクラテスの生年でもある第77オリュンピア祭年〔前472-469年〕に生まれた(第80オリュンピア祭年〔前460-457年〕とっている人もいる)。トラキア出身のアブデラ人。哲学者。ある人によればアナクサゴラスの弟子であり、ある人のいうところではレウキッポスの弟子である。またマゴス僧やカルダイア人やペルシア人の弟子にもなった。なぜなら、彼はペルシアにもインドにもエジプトにも赴き、それぞれのところでさまざまな知識を学んだからである。それから彼は帰国し、兄弟のヘロドトスやダマステスと一緒に暮らした。アブデラでは彼は、その知恵によって指導し、尊敬された。著名なところではキオスのメトロドロス¹が彼の弟子となった。そしてアナクサルコス²と医者ヒポクラテスとそのメトロドロスの聴講者となったのである。デモクリトスは「知恵」と呼ばれた。また「笑う人」とも呼ばれたが、それは人々の空しい***〔欠文〕***を笑ったからである。彼の真正の書物は二点あり、『大宇宙』と『世界の本性について』がそれである。彼はまた手紙も書いている。

- (1) デモクリトスの原子論を受け継いだ前4世紀の感覚主義的唯物論の哲学者。アナクシマンドロスの章A 18の注1参照。
- (2) アブデラの哲学者。前340年頃活躍。キオスのメトロドロスの弟子。またスミュルナのディオゲネスにも学んだ。アレクサンドロスの東征に従軍し、その途次、同様に従軍していた懐疑派のピュロンを教えたといわれる。その学説は恐らくデモクリトス流の原子論哲学と思われるが、詳細は知られない。不動心(アパテイア)と人生への満足感のゆえに「幸福な人」と呼ばれた。キュプロスの僭主ニコクレオンの恨みをかい、彼によって石臼の中に投げ込まれて鉄の杵でつき砕かれたが、「アナクサルコスの袋をつき砕け。しかしアナクサルコスはつき砕かれはしないぞ」と最後までその不動心を示したといわれる。

3

アエティオス（『学説誌』I 3, 16 [Dox.285]）

デモクリトスはダマシッポスの子でアブデラの人 …。

4

エウセビオス（『年代記』）

a) 第70オリュンピア祭年 [前500-497年] に自然哲学者のデモクリトスとアナクサゴラス、それに「暗い人」と呼ばれたヘラクレイトスが同時期に生まれたといわれている。

b) 第86オリュンピア祭年 [前436-433年¹] にアブデラのデモクリトスとエンペドクレスとヒッポクラテス … が生まれたといわれている。 [アブラハム暦1581年=第86オリュンピア祭年の2年目=前435年]

(1) この年数はこれらの人々の盛年(アクメー)の表記ではないかと考えられている。さもないと、a と b の表記が調和しないわけである。しかしいずれにしても、エウセビオスの記している年数はあまり正確とはいえない。

『復活祭年代記』 (317, 5)

デモクリトスは100歳生きて死んだ [第105オリュンピア祭年の2年目=前359年]。

5

ディオドロス（『世界史』XIV 11, 5）

同じ頃 [第94オリュンピア祭年の1年目=前404年]、哲学者のデモクリトスもまた90年の人生を終えて死んだ。

6

擬ルキアノス（『長寿について』18）

アブデラのデモクリトスは104年間生きた後、食を断って死んだ。

ケンソリヌス（『生誕の日について』15, 3）

アブデラのデモクリトスや弁論家のイソクラテスもまたレオンティノイのゴルギアスの年齢近くまで達した。このゴルギアスは古人すべての中で最も高齢に達した人であって、100歳を越えてなお8年生きたことがあまねく知られている。

7

アリストテレス（『気象論』B 7. 365 a 17）

[地震について] すなわちクラゾメナイのアナクサゴラス、それ以前のところではミレトスのアナクシメネス、これら二人の後ではアブデラのデモクリトスが [地震について] 見解を表明した。

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』VII 389）

さて、デモクリトスとプラトンがプロタゴラスに反対して教えているように …¹。

（1）本章A 1 1 4にこれにつづく文が掲載されている。また本章B 1 5 6参照。

アテナイオス（『食卓の賢人たち』VIII 354 C）

同じ手紙の中でエピクロスはまたプロタゴラスについてこんなことをいっている。このソピストは最初は運び屋、木材運搬人であったが、デモクリトスの書記となった。そのそもそものきっかけはその独特な木材の積み上げ方であって、それに感心したデモクリトスが彼を引き取り、ある村で文字を教えたのである。そしてそこからソピストとして活動するようになったというのだ。

ピロストラトス（『ソフィスト伝』10 p.13, 1 Kayser）

プロタゴラスはアブデラの人で、ソピスト。故国でデモクリトスの弟子となった。またクセルクセスのギリシア進攻の時にペルシアからきていたマゴス僧とも交わった。

『スーダ』（「ピッポクラテス」の項）

彼〔ヒッポクラテス〕は最初父親の弟子になった。そしてその後、セリュンブリアのヘロディオス¹や弁論家にして哲学者のレオンティノイのゴルギアス、またある人によればアブデラのデモクリトスの弟子になった。というのも、彼は若いとき、老人であったこの人に近づいたことがあったからである。またある人によればプロディオス²の弟子にもなった。

- （1）前5世紀に活躍したクニドス派の医師。プラトンはソピストのひとりとして言及している。
 （2）ケオス島イウリス出身のソピスト。ソクラテスの同時代者。神々として敬われているものはそれから得られる利益のゆえに人々がそうするにいたったものであるとして、ギリシアの伝統的な宗教に対して懐疑を表明した。

『スーダ』（「ディアゴラス」の項）

彼〔ディアゴラス¹〕が才能ある人物であることをアブデラのデモクリトスは見て取り、奴隷身分にあった彼を一万ドラクマで買い取って弟子とした。また彼〔ディアゴラス〕は抒情詩にも手を染めたが、時代的にはピンダロス²やバッキュリデス³より後で、メラニッピデス⁴より年長である。したがって第78オリュンピア祭年〔前468-465年〕頃盛年であった。

- （1）前5世紀の後半におもにアテナイで活動したメロス島出身の抒情詩人。詩人としてよりも無神論者として知られていた。
 （2）ピンダロスについては、エンペドクレスの章A 2 6の注2参照。
 （3）前5世紀の前半に活躍したケオス島出身の抒情詩人。シモニデスの甥といわれる。ピンダロスの同時代者で、ピンダロスと共にシュラクウサイのヒエロン一世の宮廷で活躍した。ヒエロ

ンはバッキュリデスをピンダロスより高く評価したといわれる。

(4) メロス島出身のディテュランボス詩人。やはり前5世紀の前半に活躍。独唱の詩節を入れるなど、ディテュランボスに新風を吹き込んだといわれる。

11

ウェアリウス・マクシムス（『著名い行録』VIII 7 ext. 4）

ところで彼〔デモクリトス〕はアテナイに数年間滞在し、そのすべての時間を学説〔哲学〕を学び教えることに振り向けた。そして彼自身がある書物の中で証言しているところによると、その街で人に知られることなく暮らした。

12

ストラボン（『地理書』XV p.703）

〔インドの〕山岳地帯にシラスという名の川があるが、その川には何も浮かばない。ところで、デモクリトスはアジアの多くの地方を歩き回った人であるが、この話を信じていない。アリストテレスも信じていない。

13

キケロ（『最高善と最高悪について』V 19,50）

〔その上〕ピュタゴラスについて語るべきであろうか。プラトンについて語るべきであろうか。あるいはデモクリトスについて語るべきだろうか。というのも、これらの人たちは知りたいという欲求に駆られてはるか遠隔の地まで歴訪した人々であることをわれわれは知っているからである。

物語風証言

14

ピロン（『神の摂理について』II 13 p.52 Aucher）

ところで、もう一方のデモクリトスも（彼は名家の出であったため裕福で、莫大な資産の所有者であったが）知恵〔哲学〕に最高度に親しみたいという欲求に囚われていたために、通常よこしまで卑しい者の手に帰するのが常であるところの盲目的で厭うべき富はこれを退け、むしろよき者とのみ慣れ親しむものなるがゆえに決して盲目的でもなければ変わることもない富〔哲学〕を求めた。それがために彼は一般に受け入れられている祖国の法に背いているとの印象を与え、まるで悪しきダイモーンでもあるかのように風評された。かくして彼は、祖国の法を遵守しない者には埋葬を拒絶すべしと定めた当時アブデラに施行されていた法のためにあわや自身の墓を奪われるという危険にさらされたのである。このことは、実際もしコスのヒッポクラテスが彼に対して抱いていた好意によって同情を獲得していなかったならば、デモクリトスの身に降りかかっていたことであろう。彼らは知恵〔哲学〕に関して互いに競い合う仲だったのである。彼は『大宇宙』と呼ばれた彼の有名な著作によって100タラントンの（ある人のいうところによれば、さらにそれに300アッティカ・タラントンを加えた）評価を得た。

ピロン（『観想的な生活について』 p.473 M.）

アナクサゴラスとデモクリトスをギリシア人たちは哲学への憧れに負けて土地を羊が荒廃させるにまかせたことで讃えている。

ホラティウス（『書簡詩』 I 12, 12）

われらただ驚くのみ。デモクリトスの羊どもが田や畑を食い尽くしたが、その間もそのはやき心は肉体を離れて異邦にありしと聞くならば。

アイリアノス（『ギリシア奇談集』 IV 20）

伝えによれば、アブデラのデモクリトスは多方面にわたる知者であったが、また世に隠れてあることを望んでいて、実際にもまた彼は特にそのことに熱心であった。そのため事実彼は多くの土地を歴訪した。彼はカルダイア人のもとにも行ったし、バビロンにも行った。そしてまたマゴス僧¹やインドの知者たちのところへも赴いた。父のダマシポスの残した財産が兄弟三人に三分されたが、彼は旅の費用にあてるために銀貨のみを取って、残りは兄弟に譲ってしまった。それゆえにテオプラストス²もまた彼のことを褒めて、デモクリトスはメネラオスやオデュッセウスよりも価値あるものを集めつつ遍歴したと語っているのである。というのも、メネラオス³やオデュッセウスの放浪は実際フェニキア商人のそれと異ならず、財宝を集めて、それを陸路海路の漂白の名目としたのだから。

（1）古代ペルシアの拝火教の僧侶。魔術に長けていた。ピュタゴラスの章9の注4参照。

（2）テオプラストスについては、タレスの章B 1の注1参照。

（3）トロイア戦争時のスパルタ王。妃のヘレナがトロイアの王子アレクサンドロス〔パリ〕に奪われたことからトロイア戦争が起こった。ギリシア軍総大将アガメムノンの弟。

プリニウス（『博物誌』 XVIII 273）

こんな話がある。天と地の結びつきを初めて理解し明らかにしたデモクリトスは（市民中最も裕福な者たちは彼のそのような関心を軽蔑していたが）、われわれが今述べたところの、そしてやがてもっと十分に明らかにするであろうところの根拠に基づいて、すばる星の出現ということからオリーブ油が高騰するであろうことを予見し、その地方一帯のオリーブをすべて買い占めた。その時にはオリーブの作柄が期待されていたためにひどく安価であったのである。清貧と学問による静謐さが彼の第一の関心事であることを知っていた人々はそのことに驚いたが、やがて事が明らかとなり、莫大な富が彼に転がり込んだ。しかし彼は悔しがって煩悶する食欲な地主たちに代金を返してやり、そのようにして、富といったものは、彼にとっては、その気になれば容易に手に入れることのできるものなることを証明したことで満足した¹。

（1）同じ内容の話をアリストテレスはタレスについて報告している（『政治学』 A 11.1259 a 6）。

タレスの章A 10参照。

プルタルコス（『食卓歓談集』I 10, 2 p.628 C）

その学問好きのゆえに知者のデモクリトスに起こったのと同じことがわれわれの身にも起こったとすれば、どうだろう。思うに、この人はキュウリを食べたところ、その味が蜂蜜のそれであるように思えたので、召使女にどこからそれを買ってきたのか尋ねた。それで彼女がとある農園からであることを告げると、彼はムクリと起き上がって、案内し、その場所を教えるように命じた。女は驚いて、何をしようとされているのか尋ねた。「甘さの原因を見出さねばならぬ。その場所を見れば、それが分かるだろう」と彼はいった。「まあ、まあ、お座りください。」女は笑いながらいった。「わたしはそれと気付かずにキュウリを蜜の味の着いた容器に入れていたのです。」それで彼は怒ったように「疲れさせるのう、お前は。それでもわたしはやはり説明を企てよう。甘さがキュウリに固有のもの、生来のものであるかのように着いているのだから、その原因を尋ねよう」といった。

18

クレメンス（『雑録集』VI 32）

デモクリトスは天空の観測から多くのことを予言し、「知恵」と呼ばれた。ところで兄弟のダマソスは彼を優しく迎え入れたが、彼はある星から推測して「まもなく」豪雨があろうことを予言した。そこで彼のいうことを信じた人々は収穫物を集め寄せたが（というのも夏の季節だったのでまだ脱穀場に置かれていたのである）、他の人たちは、予期しない豪雨が突然襲ってきたために、すべてを駄目にしてしまった。

プリニウス（『博物誌』XVIII 341）

こういう話が伝えられている。その同じデモクリトスが、炎熱の暑さの中で彼の兄弟のダマソスが刈り取りをしていたとき、残った作物はそのままにして、すでに刈り取ったものを急いで屋内に取り込むように忠告した。やがて激しい雨が降ってきて、予言が立証された。

19

ピロストラトス（『アポロニオス伝』VIII 7, p.313, 17 Kayser）

デモクリトスがかつてアブデラの人々を疫病から解放したことを思うとき、また度を越して吹き荒れた季節風を鎮めたといわれているアテナイ人のソポクレスのことを思い浮べるとき、そしてさらにアクラガスの人々の上に襲いかかってきた乱雲の動きを阻止したエンペドクレスのことを聞くとき、一体いかなる知者が国家のために努力することをなおざりにしたと君は考えるだろうか。

20

ユリアノス（『書簡集』201 B-C）

というのもこんな話があるからである。アブデラのデモクリトスは美しい妃の死に悲嘆するダレイオスに対して語って慰めることができそうなどんな言葉も見出さなかったもので、もし必要となるものすべてを提供してくださることを約束していただけるのなら、故人をこの世に連れ戻して差し上げましょうとダレイオスに約束した。それでダレイオスは必要なものは何ひとつ遠慮しないで取って、約束を実現するように依頼した。少し時が経って、デモクリトスは、事を実行するのに必要な他のも

のはことごとく得られたが、ひとつだけはまだで、それをさらに必要としているといった。そしてそれは、彼自身はどのようにして手に入れたらよいのか分らないが、全アジアの王であるダレイオスであればおそらく見出だすに難しくないであろうものだというのであった。王にのみ見出すことが許されているほどのものとは何なのか、ダレイオスは尋ねた。それに対してデモクリトスは、もし王妃の墓石の上に生前何らの苦しみも味わったことのない者の名前を三つ刻むことができるなら、彼女はたちどころに生き返るであろうと答えたという。というのも、この秘儀の定めには逆らえないからであると。それでダレイオスは大いに困惑して、生前その身にどのような苦しみも蒙ったことのない人物をひとりも見出だせずにいたところ、デモクリトスはいつものように笑いながらいった。「それではどうして、御身だけがかかる苦しみに巻き込まれたかのように、埒もなく嘆き悲しまれるのかな。不条理極まるお方よ。かつて生を受けた者で、自らの苦難を分け持たぬ者などひとりも見出だせなかったというのに。」

21

キケロ（『弁論家について』II 58, 235）

そこで、その第一の点、笑いとはそもそも何であり、どのようにして引き起こされるのかということとは・・・デモクリトスが知っていたであろうことだ。

ホラティウス（『書簡詩』II 1, 194）

デモクリトス、もしこの世にありしならば、さぞや笑えしことなりき。

ソティオン（セネカの師の）（『怒りについて』II [ストバイオス『精華集』III 20, 53]）

知者たちには怒りではなく、ヘラクレイトスの場合には涙、デモクリトスの場合には笑いが起こるのであった¹。

（1）後世からヘラクレイトスは「泣く哲学者」、デモクリトスは「笑う哲学者」と呼ばれた。

ユウェナリス（『サテュリコン（諷刺詩）』10, 33）

デモクリトスは絶えざる笑いで肺をうち震わせるのを常としていた。

ユウェナリス（『サテュリコン（諷刺詩）』10, 47）

その時にも彼〔デモクリトス〕は人々との出会いのすべてにおいて笑いの種を見出した。彼の知恵は、愚か者の国においても濃い霧の下においても、大いなる手本を与える最高の人物が生まれることを証している¹。

（1）デモクリトスの生国のアブデラは、次の古注にもあるように、愚か者が多く生まれたこと、それに一年を通じて霧が深かったことから「霧と愚か者の国」と呼ばれた。訳者が1998年の2月にアブデラを訪れたときも、アブデラの遺跡は霧の中にあった。

逸名著作家の古注（ユウェナリスの前掲箇所への古注）

すなわち、デモクリトスはアブデラの人であったが、そこではよく愚か者が生まれたのである。

キケロ（『トゥスクルム荘対談集』V 39, 114）

デモクリトスは光を失っていたので、もちろん白と黒は見分けることができなかったが、しかし善と悪、公平と不公平、誉れと恥辱、有用と無用、偉大と卑小は識別することができたのであり、そして多彩な色はなくとも幸福に生きることはできたが、物事の理解なくしてはできなかったのである。そしてまたこの人物は肉眼の視力によって心の眼差しが妨げられると考えていて、他の人々がしばしば足元にあるものすら気づかずにいるときに、かの人は広大無辺な全世界を遍歴して、いかなる境界にも足を止めることはなかったのである。

ゲリウス（『アッティカの夜』X 17）

哲学者のデモクリトスは、ギリシアの歴史文書の中に余人にもまして尊重されるべき人物として、また古くから権威を認められた人物として記されているが、自然の理法の観照において、もしその心の認識と考察を視覚の惑わしや肉眼の妨害から解放したなら、それらはより活発に、より精確になろうと考えて、眼の光を自ら奪い去ったとのことである。彼のこの行為、および極めて巧みな工夫によっていとも容易に自らを盲目にした方法そのものについては、詩人のラベリウス¹が『綱作り』と題した笑劇（その詩句はたしかに十分な洗練さと絵画性をもって仕上げられている）の中で描いているが、しかし自らの意志で盲目になる理由は別に仕立てられていて、彼はそれをそこで展開している筋の中にうまく織り込んでいる。すなわちラベリウスのもとでこのことを語る人物は、若い息子の多大の浪費と道楽を嘆く貪欲でけちな金持なのである。ラベリウスの詩句はこうである。

アブデラの自然哲学者デモクリトスは
立ち昇るヒュペリオン〔太陽〕に向けて青銅の盾を立てり。
そは青銅の輝きにておのが眼を扶らんがためなり。
かくして彼は太陽の光にて鋭き眼光を抉り去れり。
邪悪なる市民どもの幸福なるを見ざらんがために。
かくわれも、輝く金貨のきらめきが
わが生涯の最後を盲目ならしめんことを欲す。
放蕩息子の幸福に暮らしおるを見ざらんがために。

- (1) デキムス・ラベリウス。カエサル時代のローマの笑劇作家。前106年頃生～43年没。騎士身分の出であったが、下品で派手な笑劇を得意とした。カエサルに無礼な態度をとり、公の場で侮辱を加えられている。

ルクレティウス（『事物の本性について』III 1039）

さらにまたデモクリトスは、熟したる老齡が精神の記憶運動の衰えを告げ知らせるや、自らすすんでその首を死に差し出せるなり。

ヒメリオス（『抜粋集』3, 18）

デモクリトスは、より優れた部分が健康たるようにと、すすんで身体を病んでいた。

テルトゥリアヌス（『護教論』46）

デモクリトスは欲情なしには女を見ることができなかったので、そしてわが物にならぬとなると辛かったのが、自ら盲目になったが、そういった矯正によって自らの節操のなさを告白しているのである。

プルタルコス（『知りたがりについて』12 p.521 D）

デモクリトスは自らすすんで火にかざされた鏡に視線を向け、そこからの反射を受けて視力を消し去ったというあの話は嘘である。すなわち、視力がしばしば外から呼びかけて思考を混乱させることのないように、そして〔いわば〕家の中であって、ちょうど通りに面した窓を塞いだような状態で思惟がその対象に向かって時を過ごすことができるように、彼はそうしたというのであるが。

ロンドン資料の逸名著作家（c.37, 34 ff.）

またそこで彼〔アスクレピアデス〕は次のようにいっている。ある話によると、デモクリトスは四日もの間何も食べないでいて、いよいよ〔埋葬のために〕運び出されるまでになっていたが、何人かの女からもう何日か生きつづけてくれるように呼びかけられた。その期間に行なわれるテスモポリア祭が不運にも彼女たちにとって無効のものになってしまわないようにというのであった。そこでデモクリトスは降ろすように命じて、パンの前に腰を降ろした。パンはできたての湯気を吹いていたという。そしてデモクリトスは籠から立ち昇る湯気を吸って力をつけ、なお〔幾ばくかの〕余命を生きたとのことである。

カエリウス・アウレリアヌス（『急性疾患について』II 37）

したがって、酔をしみ込ませた麦や焼きパン、あるいはキュドニア林檎とかミルテの実などといったものがよい。というのは、これらは衰弱によって消耗した体力を保つからであって、このことは理論も証明しているが、デモクリトスの死の引き延ばしというあの人口に膾炙している例も証している。

アテナイオス（『食卓の賢人たち』II 46 E）

話によれば、アブデラのデモクリトスは高齢のゆえに自分を人生から連れ出そうと決心して日々食物を切り詰めていたが、テスモポリア祭の期間が始まり、家の女たちが祭りを祝えるように祭典の期間だけは死んでくれるなと懇願するので、それを聞き入れて、蜂蜜の壺を自分の傍らに置くように命じた。そして蜂蜜から立ち昇る香りのみを使って、その男は十分な日数だけ生き抜いたとのことだ。とにかくデモクリトスはいつも蜂蜜を喜んだし、そしてどうしたら人は健康に過ごせるだろうかと尋ねる人には、〔身体の〕内側は蜂蜜で、外側はオリーブ油で潤すならばと答えるのだった。

マルクス・アウレリウス（『自省録』III 3）

虱がデモクリトスを（殺した）¹。

(1) 風で死んだといわれているのは、ペレキュデス。マルクス・アウレリウスの混同と思われる。

著 作

31

『スーダ』(「デモクリトス」の項)

彼〔デモクリトス〕の真正の書物は二点あり、『大宇宙』¹と『宇宙の本性について』がそれである。彼はまた手紙も書いている。

(1) 『大宇宙』はレウキッポスの作ともいわれている。

32

『スーダ』(「カリマコス」〔著作目録〕の項)

デモクリトスの言葉と学説一覧。

ビュザンティオンのステパノス(『地理学事典』p.640, 5 Mein.)

文法家のヘゲシアナクス¹は『デモクリトスの文体について』1巻と『詩の文体について』を書いた。彼はトロアス地方の人であった。

(1) トロアス地方出身の文法家という以外、不詳。

33

ディオゲネス・ラエルティオス(『ギリシア哲学者列伝』IX 45-49)

彼〔デモクリトス〕の著作についてもまたトラシュロスがプラトンの作品に行なったのと同じように四部作の形で順に記録している。

倫 理 学 関 係

I. 『ピュタゴラス』『知者のあり方について』『ハデス〔冥界〕にいる者たちについて』『トリトゲネイア¹』(これはすなわち、人間に係わるすべてのものを維持する三つのものは彼女から生ずるからである。)

II. 『男らしさについて』あるいは『徳について』『アマルテイアの角²』『明朗快活さについて』『倫理学覚書』。ちなみに『仕合せ』という名の書物は見出されない。

以上、倫理学関係。

自 然 学 関 係

III. 『大宇宙』(テオプラストス一門の人たちはレウキッポスの作としている。)『小宇宙』『宇宙誌』『惑星について』

IV. 『自然について』第1巻。『人間の本性について』(あるいは『肉体について』)第2巻。『知性について』『感覚について』(ある人たちはこれらの二著を一緒にして『魂について』という表題をつけている。)

V. 『味について』『色について』『種々の形について』『形の変換について』

VI. 『補説』（これは上記の諸説をさらに補強するものである。）『剥離像〔エイドーラ〕について』あるいは『予知について』『論理的規準について』3巻。『問題集』
以上、自然学関係。

分類づけされないもの

『天界の諸原因』『天空の諸原因』『地上の諸原因』『火、および火の中にあるものに関する諸原因』『音に関する諸原因』『種子、植物、果実に関する諸原因』『動物に関する諸原因』3巻。『原因雑纂』『石について』
以上が分類づけられない諸著作。

数 学 関 係

VII. 『意見³の相違について』あるいは『円と球の接触について』『幾何学について』『幾何学の諸問題』『数』
VIII. 『通訳不能な線分と立体について』2巻。『投影図』『大年』あるいは『天文学』ないし『暦』『クレプシュドラ〔水時計〕との競争』（？）
IX. 『天界誌』『地誌』『極地誌』『光線論』
以上、数学関係。

音 楽 関 係

X. 『リズムとハーモニについて』『詩作について』『詩句の美しさについて』『発音しやすい文字としにくい文字について』
XI. 『ホメロスについて』あるいは『正しい語句と訛りについて』『歌について』『言葉について』『語彙集』
以上、音楽関係。

技 術 関 係

XII. 『予後⁴』『食餌法について』あるいは『食餌論』『医術上の知恵』『時宜に合わないものと適うものに関する諸原因』
XIII. 『農業について』あるいは『測地論』『絵画術について』『戦術論』および『重装戦闘論』
以上、技術関係。

ある人たちは以下のもまた『覚書』の中から抽出して、独立した書物として並べている。『バビロンの神聖文書について』『メロエの神聖文書について』『オケアノス周航』『歴史について』『カルダイア人の言葉』『プリュギア人の言葉』『発熱、および病気が原因で咳き込む人について』『法の起源』『ケルニカ(?)⁵あるいは防具』

なお、ある人たちが彼に帰しているこれら以外の著作のうち、そのあるものは彼自身の著作から抜粋して作成されたものであり、あるものは、一般にもそうと認められているように、他の人のものである。彼の書物については、以上これだけのものが報告されている。

(1) アテナ女神の別称。このような別称をアテナ女神が得た理由については、ポイオティアのトリトン川、あるいはアルカディアないしはリュビア地方のトリトニス湖のほとりで彼女は生まれたからという説や、海神トリトンに育てられたからという説、またゼウスの頭(トリトー)か

ら生まれたからという説など、諸説ある。オリオンがこの名称の所以を哲学的に解釈していることについては、本章のB 2 参照。

- (2) クレタ島のイデ山でゼウスを育てた牝山羊。その角から神酒のネクタルと神々の食べ物であるアンブロシアが溢れ出た。そこから「豊饒の角」の意味になった。
- (3) 「意見の」(γνώμη)を「角の」(γωνίη)と校訂し、『角の相違について』と読むことをヒックスは提案している(Loeb Classical Library, Diogenes Laertius II p.458)。
- (4) 病気の施療後の経過について述べたもの。
- (5) Χέρνικα は意味不明であり、ディールス／クランツも疑問符を付している。
Χέρνικα を Χειρόκμητα [手製の] と校訂して、手製の防具について述べた書ではないかとする解釈もある。

文 体

34

キケロ (『弁論家について』 I 11, 49)

かの自然学者のデモクリトスが、一般にもそういわれているし、またわたしもそう思うが、もし華麗に語ったとすれば、彼の語った題材は自然学者のそれであったにせよ、言葉の華麗さそのものは弁論家のそれに属するものと見なされるべきである。

キケロ (『弁論家』 20, 67)

というのも、耳で聞くものでも何らかの尺度に合っているものは、たとえ詩句ということからはほど遠いにしても(すなわちこれが弁論の弱点であるわけであるが)、いずれも韻律と呼ばれるからであって、これはギリシア語では「リュトモス」[リズム]といわれる。したがって、わたしの見るところ、ある人たちにはプラトンやデモクリトスの言説が、詩ということからは隔たっているが、それよりももっと動きに勢いがあり、また極めて明るい言葉の輝きを有していることから、喜劇詩人のそれにもまして詩と見なされるにふさわしいと思われたのである。

キケロ (『卜占について』 II 64, 133)

ヘラクレイトスははなはだ晦渋であるが、デモクリトスにはそういった面は微塵もない。

ハリカルナッソスのディオニュシオス (『構成論』 24)

わたしの見解では、哲学者の中ではデモクリトスとプラトンとアリストテレスが[平均的な文体において衆に抜きん出ている]。というのも、彼らよりも上手に言葉を混ぜ合わせた人は他に見出せそうにないからだ。

学 説

[デモクリトスを批判する書が多数存在したことを示す証拠として]

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』 294,33)

アリストテレスの『デモクリトスについて』から若干のものを[ここに] 転載することによっ

て…。 [本章A 3 7 参照]

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』 V 26)

[アリストテレスの著作目録] 『デモクリトスの著作からの諸問題』 2 巻。

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』 V 49)

[テオプラストスの著作目録] 『デモクリトスについて』 1 巻。

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』 V 43)

[テオプラストスの著作目録] 『デモクリトスの天文学について』 1 巻。

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』 V 87)

[ポントスのヘラクレイデス¹の著作目録] 『魂について、自然について、剥離像 [エイドーラ] について、デモクリトスを駁す』

(1) ポントスのヘラクレイデスについては、タレスの章A 1 の注1 4 参照。

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』 V 88)

[ポントスのヘラクレイデスの著作目録] 『デモクリトスに対する注釈』 1 巻。

ピロデモス (ストアのゼノンの著作への古注 [Usener, *Epicurea*, p.97,10])

『デモクリトス論駁』において、終始エピクロスはその立場に立っている。

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』 X 24)

[エピクロス派のメトロドロス¹の著作目録] 『デモクリトス論駁』

(1) ランプサコス出身の哲学者で、エピクロスの弟子。本章A 5 3 の注2 参照。

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』 VII 174)

[クレアンテス¹の著作目録] 『デモクリトス論駁』

(1) ストア派の哲学者でストアの第2代目の学頭。ゼノンの弟子。前3 3 1 – 2 3 2 年。

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』 VII 178)

[スパイロス¹の著作目録] 『最小のものについて』 『原子と剥離像 [エイドーラ] を駁す』

(1) 前3 世紀のストア派の哲学者。ボスポロス地方出身。ヘラクレイトスの章A 1 の注2 1 参照。

アリストテレス (『生成消滅論』 A 2. 315 a 34)

一般に [生成・消滅に関する] いずれの問題にも誰ひとりとして表面的なこと以上に関心を向ける

ことはなかったが、ただデモクリトスだけは例外で、彼はあらゆる問題について想いを致したようで、すでにその論じ方において違っている。

35 a

プルタルコス（『倫理的な徳について』7 p.448 A）

アリストテレス自身もデモクリトスも、またクリュシッポス¹も、以前に彼らが奉じていた説の一部を、騒ぎ立てることも歯ぎしりすることもなく、むしろ喜んで放棄した。

- (1) キリキアのソロイ出身のストア派の哲学者。前280年頃－207年。クレアンテスの弟子で、ストア第3代目の学頭。彼は頭脳明晰で弁が立ち、メガラ派や当時懐疑的傾向を強めていたアカデメイア派と盛んに論争した。またおびただしい数の著作をものし(その数は705以上にもものぼるといわれている)、ストアの学説を普及させた。クリュシッポスがいないかなら、ストアもなかったであろうといわれるほどである。

36

アリストテレス（『動物部分論』A 1. 642 a 24）

先人たちがこうした方法〔アリストテレス的な学問方法〕にいたらなかった理由は、「何であるか」〔本質〕や実体を規定するということがなかったからである。デモクリトスが初めてそうしたものに触れたが、しかしそれも自然学的考察に不可欠なものとしてではなく、事柄そのものに促されてであった。ソクラテスの時代になって事は促進されたが、自然についての探究は沙汰済みとなった。哲学に携わる人たちは有用な徳や政治的な問題に転じて行ったのである。

アリストテレス（『形而上学』M 4. 1078 b 19）

なぜなら、自然学者の中ではただわずかにデモクリトスがそのことに触れ、温と冷についてある意味で定義を行なったのみだからである。

37

シンプリキオス（『アリストテレス「天体論」注解』294, 33）

アリストテレスの『デモクリトスについて』から若干のものを〔ここに〕転載することによって、かの人たち〔原子論者〕の考えがどのようなものであったか、明らかにすることができよう。「デモクリトスは永遠なるものの本性は微小な実体であり、それらは数において無限であると考えた。そしてそれとは別に大きさにおいて無限な場所を設定する。彼はこの場所を『空虚』とか『何ものでもあらぬもの』とか『無限なるもの』といった名称で呼び、他方実体のそれぞれを『もの』(δέν)¹とか『密なるもの』とか『あるもの』と呼んでいる。実体はわれわれの感覚では捉えられないほど小さいと彼は考える。それらにはありとあらゆる姿、ありとあらゆる形があり、また大きさにおいてもさまざまである。そしてそれらからすぐさま、ちょうど文字を組み合わせるように、目に見えるもの、感覚しうる塊が生み出され、かつ合成される。すなわち、それらはその非同質性と、その他上述のさまざまな相違によって争いながら空虚の中を運ばれるのであり、運ばれつつ落下し、それらを触れ合わせ、互いに接近させるそういった絡み合いが演じられるのである。しかしながら本性はひとつであるから、本来の意味ではそれらからどのようなものも〔新たに〕生み出されるわけではない。なぜなら、二つのもの、あるいはそれより多くのものがある時ひとつのものになるというのは、げにバカげたこ

とだからである。諸実体が一定の間互いに『ひとつに纏まっている』ことの原因として、彼は纏れ合いと捕捉し合いを挙げている。すなわち、それらのあるものは凸凹であり、あるものは鉤型であり、あるものは窪んでおり、あるものは突起しており、その他、無数の違いを持っているからである。したがって、それらは一定期間の間は自らを支え、ひとつに纏まっているが、やがて周辺の取り巻くものからもっと強力な必然が立ち現れてきて、それらを激しく揺さぶり、四散させることになる。と彼は考えている。」デモクリトスはまた生成や、それと反対の分解ということ、動物についてだけでなく、植物や宇宙、要するに全感覚物について語っている。したがって、生成は原子の結合であり、消滅は分解であるとするなら、デモクリトスの場合も生成は変化であることになる。

- (1) 「もの」(δέν) というのは「何ものでもあらぬもの」(μηδέν) から「あらぬ」(μη)をとって造られたデモクリトスの造語。本章A 4 9のガレノスの報告参照。

38

シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」注解』28, 15)

彼〔レウキッポス〕の仲間のアブデラのデモクリトスもまた、ほぼ同じように、充実体と空虚を原理とした。その一方を「あるもの」、他方を「あらぬもの」と彼は呼んでいる。すなわち、諸存在にとっての素材として彼らは原子を想定し、自余のものをそれら原子の相違によって生み出すのである。相違は三つあって、恰好、向き、並び具合である。これは形と位置と配列というのと同じである。というのも、同じものは同じものによって動かされ、同類のものは同類のものに向かって運ばれるのが自然の道理であるし、また諸々の形〔原子〕のそれぞれが異なる結合の中に置かれると別の状態を作り出すのが自然だからである。したがって、原理が無限であれば、様態も実体も、そのすべてを、それらが何によって生じ、またどのようにして生じるか、うまく説明できると彼らは主張するのである。それゆえまた、元素を無限とすることによってのみ、すべての生起は理に適ったものになると彼らはいふ。そして原子の形が数において無限であるのは、「何ものもこれこれのものである以上にこれこれのものであるわけではないがゆえ」〔すなわち何ものもこれといった定まったものであらねばならないという特別な理由はないがゆえ〕であるという。すなわち、以上のことを彼らは無限ということの理由としているのである。

アリストテレス (『生成消滅論』A 9. 327 a 16)

同じ物体が連続していながら、ある時には液体であり、ある時には固体であるのをわれわれは見るが、決してデモクリトスのいうように分離や結合によってそういった変化を受けるのではないし、また向きや並び具合によってでもない。というのは、液体から固体になったからといって、その本性を転換したわけでも、変えたわけでもないからである。

39

擬プラタルコス (『雑録集』7 [Dox. 581])

アブデラのデモクリトスは万有を、それは決して誰かによって作られたといったものではないがゆえに、無限であるとした。そしてまた、それは不変であると語ると共に、また一般に万有がどのようなものであるか、言葉明瞭に説明している。今生じているものの原因にはいかなる始まりもなく、最初から完全に無限の時間を通じて「かつて生じたものも、現に存在するものも、存在するであろうものも」そのすべてが端的に必然によって予め定められているという。太陽や月の生成についても彼は

語っており、それらは独自の軌道を運行しているが、熱い本性をまだ完全に獲得しているわけではなく、また最高度の明るさを全体として獲得しているわけでもなく、むしろ反対であって、大地周辺の本性を未だ色濃く残しているのである。すなわち、それら双方とも以前には宇宙のある固有の基礎に基づいていたのであるが、後になって太陽の円軌道が拡大されるにつれて、火がその中に取り込まれたのである。

40

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』I 13 [Dox. 565]）

(1) デモクリトスはレウキッポスの知人である。デモクリトスはダマシッポスの子でアブデラの人。インドで多くの裸の行者と交わり、またエジプトでは神官たちと、バビロンでは天文学者やマゴス僧と交わった。

(2) 元素について彼の語る場所はレウキッポスと同じであって、充実体と空虚がそれであるとし、一方の充実体を「あるもの」、他方の空虚を「あらぬもの」と彼はいう。そして諸存在は空虚の中を絶えず運動していると彼はいった。世界は無限〔無数〕であって、大きさにおいてさまざまである。ある世界には太陽も月も存在しないが、ある世界にはわれわれのところのそれより大きいのがあり、またある世界にはもっと多くある。(3) 世界の間の間隔は不均等で、あるところには多くの世界が存在するが、あるところは少なく、またある世界は成長しつつあるが、ある世界は最盛期にあり、ある世界は衰えつつある。そしてまた、あるところでは生まれつつあり、あるところでは消え去らんとしている。それらは互いにぶつかることによって消滅する。幾つかの世界は動物も植物も欠いており、また水分がまったくない。(4) われわれの住む世界では、大地が諸星に先がけて生成した。そして月が〔最も〕下にあり、次いで太陽があり、その上に恒星がある。だが惑星は、そのそれぞれが高さを異にしている。世界は、もはや外部から何も受け取ることができなくなるまで、盛りを保つ。

彼は、人間界におけるすべては笑いに値しているとして、すべてを笑い飛ばした。

41

アリストテレス（『自然学』Γ 4. 203 a 33）

デモクリトスは、第一のものども〔原子〕のあるものが他のものから生じるといったことは決してないという。しかしそれでも、少なくとも共通の物体がそれらすべての原理としてあるのであって、それが部分ごとに、大きさと形の点で相違を呈するのである。

42

アリストテレス（『形而上学』Z 13. 1039 a 9）

なぜなら、彼〔デモクリトス〕は二つのものからひとつのものが生じるのも、ひとつのものから二つのものが生じるのも不可能であるというからである。というのも、彼は諸々の大きさ、すなわち原子を実体とするからである。

〔参照〕アリストテレス（『生成消滅論』A 3. 318 b 6）

パルメニデスは二つのもの、あるものとあらぬものがあるといい、火と土がそれであると主張している。

アレクサンドリアのディオニュシオス（『自然について』 [エウセビオス『福音の準備』 XIV 23, 2-3 より]）

なぜなら一方、数において限りない不滅にして極小の小物体を原子と呼び、また大きさにおいて限りのない空虚な空間を持ち出す人たちは、それら原子は空虚の中を行き当たりばつたりに運動し、でたらめに突進するために互いに偶発的にぶつかり、形が多様であるために絡み合って相互に捕捉し合い、そのようにして世界と世界の中にある諸物を、否、むしろ無限〔無数〕の世界を造り出すというからである。これがエピクロスとデモクリトスの説であるが、ただ一方 [エピクロス] は、原子はすべて極小であり、それゆえ知覚できないとしたのに対し、他方のデモクリトスは極めて大きな原子もあると想定した点で、意見を異にしていた。しかし両者とも、原子といったものがあり、またそれがそのように語られるのは解体できない固さゆえであるとしている。

[参照] エピクロス（『ヘロドトス宛書簡』 I 55 [ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』 X 55]）

さらにまた現象の事実によって逆証されないために、原子にはどんな大きさもあると考えるべきでないが、しかし大きさに一定の差異があるとは考えるべきである。

ヘルメイアス（『異教哲学者を諷す』 13 [Dox. 654]）

デモクリトスは … あるものとあらぬものを原理とする。一方のあるものとは充実体であり、他方のあらぬものとは空虚のことである。充実体が空虚の中で向きと恰好によって万物を造り出すのである。

アリストテレス（『自然学』 A 5. 188 a 22）

デモクリトスは、固体と空虚があり、その一方はあるものであり、他方はあらぬものであるという。さらに位置と形と配列による〔違いがある〕。これらが反対性の種別であって、位置には上と下、前と後があり、形には角、直、曲がある。

アエティオス（『学説誌』 I 3,16 [Dox. 285]）

デモクリトスは密なものと空虚を〔原理とする〕。

ガレノス（『脈搏の見分け方について』 VIII 931 K.）

「より密なる」ということが [アルキゲネス¹において] 何を示しているのか、必ずしも明確でないが、それはギリシア人にとって、この名称がこのような問題において語られるのが一般的でないからである。例えばこのパンは密であるといった言い方を彼らはしたが、しかし何か他の物体が彼らによってこのような呼び方をされたのをわたしは知らない。アルキゲネス自身は、… わたしが思うに、「充実した」というところを、それに代えて「密なる」という呼び方をしたのであろう。

(1) シリアのアパメイアの人。トラヤヌス帝の時代(紀元98-117年在位)にローマで医者と

してよく知られた存在であった。彼の学説は全体として折衷的であるが、主として氣息派の影響下にあった。その治療法の主導的原理は八つの体液の不調を取り除くことにある。ガレノスの脈搏の理論は彼のそれを借用したものである。しかしその他の点ではガレノスは彼の教えに反対した。

46 a

アリストテレス（『天体論』Γ 7. 305 b 1）

ところで、エンペドクレスやデモクリトス一派の人たちは、彼ら自身はそれと気づかずに、相互生成ではなく、見かけ上の生成を説いているのである。… (12)より稀薄なものはより大きい場所を占めることになる。このことは少なくとも三態変化において明らかである。すなわち、液体が蒸発して気化すると、それを容れている容器が狭いために破裂するのである。したがって、もし一般に空虚といったものは存在せず、あるいはまたそういったことを語る人たち〔エンペドクレスやアナクサゴラス〕のいうように、物体は膨張しないとすれば、明らかに上のようなことは起こりえない。しかし空虚が存在し、膨張があるとしても〔デモクリトス〕、分離されると必ずより大きい場所を占めるとするのにも理由がない。

47

アエティオス（『学説誌』I 3,18 [Dox. 285]）

すなわち、デモクリトスは大きさと形の二つを語ったのに対し、エピクロスはそれらにさらに第三のものとして重さを加えた。なぜなら、彼のいうには、物体は重さによって運動すること必然だからである。

アエティオス（『学説誌』I 12,6 [Dox. 311]）

デモクリトスは、第一の物体（「密なるもの」とはこれのことである）は重さを有さず、相互衝突によって無限の内を運動するとする。また宇宙大の原子もあるとする。

キケロ（『宿命について』20, 46）

原子は偏ると彼〔エピクロス〕はいう¹。まず第一に、なぜなのか。というのも、それらはデモクリトスの場合の「衝突」と呼ばれた推進力とも、エピクロス、あなたの場合の重力や重さとも異なる何か別の運動力を得たことになるからだ。

- (1) いわゆるエピクロスの「偏倚」(παρέγκλισις)の思想。原子は最初はすべて等速で垂直に落下しているが、ある不定の瞬間に不定の場所で若干の原子の落下運動に当初の垂直方向からわずかな偏りが生じるといふ。その結果原子間に衝突が起こり、ある原子は上に突き返されて跳ね返り、ある原子は絡み合って、気体や液体や固体状の諸物体が形成されるというのがエピクロスの事物生成論。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』42, 10）

デモクリトスは、原子は本性上は不動なるものであるが、「衝突」によって運動するとする。

アエティオス（『学説誌』I 23, 3 [Dox. 319]）

デモクリトスは、振動によるのも運動のひとつの種であると主張した。

48

アエティオス（『学説誌』I 16, 2 [Dox. 315]）

原子を立てる人たちは、分割は〔それ以上〕部分に分けられないところで立ち止まり、無限に進み行くことはないとする。

48 a

逸名著作家の古注（エウクレイデス『原論』X 1 への古注 [V 436, 16 Heib.]）

デモクリトスの徒のいうような、最小の大きさといったものはないのである。

48 b

アリストテレス（『生成消滅論』A 2. 316 a 13）

他方、デモクリトスはそれにふさわしい議論によって、すなわち自然学的な議論によってこの問題〔不可分な大きさが存在するという問題〕を確信したように思われる。われわれがいわんとしているところは議論が進む中で明らかとなろう。もし何らかの物体や大きさがどこまでも分割可能であり、しかも実際にもこのことがなされうると仮定するならば、難問が生じる。というのも〔その時には〕分割を免れるどのようなものがあるだろうか。なぜなら、どこまでも分割可能であり、実際にもこのことがなされうるとするなら、たとえ同時に〔一気に〕分割されるということはなくとも、どこまでも分割可能であるというこのことはいつまでもあろうことだからである。そしてこのことがなされたとしても、何ら不可能なことがなされたことにはならないのである。〔分割が〕真ん中でなされる場合〔分割が二分の形でなされる場合〕も同じことではないか。一般に、もし本性上どこまでも分割可能であったなら、分割されたであろうし、そうなされたところで不可能なことが生じたことにはならないであろう。数え切れないほどの部分へ数え切れないほど分割するということ、このこと〔自体〕は不可能なことではないからである。もっとも恐らく誰もそこまで分割しようとする者はいないであろうが。さてそこで、物体とはどこまでもかくのごとくなされうるのであるから、実際に分割されたとしよう。すると何が残るだろうか。大きさか。むろんありえない。そうでないとするなら何か分割されずに残ったことになるだろうが、どこまでも分割可能であったのである。しかしまた、物体もなく、大きさもなく、それでも分割はあるとするなら、それは点からなるか、すなわち、その構成要素は大きさを有さないか、あるいはまったくの無であるかであろう。その結果、あらゆるものから生成し、合成されていることになり、万有は実際には何ものでもなく、ただ何ものかであるように見えているに過ぎないものとなろう。点からなるとしても同様に、量というものがありえないことになろう。なぜなら、それらが相接触してひとつの大きさとなり、一緒にあったとしても、それらは全体を少しも大きくしないであろうからである。すなわち、二つに分割されても、あるいはそれより多くの数に分割されても、全体は以前より少しも小さくも大きくもならないのである。したがって、すべての点が集められたとしても、どんな大きさも作り出さないであろう。しかしまた何か物が分割される際に物体から切り屑のようなものが生じ、そのようにして元の大きさから物体の一部が取り去られて行くとしても、同じ議論が当てはまる。すなわち、そのものはどのような意味で分割されるものであったのかということである。物体ではなく、離れてありうる形相とか様態といったものが離れて行くのであり、また元の大きさといっても、そのような状態を呈している点や接触に過ぎないのだとしても、大きさ

が大きさのないものからなるというのは不合理である。さらに、どこに点は存在するのか。それは不動であるのか、それとも運動するのか。接触は常にある二つのもの間になり立つひとつのものである。したがって接触や分割や点とは別に何らかのものが存在していることになろう。かくて、どのような物体であれ、あるいはどれくらいの物体であれ、どこまでも分割可能であると仮定するなら、以上のごとき不合理が結果するのである。さらに木か何かを一度分割した上でひとつに合わせば、また再び元の大きさのひとつのものになる。木をどの位置で切っても、明らかにそのようになるのではないか。したがってそれは可能的にはどこまでも分割されているのである。だとすれば、分割以外に何かがあるのであろうか。というのも、なお何か他の様態があるとしても、どのようにしてそれらに分解されたり、それらから生成したりするのであるか。あるいはどのようにしてそれらは切り離されるのであるか。したがって、大きさが接触や点からなるのは不可能であるとするなら、もうそれ以上分割されない物体や大きさがなければならぬこと必然である。

49

ガレノス（『ヒポクラテスによる元素について』I 2）

「色は慣わしによること、甘さは慣わしによること、苦さは慣わしによること、本当は原子と空虚あるのみ」とデモクリトスはいふ。原子の集まりから感覚的な性質のすべては生じており、それも、それらを感じずるわれわれに対してであって、本性的には何もかも白くも黒くも黄金色でも赤くも苦くも甘くもないと考えてのことである。というのも「慣わしによること」というのは「習慣上」とか「われわれとの関係において」というのと同じことを意味しており、事柄そのものの本性に即したことではないからである。この後者のことは、これはこれで彼はそれを「本当は」（エテエー）と呼んでいるが、これは真実を意味する「本当の」（エテオン）から彼が作った言い方である。それで、この言葉の意味全体は次のようなものとなろう。一方人間の側には白や黒、甘さや苦さ、その他そういったものすべてがあると考えられているが、真実には「もの」（δέν）と「何ものでもあらぬもの」（μηδέν）がすべてであるということである。すなわち、これもまた彼の語った表現であり、「もの」（δέν）は原子、「何ものでもあらぬもの」（μηδέν）は空虚を意味する。ところで、原子はすべて微小なる物体であって、性質を欠いている。他方、空虚は一種の場所で、その内をそれらの物体すべてが、永劫にわたって、上や下へと運ばれながら何らかの仕方で互いに絡み合い、あるいは衝突したり撥ね返されたり、またそういった交わりによって互いに分離したり、また再び結合したりして、そしてそこから他のすべての合成物、われわれのいうところの物体やそれらの諸様態、そして感覚を生み出すのである。第一の物体〔原子〕は影響を蒙らないと彼らは想定する（彼らのある者は、エピクロス派の人たちがそうであるが、それらが破壊されないのは固さによるとし、またある者は、レウキッポス一派の人たちがそうであるが、小ささのゆえに分割されないとする）。それが質的に変化するということは、どのような可能性の面からも決してないのである。それら質的变化は、万人が感覚によって教えられると信じ切っているものであるが。それらはいずれも、例えば熱くなることもなければ冷たくなることもないし、また同じ意味で乾くこともなければ湿ることもないし、いわんや白くなることも黒くなることもなく、その他一般に変化によるどのような性質も受け入れることはないといふ彼らはいふのである。

50

オイノアンダのディオゲネス（断片33 c.2 [p.41 William Lpz. 1907]）

なぜなら、デモクリトスの説を利用して、〔原子の運動は〕それら相互の衝突によるがゆえに原子

にはどのような自由な運動も存在せず、すべては必然的な仕方下方へ運ばれるように思われると主張する人がいるなら、われわれはその人に向かって次のようにいうだろうからだ。「御存じないとは、一体あなたはどのようなお方であられるのか。原子の内にもある種の自由な運動はあるのだ。それをデモクリトスは見出さなかったが、エピクロスは明るみに持ち出して、偏った運動¹の存することを現象の事実から示しているではないか」と。

(1) いわゆる「偏倚」(παρέγκλισις)。本章A 4 7「キケロ」の注1参照。

51

キケロ (『神々の本性について』I 26, 73)

エピクロスの自然学の内にデモクリトスからきたのでない何かがあるというのか。というのも、彼は、今しがたわたしが原子の傾きについて述べたような若干のことは変更したにせよ、しかしその大部分は〔デモクリトスと〕同じことをいっているのものであって、原子、空虚、剥離像〔エイドーラ〕、空間の無限性、そして世界の無数性、その始まりと消滅、〔要するに〕自然の理論が含むほとんどすべてがそうである〔すなわちデモクリトスからきているのである〕。

52

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』X 2)

だがヘルミッポスのいうところによると、彼〔エピクロス〕は読み書きの先生をしていたが、しかし後にデモクリトスの書物にたまたま巡り合って、哲学に熱中するようになったとのことである。

53

プルタルコス (『コロテス論駁』3 p.1108 E)

とはいえ、長い間エピクロス自身、自らをデモクリトスの徒と公いしていたのであって、そのことは、他の人たちも語っているが、なかんずくエピクロスの高弟のひとりであるレオンテウス¹がリュコプロン宛の書簡の中に記している。「デモクリトスはエピクロスによって、彼より先に正しい認識に触れていたとして、敬意を払われていた。またその研究は全体としてデモクリトス説と呼ばれているが、それはデモクリトスがより先に自然の諸原理に行き着いていたからである」と。またメトロドロス²も『哲学について』の中で、「もしデモクリトスが先鞭をつけていなかったなら、エピクロスが知恵にいたることはなかったであろう」と忌憚のないところを語っている。

(1) ランプサコス時代からエピクロスと終生を共にしたエピクロスの高弟。その妻のテミスタもエピクロスの弟子であった。

(2) やはりランプサコス時代からしたがったエピクロスの弟子。前330-278年。エピクロスの第一の弟子と余人からも見られていて、「第二のエピクロス」と呼ばれた。しかしエピクロスに先立っており、エピクロスは彼の遺児を友人に託しつつ逝っている。

54

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』X 8)

〔エピクロスは〕デモクリトスを「レロクリトス〔たわごと屋〕」と〔呼んだ〕。

ストラボン（『地理書』 XVI p.757）

ポセイドニオス¹を信ずべきだとするなら、原子についての学説も太古に遡るものであって、トロイア時代以前に生まれたシドン人、モコス²のものである。

- (1) シリアのアパメイア出身の中期ストア派最大の哲学者。前135－50年頃。ピュタゴラスの章18「ガレノス」注1参照。
- (2) 伝説的人物であるが、しかしストラボン、セクストス・エンペイリコス、ディオゲネス・ラエルティオス以外でも、ヨセフス『ユダヤ古代誌』I 107、アテナイオス『食卓の賢人たち』III 126 A、ダマスキオス『第一の原理について』125、イアンブリコス『ピュタゴラス伝』14などにその名が見られ、一定の歴史的レアリティは認められるようである。しかし「モコスの著作」なるものはヘレニズム期の捏造であることがツェラー＝ネストレによって証明された。

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』 IX 363）

原子を提唱したのはデモクリトスとエピクロス。ただしこの学説をもっと古いとするには及ばないとしてのことであって、ストア学徒のポセイドニオスのいうところによると、それはモコスというフェニキア人に由来するという。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』 pr.1）

哲学の営みは異国人から始まったとある人たちはいう。…モコスはフェニキア人、ザモルクシス¹はトラキア人、アトラス²はリュビア人であった。

- (1) ザモルクシス（ヘロドトスによれば、サルモクシス）はトラキアのゲタイ人のもとで死者がそのもとへ赴くと信じられていた神。しかしヘロドトスによれば彼は人間で、かつてピュタゴラスの奴隷であったという。ピュタゴラスの章2のヘロドトス（『歴史』IV 95）の報告、およびそれへの注1参照。
- (2) アトラスはギリシア神話において双肩で天空を支えているとされる巨人神であるが、彼にまつわってさまざまな伝説が生まれ、後には特定地域に結びついた具体的な人物として語られるようにもなった。

キケロ（『最高善と最高悪について』 I 6, 17）

彼〔デモクリトス〕が「原子」と呼ぶものは、固さのために分割できない物体であって、無限の空虚（そこには頂も底も真ん中も終局も端もない）の中を運動すると彼は見なしている。そして、そのようにして互いに衝突し合って結びつき、そこから存在するもの、認知されるもののすべてが造り出されるのである。また、そうした原子の運動はある時点から始まったものでは決してなく、永劫来なされてきたと解されるべきなのである。

逸名著作家の古注（バシレイオス『創造の六日間についての講話』への古注 2 [ed. Pasquali *Gött. Nachr.* 1910, 196]）

デモクリトスはアイデアを（原理とした）。

擬クレメンス（『覚書』VIII 15 [Dox. 250: 『諸原理について』]）

デモクリトスはアイデア¹を（原理とした）。

（1）デモクリトスの場合のアイデアは、姿ないし形、すなわち原子を意味する。

プルタルコス（『コロテス論駁』8 p.1110 F）

デモクリトスの語る所は何か。数において無限な不可分かつ無差別な実体、しかも何らの性質も様態も有さぬ諸実体が空虚の中を分散しつつ運動するということである。そして、それらが互いに近づいたり衝突したり絡み合ったりするとき、その寄り集まりから、あるものは水として、あるものは火として、あるものは植物として、あるものは人間として、現れるのである。すべては彼のいうところの「不可分なアイデア」に外ならず、それ以外には何もない。なぜならあらゆるものからの生成といったことはありえないからであり、また原子はその固さのゆえに影響を蒙ることも転化することもないがゆえに、あるものから何かが生じてくるということもなからうからである。それゆえ、色なきものから色が存在するということがなければ、質なきものや（性状なきもの）から自然とか魂とかが存在するということがないのである。

アリストテレス（『形而上学』Λ 2. 1069 b 22）

またデモクリトスのいうように、すべては一緒にあった。ただし可能的にであって、現実的にはない。

アリストテレス（『自然学』Θ 9. 265 b 24）

空虚によって運動はなされると彼らはいふ。なぜなら彼らもまた「自然」は場所的な運動を行なうと語っているからである。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』1318, 33）

〔ここで「自然」というのは〕自然物、第一のもの、不可分な物体〔原子〕のこと。すなわち、これらのものを彼らは「自然」と呼んで、それらはその有する重さによって動かされて、無抵抗に場所を譲る空虚の中を場所的に通過して行くと言っているのである。またそれらは「周囲に拡散する」という。そしてそれを彼らは第一の運動としてだけでなく、唯一の運動として元素に割り当てるのであり、それ以外の運動は元素から構成されたものに割り当てている。すなわち、増大したり減少したり、変化したり、生成したり消滅したりするのは、第一の物体〔原子〕が結合したり分離したりすることによると彼らはいふのである。

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』VIII 6）

プラトン派の人たちとデモクリトス派の人たちは知性の対象となるもののみが真であると想定したが、一方デモクリトスは、万物を構成する原子は一切の感性的性質を欠いた本性のものであるために、感覚内容には何らの実在的裏付けもないという理由でそう想定しているのに対し、他方プラトンは、感覚の対象となるものは常に生成〔消滅を繰り返〕し、決して存在することがないという理由で、そう想定しているのである …。

アリストテレス（『生成消滅論』A 8. 326 a 9）

しかしながらデモクリトスは、分割不可能なもの〔原子〕の各々は〔大きさ〕優るに応じてより重いという。

アリストテレス（『天体論』Δ 2. 309 a 1）

むしろ〔分割できない第一のものは〕固体であって、そのより大きいものはより重いという方がはるかにいいうることである。だが複合体については、そのいずれもそのような具合になっているとは思われず、羊毛より銅が重いように、むしろ嵩は小さくてもより重いものが多くあることはわれわれの見るところであるから、〔重さの〕原因は別のところにあると、ある人たちは考えもし、また語りもしているのである。すなわち、彼らのいうところによれば、内部に含まれている空虚が物体を軽くするのであり、したがって時にはより大きいものをより軽くすることもありうるのである。すなわち〔その場合には〕より多くの空虚を含むわけである。… さて彼らはこのような具合に説いているのであるが、しかしこのように規定するには、より軽い場合には、空虚をより多く含むということだけでなく、固体がより小さいということもあるからして、このことも付け加えねばならない。というのも、その比率を越えてまで軽くなるということはなからうからである。すなわち、上述のような理由で彼らはまた火は最も多くの空虚を含むがゆえに最も軽いというのであるが、そうだとすれば、少量の火よりも多量の黄金の方がより多くの空虚を含むからより軽いということになるであろう。黄金が固体部分を何倍も持つということを度外視するならばである。

アリストテレス（『天体論』Δ 2. 309 b 34）

他方、空虚と充実体を説く人たちの場合のように、質料〔素材〕が相対立する場合には、端的に重いものと端的に軽いものとの間に中間がないことになるであろう。そしてどのような原因で、それら相互の間においてとか端的に重いものや軽いものとの関係において、より重かったりより軽かったりするのであるか。大きさと小ささによって区別するのは先のことより一層見せかけの感がある。… そして端的に軽いものも端的に上方へと運動するものもなく、ただ遅れるか押し出されるかするものしかなく、また小さいものでも多数あるなら、大きくても少数のものより重いということにならざるをえない。

アリストテレス（『天体論』Γ 4. 303 a 25）

なぜなら、元素が分割できないもの〔原子〕であるなら、大きさや小ささによって空気と土と水を区別することは不可能だからである。またそれらは相互に生じ合うということもできない。なぜなら、

極めて大きな分離される物体〔すなわちそれぞれの原子〕が常に残るだろうからである。だが、そのようにして水や空気や土は互いに生じ合うと彼らはいうのである。

61

シンプリキオス(『アリストテレス「天体論」注解』569, 5)

というのも、デモクリトス一派の人々は、また後代のところではエピクロスが、原子はすべて同質的であるが、重さを持つというからである。ある原子はより重いために下に沈み込み、そのことによってより軽い原子を押し上げ、上方へ移動させるのである。そのようにして、あるものは軽く、あるものは重いように見えるのだと彼らはいうのである。

シンプリキオス(『アリストテレス「天体論」注解』712, 27)

デモクリトス一派の人々の考えによれば、すべては重さを持っているが、火はより小さい重さしか持たないために優勢なものによって押し上げられて上方に運ばれ、このゆえに軽いように見えるのである。だから、彼らの考えによれば、重いものしか存在しないのであり、それらは常に中心に向かって運ばれている〔すなわち落下している〕のである。

エピクロス(『ヘロドトス宛書簡』I 61 [ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』X 61])

[デモクリトスに反対して] 原子は、空虚の中を通過して行くとき、衝突するものが何もなければ、等速でなければならないこと必然である。なぜなら、対向するものが何もないなら、〈大きくて〉重いものであっても、小さくて軽いものより速いということはないであろうし、またすべての原子がそれに適合した通路を持つ以上、何も衝突するものがないなら、小さいものが大きいものより〈遅い〉ということもなかろうからである¹。

- (1) エピクロスは、何の衝突も受けずに空虚中を運動するときには原子は、雨滴のように、大きさ、形、重さに関係なく、すべて等速で落下すると考えた。アリストテレスが重い物体の落下は軽い物体のそれに比べて速く、また空虚では物体の速度が無限大となるがゆえに空虚は存在しないと考えていたのを考えあわせると、このエピクロスの空虚内の等速の落下運動という考え方の先進性が理解されよう。

62

アリストテレス(『天体論』Δ 6. 313 a 21)

さて、これらすべてのこと〔金属板などが水面に浮かぶといったこと〕について、デモクリトスがいつているようなことをその原因と見なすのも正しくない。すなわち彼は、水から上方へと立ち昇る熱いものが、重さを持つものであっても、平たいものであれば、浮かび上がらせるが、幅の狭いもの場合にはすり抜けてしまうというのである。そういったもの場合にはぶつかる部分がわずかだからである。だがデモクリトス自身も反論しているように、このことは空気中で一層顕著に起こったはずである。しかし反論を提起してみはしたが、その結論は腰くだけである。すなわち、彼のいうところは、「スース」は一方向にのみ突き進むわけではないということである。彼のいう「スース」とは上方へと運動する物体の動きのことである。

アリストテレス(『生成消滅論』A 7. 323 b 10)

デモクリトスは他の人とは異なり、彼にのみ固有する独特な説を立てた。すなわち「作用するもの」と「作用されるもの」は同じか、ないしは同じようなものだというのである。なぜなら、異なるもの、相違するものは、相互に作用を及ぼし合うことはできないからであり、異なったものでありながら作用を及ぼし合うことがあるとするなら、それは異なるものである限りにおいてではなく、そこに何か同じものが存在する限りにおいてであり、その限りにおいてそれらにそういったことが起こるのだというのである。

アレクサンドロス(『混合について』2 [II 214, 18 Bruns])

ところでデモクリトスは、いわゆる混合は物体の並置によって起こると考える。混じり合うものが微小部分に分かれて互いに並ぶことによって混合を作り出すのであるが、真実には決して混合といったものが存在しているのではなく、混合と思われているものは物体相互の微小部分ごとの並置に過ぎず、それらのそれぞれは混合以前に持っていた固有の本性を保っていると彼はいうのである。そしてそれらが混合しているように思われるのは、そこに並んでいるものが微小であるために、感覚はそれらのひとつひとつを捉えることができないからであると。

アリストテレス(『自然学』Θ 1. 252 a 32)

一般に、常にこのようであるとか、このようになるということを、原理として十分であると見なすのは正しい想定ではない。デモクリトスは自然の原因を、現にこのようであるし、また以前にもそのようになったというように、そういったことに帰して、「常に」ということの根拠を求めることを必要とは考えなかった。

キケロ(『宿命について』17,39)

万事は宿命のなすところであり、したがって宿命が必然の力をもたらすとの考えがある。デモクリトス、ヘラクレイトス、エンペドクレス、アリストテレスが、このような考えであった。

アリストテレス(『動物発生論』E 8. 789 b 2)

デモクリトスは「そのためであるそれ」〔目的因〕を語ることをなおざりにし、自然に係わるすべてを〔機械的な〕必然性に帰している。

アエティオス(『学説誌』I 26, 2 [Dox. 321])

デモクリトスによれば、それ〔必然性の本質〕は質料の反撥、運動、衝突である。

シンプリキオス(『アリストテレス「自然学」注解』327, 24)

しかしまたデモクリトスも「あらゆる種類のアイデアを含み込んだ渦が万有から分離した」といっていることからして(もっとも、どのようにして、またいかなる原因によってであるかは彼は語ってい

ない)、それ〔宇宙〕を偶発と偶然から生じさせたように思われる。

68

アリストテレス(『自然学』B 4. 195 b 36)

というのも、偶然といったものがあるのかどうか、問題としている人もいるからである。すなわち、何ものも偶然によって生じたということはなく、偶発ないしは偶然によって生じたとわれわれが知っているものにもすべて何らかの特定の原因があると彼らはいうのである。

[参照] シンプリキオス(『アリストテレス「自然学」注解』330, 14)

「偶然を廃棄する昔の説によれば」とあるのはデモクリトスに向けていわれたものであるように思われる。というのも、デモクリトスは、その宇宙生成論においては偶然を使っているように思われるにせよ、個々の点においては何事についても偶然を原因として語るようなことはせず、他の原因に帰しているからである。例えば、宝の発見の原因は穴掘りとかオリーブの植樹であるとか、禿げ頭が傷ついたことの原因は鷺が亀の甲羅を割ろうとしてその人の頭の上に亀を落としたことであるといった具合である。これはエウデモス¹の伝えているところである。

(1) ロドス出身のペリパトス派の哲学者。アリストテレスの直弟子。前4世紀の後半に活躍。

69

アリストテレス(『自然学』B 4. 196 a 24)

この天界や全宇宙の原因を偶発性に帰す人たちがいる。すなわち、自己偶発的に渦と運動が生じ、それが万有を分離し、このような配列に秩序づけたというのである。… というのも、一方彼らは、動物や植物は偶然によって存在するのも偶然によって生じたのでもなく、自然とか知性とか、あるいは何かそれに類した別のものが原因であると語っておきながら(なぜなら、それぞれの種子から何でもが生じるといったことはなく、この種子からはオリーブが生じ、この種子からは人間が生じるのだからである)、天界とか、目に見えるものの中で最も神的な存在である天体は偶発的に生じ、動物や植物の場合のような原因はないといっているのだからである。

エピクロス(『自然について』[ヘルクラネウム・パピュロス 1056, col.25])

彼らは原因の探究を最初から十分に行ない、それ以前の人たちのみならず、後代の人々とも極めて異なる考え方をし、多くの点で偉大であったが、必然と自己偶発を万能とすることによって、それを何倍も上回るほど事柄を容易にしたことに自身は気付いていなかった。

70

アリストテレス(『自然学』B 4. 196 b 5)

偶然を原因と考える人たちがいるが、それは人間の思考には明らかならざるものであり、何か神的で神靈的なものに近いものなのである。

アエティオス(『学説誌』I 29, 7 [Dox. 326 b 7 n.])

アナクサゴラス、デモクリトス、それにストア学徒たちには、〔真の〕原因は人間理性には明らかでないとする。なぜなら、それは必然に基づくこともあれば、運命に基づくこともあり、選択意志に

基づくこともあれば、偶然に基づくこともあり、自己偶発に基づくこともあるからである。

ラクタンティウス(『信教提要』I 2)

あの問いからまず第一に取り上げるべきは、第一の自然と考えるべきは何かということである。すべてのものを配剤している摂理といったものがあるのか、それともすべては偶然によって起こり、また出来たのか。この後者の見解の創始者はデモクリトスであり、その確立者はエピクロスである。

71

アリストテレス(『自然学』Θ 1. 251 b 16)

なぜならそれ〔時間〕は生成したものではないと彼らはいうからである。このことによって、すべてが生成したといったことはありえないとデモクリトスは論じている。というのも、時間は生じたのでないからと。

シンプリキオス(『アリストテレス「自然学」注解』1153, 22)

しかしデモクリトスは、すべてが生成したわけでないことを証明しようとして、時間は生成していないことを明白な事実として使用しているのであるからして、時間は永遠なものであると信じていたのである。

72

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』X 181)

そういった時間概念はエピクロスやデモクリトス一派の自然学者たちにも帰されるように思われる。すなわち「時間とは昼や夜の形を取って現れる心像である。」

[参照] エピクロス(ヘルクラネウム・パピュロス 1413 [Crönert, *Kolotes und Menedemos*, S.10 4⁵⁰¹])

わたしはためらわず、時間とは昼と夜のことであるという。

73

テオプラストス(『火について』52)

なぜ炎の形はピラミッド型なのか、これもまた難問である。その頂が冷やされるために小さく集まり、末端がとがるのだと、デモクリトスはいう。

74

アエティオス(『学説誌』I 7,16 [Dox. 302])

デモクリトスは、神は球形の火の姿をした知性であるとする。

テルトゥリアヌス(『諸国民に告ぐ』II 2)

神々は天上の残り火でもって生まれたとデモクリトスは推測しており、ゼノン〔ストアの〕も両者の本性は同じであると主張している。

キケロ(『神々の本性について』I 12, 29)

デモクリトスは時には剥離像〔エイドーラ〕やその飛び回るのを神々の内に数え入れ、また時には剥離像〔エイドーラ〕を作り出し発する当の本体そのものを神とし、また時にはわれわれの知的な観念を神としているが、何と途方もない誤りの中にあることか。また一般に、何もかも恒常的に自らの状態を保ちえないとし、いかなる永遠の存在も否定するのであるから、彼は神に関するいかなる見解も残さないほど完全に神というものを否定し去ったというべきではないか。

キケロ(『神々の本性について』I 43, 120)

デモクリトスは偉大な人物であり、その彼を源泉としてエピクロスは彼の庭園を潤したわけであるが、そのデモクリトスもまた神の本性に関しては考えがぐらついているようにわたしには思われる。というのも、彼は時には神性を具えた剥離像〔エイドーラ〕が事物全般の内に存していると思なすかと思えば、時にはその同じ宇宙の中には精神の原理をなすものが存在しており、それが神であるというし、また時にはわれわれに益をもたらしたり害をもたらしたりする生命を有する剥離像〔エイドーラ〕がそれだといひ、また時には宇宙世界を外から包むほどにも巨大な剥離像〔エイドーラ〕があって、それが神だといっているが、こういった見解のすべてはデモクリトスその人というよりも、デモクリトスの故国にこそ似つかわしいものである¹。

(1) デモクリトスの故国アブデラは「愚か者の国」と呼ばれていた(本章A 2 1 参照)。すなわち愚かとしかいいようなない見解だというのである。

75

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』IX 24)

また、世界における異常な出来事からわれわれは神々といったものを想定するにいたったのだと指摘する人たちもおり、デモクリトスもそういった考えの持ち主であったように思われる。というのも彼は、昔の人々は、雷鳴や稲妻、雷や星の合、日蝕や月蝕といった天空における諸事象に驚いて、神々がそれらの原因であると考えたといっているからである。

ピロデモス(『敬虔について』5 a p.69 Gomp. [Crönert, *Kolotes und Menedemos*, S.130])

〈地上における〉夏や冬、〈春や〉秋といったものはすべて、天上から降ってきて生み出される。まさにそれゆえに彼らはそれらを造り出すものを認知して崇めたのである。しかしデモクリトスをはじめとする若干の者たちは、そうはしなかったように思われる …。

ルクレティウス(『事物の本性について』V 1186 ff.)

それゆえ彼らはすべてを神々に委ね、万事は神々の意向によって定まるとして、自らの逃げ場を確保した。そして彼らが神の玉座と神殿を天に置いたのも、太陽も月も天を巡り行くのが見られるがゆえである。月も昼も夜も、厳かな夜のしるし〔星々〕も、夜中さまよう天の炉火も、また飛び去る焰も、雲も、露も、雨も、雪も、風も、電光も、雹も、そして荒々しい唸りと人をおどす巨大な鳴動も〔天空に展開されるのを〕。

76

プリニウス(『博物誌』II 14)

実際無数の神々を信じるということは、そしてまた「慎み」「協調」「精神」「希望」「誉」「慈

悲」「信」といった人間の徳に由来する神々とか、あるいはデモクリトスにお気に入りであった「罰」と「恩典」の二神を信じるということは、より大きな愚に向かって進み行くことに他ならない。

77

プルタルコス(『食卓歓談集』VIII 10, 2 p.734 F)

[なぜ秋の夢は信じられること最も少ないのか。] パボリノスは・・・デモクリトスの旧い説を、ちょうど煙にくすぶった説からほこりを払い、磨きをかけるようにして取り上げているが、その際デモクリトスのいう次のことを共通認識として基礎に置いている。「剥離像〔エイドーラ〕が孔を通して身体内に進入してくるが、それが立ち昇ることによって睡眠中の視覚像を作り出す。それら剥離像〔エイドーラ〕は、家具や衣類や植物など、いたるところから発せられて訪れるが、また動きが激しいと熱があるためにとりわけ動物から発せられるが、身体の形の刻印された類似性を有するのみならず」(エピクロスはこの点まではデモクリトスにしたがったが、ここでその説と袂を分かったように思われる)、「それぞれにおける魂の動きや意思や性格や情念の映像をも捉えて一緒に引き摺ってくるのであり、そしてそれらを伴って降りかかるとき、あたかも生き物のように、それらを送り出した当のものの考えや推理や衝動を、その像が明瞭で混乱しないまま接触されるとき、その受け手に語りかけ、伝えるのである。」このことが最もよく実現されるのは、それらの移動が妨げられることなく、かつ速やかに、滑らかな空気を通してなされる場合である。だが、木々の落葉する秋の空気ははなはだ不均質で粗い状態にあって、剥離像〔エイドーラ〕をさまざまに歪めたり逸らせたりし、進行を緩慢にすることによって、それらの明瞭さを色褪せた貧弱なもの、ぼんやりしたものにする。これは、高揚し燃焼するものからは多くの剥離像〔エイドーラ〕が飛び出し、それが速やかに到達する場合には新鮮で意味明瞭な映像を与えるが、それとちょうど逆の事態である。

プルタルコス(『食卓歓談集』V 7, 6 p.682 F)

デモクリトスの剥離像〔エイドーラ〕は、いわばアイギオン人やメガラ人のごときもので¹、物の数にも入らねば、話しにもならない(とガイウス²はいった)。かの人〔デモクリトス〕がいうには、悪意を持った人から出てくる剥離像〔エイドーラ〕は、その人の感覚も衝動もことごとく免れてはおらず、それを発する当人に由来する邪悪や悪意に満ちみちていて、それらを伴って悪意を振り向けられた人々の中に入ってきて、そのもとに留まり、かつ住みつき、それらの人の身体や思考を混乱させ、害するというのである。かの人〔デモクリトス〕の考えはほぼこのようなものであるが、しかしその言葉遣いはすばらしく、高邁な調子で語られているように思われる。

- (1) アイギオン(ペロポネソス半島北部のコリントス湾に面した小都市)ないしはメガラに住人がギリシアで重きをなす国はどこか神託に伺ったところ、「お前たちは物の数にも入らぬ」と託宣されたという故事による表現で、要するにデモクリトスの剥離像〔エイドーラ〕説は取るに足りないということ。
- (2) ガイウスは『食卓歓談集』に登場する人物のひとりで、フロルスの養子とされている。メストゥリウス・フロルスはプルタルコスと親しかったローマの有力者で、彼の仲介によってプルタルコスはローマの市民権を得た。

ヘルミッポス(『天文学について』 [ヨハネス・カトラレス] I 16, 122 p.26, 13 Kroll-Viereck)

とはいえ、デモクリトスに触れずにおくというのも適当で(ない)。彼はそういったもの〔神的なもの〕を剥離像〔エイドーラ〕と呼び、「空気はそれらで満ちみちている」といつている。

クレメンス(『雑録集』 V 88)

少なくともカルケドンのクセノクラテス¹は理性を持たぬものにも神の観念がまったくないわけではないとしているし、デモクリトスもまた、そうしたくはなくとも、その教説の帰結するところからしてそのことに同意せざるをえないであろう。というのも、彼は人間にも非理性的動物にも同じ剥離像〔エイドーラ〕が神的存在から降りかかってくるとしているからである。

(1) プラトンの忠実な弟子で、アカデメイア第3代目の学頭。前395年頃－314年。

キケロ(『アカデミカ第一』 II 37, 121)

そら、君の傍らに凶らずもランプサコスのスラトン¹登場というわけだ。彼はここで神を職務解除しようとするのであって(君は〔神に〕大きな役割を付与しようとしているが、神々に仕える司祭どもが休暇を取っている以上、神々御自身もそうなさるのが公平というものだ)、世界を作り上げるために神々の働きを利用するというを自らに禁じている。どのようなものも、すべては自然の所産であると彼は説くのである。ただし、凸凹したものや滑らかなもの、鉤形の物体や曲がった物体によって固まったこれらのものが空虚の中に投げ出されて存在すると語るかの人〔デモクリトス〕のように説くのではなく(このようなことはデモクリトスの、それも学説を説くデモクリトスではなく、空想に耽るデモクリトスの夢に過ぎないと彼は見なしている)、彼〔スラトン〕自身は、世界の個々の部分まで追跡して、現に存在するものであれ、生じつつあるものであれ、すべては自然の重さと運動によって生じ、また生じたと説いている。

(1) ランプサコスのスラトンはペリパトス学徒で、リュケイオンの第3代目の学頭。自然哲学の分野の研究に優れ、「自然学者」と呼ばれた。パルメニデスの章A38の注1参照。

キケロ(『アカデミカ第一』 II 17, 55)

そこで君は、アカデメイアの中では最も嘲られている者たちであるが¹、しかし君としてはもはや敬遠しておくわけに決していけない人々である自然学者たちのもとに逃れて、そしてこう論じるわけだ。世界は無数に存在する。しかもそのあるものは互いに似ているというにとどまらず、どこから見ても完全かつ完璧に等しく、それらの間に相違はまったくないというほどであり、人間もまた同様であるとデモクリトスは語っていると。

(1) 唯物論哲学は当時の大学(アカデメイア)でもバカにされていたようだ。

シンプリキオス(『アリストテレス「天体論」注解』310, 5)

「なぜなら世界の分解と消滅は世界の質料へとなされるのではないからである」と彼〔アレクサンドロス¹⁾〕はいう。「質料は世界の生成の可能性を担うものなのである。そうではなく、他の世界へとなされるのである。世界は無限〔無数〕に存在し、互いに交替しつづけるが、また再び同じ世界へ回帰するとは限らない。」レウキッポス・デモクリトス一派の人々がこのような考えであった。…デモクリトスの世界は別の世界へと転化して行くが、同じ原子からできているのであるから、数の点ではともかく、形の点では同じものとして〔再び〕生まれることになる。

(1) アプロディシアスのアレクサンドロス。アプロディシアスのアレクサンドロスについては、クセノパネスの章A 3 1の注3参照。

83

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』IX 113)

したがって、デモクリトス一派の人々が語っているところによると、世界は「渦」によって必然的に運動するわけでもないことになろう。

84

アエティオス(『学説誌』II 4, 9 [Dox. 331])

デモクリトスによれば、世界の消滅はより大きい世界が小さい世界を圧倒することによって起こる。

85

アエティオス(『学説誌』II 13, 4 [Dox. 341])

[星の実体について] デモクリトスによれば、岩。

86

アエティオス(『学説誌』II 15, 3 [Dox. 344])

[星の並び方について] デモクリトスによれば、最初に恒星、それらにつづいて惑星、そしてその後太陽、明けの明星〔金星〕、月である。

87

アエティオス(『学説誌』II 20, 7 [Dox. 349])

デモクリトスによれば、〔太陽は〕ミュドロン、すなわち灼熱した石である¹⁾。

(1) この「太陽はミュドロン、すなわち灼熱した石である」とする見解は一般的にはアナクサゴラスの説とされている。アナクサゴラスの章参照。

キケロ(『最高善と最高悪について』I 6, 20)

デモクリトスは、太陽を巨大なものと考えている。

ルクレティウス(『事物の本性について』V 621 ff.)

[太陽についてのデモクリトス説]

あるいは、まず第一にありうることと思われるのは、偉大なるデモクリトスの神聖なる見解が語るもので、それぞれの星は大地の近くにあればあるだけ、それだけ天の渦で運ばれる可能性は少なくなるということである。というのも、下方では渦の急激さは消えうせ、激しい力は減じられるからで、それゆえ太陽は輝く星座のはるか下に位置しているために次位の星々と共に次第に取り残されて行くという。

[月の軌道についてのデモクリトス説]

またこのことは月の場合に一層顕著である。その軌道が一層低く、天体から遠く離れ、大地に近い分だけ、それだけ星々と軌道を競う可能性は少なくなるのである。またすでに弛んでしまった渦に運ばれ、太陽より低いところを行く分だけ、それだけやすやすとすべての星がその巡りに追いつき、その傍らを通り過ぎて行く。月がいずれの星のところへもより速やかに戻り行くように見えるのはこのゆえであり、まことは星が月のところに戻るのである。

アエティオス(『学説誌』II 23, 7 [Dox. 353])

[太陽の回帰について] デモクリトスは、回転する渦によるとする。

プルタルコス(『月面に見える顔について』16 p.929 C)

それ〔月〕は発光体〔太陽〕の垂線上に位置することによって太陽〔の光〕を受け取り、取り込むとデモクリトスはいふ。そのようにして月は見えるようになるのであり、太陽の光を通過させると考えるのが合理的であるというのである。

アエティオス(『学説誌』II 25, 9 [Dox. 356])

アナクサゴラスとデモクリトスは、〔月は〕灼熱した個体であって、そこには平野や山や溪谷があるとする。

アエティオス(『学説誌』II 30, 3 [Dox. 361])

〔月はなぜ土のように見えるのか。〕デモクリトスは、月には高い部分の蔭のようなものが見られるが、それは月に溪谷や谷間があるからだとする。

アリストテレス(『気象論』A 8. 345 a 25)

アナクサゴラスとデモクリトスの徒は、天の川は一部の星の光だという。すなわち太陽は大地の下を移動しているときには星の一部を照らさない。ところで、太陽によって照らされている限り、それらの光は眼に見えない(太陽の光線によって妨げられるから)が、大地が遮り、その結果太陽によって照らされなくなった諸星の固有の光が天の川であると彼らはいふのである。

アレクサンドロス(『アリストテレス「気象論」注解』37, 23)

アナクサゴラスとデモクリトスは、天の川は一部の星の光だという。すなわち、太陽は夜大地の下に行くが、大地の上にある諸星のうち、太陽がその周囲を照らす限りのものは、太陽光線に妨げられてその固有の光が目に見えるものとならない。しかし大地の影が遮って蔭にしているところにある星は、太陽の光によって照らされないためにそれらの固有の光が見えるようになるのであり、これがすなわち天の川であると彼らはいうのである。

アエティオス(『学説誌』III 1, 6 [Dox. 365])

[天の川について] デモクリトスは、互いに一緒に光を発する多くの小さな連続した星々が密集することによって共に輝いているものであるとする。

アキレウス・タティオス(『アラトスの「天象譜(パイノメナ)入門』24 [p.55 24 M.])

[天の川について] 他の人たちは、それはごく小さい密集した星々からなるものであって、天界から大地までの距離のために一体化しているようにわれわれに見えるのであり、細かい塩を多量に振り撒いたようなものであるという。

92

アレクサンドロス(『アリストテレス「気象論」注解』26, 11)

彗星について。アナクサゴラスとデモクリトスは、ほうき星といわれているもの〔彗星〕は惑星の〔光の〕合であるという。惑星とはクロノスの星〔土星〕、ゼウスの星〔木星〕、アプロディテの星〔金星〕、アレスの星〔火星〕、ヘルメスの星〔水星〕である。すなわち、これらの星が互いに近づくとき、相互に接触したひとつの星であるような見かけを作り出すのであり、これがすなわちほうき星〔彗星〕と呼ばれているものなのである。「合」と彼らがいふのは、一箇所に集まった全体からひとつのものであるかのような見かけが生み出されるからである。

セネカ(『自然研究』VII 3, 2)

古代の哲学者すべての中で最も鋭敏な人物であったデモクリトスもまた、現に巡っているよりも多くの星があるのではないかと思うといっているが、しかしその数も名前も挙げることはできなかった。五つの惑星の巡りのこともまだ理解できていなかったのである。

93

アエティオス(『学説誌』III 3, 11 [Dox. 369])

デモクリトスは、雷は不均質な混合物がそれを含み込んだ雲に下方へ向かう運動を強いることから起こるとする。それによって火を生ぜしめるものが空虚を多く含むより稀薄なところを通過して擦り合わされつつ同じところへと集まって行き、濾過されるのである。また落雷は、より清らかなもの、より微細なもの、より一様なもの、デモクリトス自身の記述によれば「ぴったりと合ったもの」、火を生ぜしめるものが、無理やり運動させられるとき、起こる。プレステール〔旋風〕は、空虚を多量に含む火の混合物が、空虚な場所と一定の仕切られた部分に引き止められ、独特な皮膜を有する物質状のものとなって、その多様な混合のゆえに深みへ向かう衝動を得たとき、起こる。

セネカ(『自然研究』V 2)

デモクリトスはいふ。狭い空虚の内に彼が原子と呼んだ小物体が多量にある場合に風は起こる。これとは逆に、広大な空虚に少数の小物体〔原子〕しかないとき、空気の状態は静かで平穩である。すなわち、広場や街中において少数の人しかないときには混乱なく歩き回れるが、狭いところに群集が群がり集まっている場合には、人々はぶつかり合い、争いが起こる。それとちょうど同じように、われわれを取り巻く空間においても、狭い場所を多くの物体が満たしているときには、それらは必然的にぶつかり合い、押しやったり押し返されたり、あるいは絡まれたり圧迫されたりする。こういったことから風は生まれるのであり、争い合っていた物体が沈静化し、暫しふらふらとためらった後、一定の方向に傾くのである。しかし広大なところに少数の物体しかない場合には、突き倒したり押しやられたりするといったことは起こらないのである。

94

アエティオス(『学説誌』III 10, 5 [Dox. 377])

[大地の形について] デモクリトスは、平たい円盤状で、真ん中が空洞だとする。

エウスタティオス(『「イリアス」注解』p.690 : VII 446 への注)

ストア学徒のポセイドニオスとディオニュシオス¹によれば、人の住む大地は投石器の形²をしているが、デモクリトスは長方形だという。

(1) デイオニウシオス・ペリエゲテス。『地理誌』V 7 (Georg. min. II 105 M.)。ディオニウシオス・ペリエゲテスは4世紀の地理学者で、韻文で当時知られていた三大陸と地中海地域の地理案内書『世界案内記』を書いた。「ペリエゲテス」は「地理案内人」の意味。

(2) 中央が広く両端が狭まった形。すなわち舟形。

95

アエティオス(『学説誌』III 13, 4 [Dox. 378])

デモクリトスは、初め大地は小さく軽かったためにさ迷っていたが、時と共に濃密化して重くなり、落ち着いたという。

96

アエティオス(『学説誌』III 12, 2 [Dox. 377])

デモクリトスは、周辺を取り巻くものの南側が相対的に貧弱であるために、大地はその方向に膨張して傾いているという。というのも、北は気候不順であるが、南は温暖だからである。それゆえ、その方面では地味も豊かとなっており、そこでは実りも成長も顕著なのである。

97

アリストテレス(『気象論』B 7. 365 b 1)

デモクリトスは、大地は水で一杯なので、さらにそれとは別に多量の雨水を受け容れると、それによって動かされるという。すなわち、多量になり過ぎると、空洞部が受け容れ不能になるために押し戻されるのであり、それが地震を起こすのである。また大地が乾燥し、より充満したところから空の

場所に水を引き寄せるときにも、向きを変えた水が突入してきて〔大地を〕動かすという。

98

セネカ(『自然研究』VI 20)

(1)デモクリトスは〔地震の原因はそのうちの〕幾つかだと考える。すなわち、ある時には氣息〔風〕によって地震は起こるといい、ある時には水によって起こるといい、ある時にはその両者によって起こるといふ。そして次のようにつづけている。「大地のある部分は空洞になっていて、そこに水の巨大な力が集積されている。そのあるものは微細で、他のものより流動性に富んでいる。この水が不意に襲いかかってくる重圧によって押し出されると、大地に打ちつけられ、大地を動かすのである。というのも、それは、そこへと押しかけるものを移動させることなくしては、流れることができないからである。… (2)一箇所にたまって自らを支えきれなくなると、水はいずれかの方向に傾き、最初はその重さで、次いでその勢いで道を切り開く。すなわち、長く閉じ込められていた水は急斜面によってしか外に出ることができず、また適度の水量でまっすぐ流れ下ることもできないで、それが通って行くところや、あるいはそこへと流れ下って行くところを振動させずにいない。(3)また、水がすでに流れ始めている場合、それがどこかで停止し、その流れの力が自らに逆流してくるなら、水はそれを含み込んでいる大地へと押し返されて、大地をその最も底の部分において揺り動かす。その上、時には大地は内部まで受け容れた液体で水浸しにされてさらに深く沈下し、基盤そのものが損なわれることもある。その時は流入してくる水の重さが最もかかるその部分が圧迫される。(4)また時には氣息〔風〕が波を起こし、しかもそれが相当激しく攻め立てる場合には、当然それは大地を、それが寄せ集めた水を運び込むその部分において、動かす。また時には地下の通路に入り込んだ氣息が出口を求めて万有を動かす。しかし大地は風を通す能力を有するが、氣息は一層微細であるために締め出すことができず、またその急速さや急激さは抵抗できないほど激しいのである。

99

アエティオス(『学説誌』IV 1, 4 [Dox. 385])

〔ナイルの増水について〕デモクリトスは、北方地方の雪が夏至の頃解凍され拡散されて、その蒸気から圧縮されて雲が生じる。それらが季節風によって一斉に南のエジプト方面に押し流されることによって豪雨がもたらされる。それによって沼やナイルが満水になるのだとする。

ディオドロス(『世界史』I 39)

人の住む地域にある山で最高峰なのは … 。それはエティオピアあたりにあると彼〔デモクリトス〕はいう。

逸名著作家の古注(ロドスのアポロニオス『アルゴナウティカ』IV 269 f. への注)

デモクリトス … この自然学者は、南側に広がる海からナイル河は〔水の〕流入を得ているのであるが、その流路の距離と長さによって、また炎熱によって煮詰められることで、水は淡水化されるのだという。その結果、それは〔海水とは〕正反対の味を有するものとなるのである。

99 a

ヒベ・パピュロス(16 p.62 Grenfell-Hunt)

〔第1欄〕ところで、〈海水の塩辛さの〉なり立ちについては〈意見の不一致が〉とりわけ〈生じて

いるようである)。すなわち、ある人たちは〈原〉初の水分の、〈大部分の〉水が〈蒸発し去った後の、残滓に〉よる〈といい〉、他の人たちは〈大地の汗であるという。デ〉モクリトスは〈地中の事物と同じような仕方での生成は〉なされる〈と考えている。例えば、岩塩やニ〉トロンの***
〔以下五行欠文〕***。

〔第2欄〕後に残された〈腐〉敗物から〔一切のものは〕分離されたと彼はいう。万有におけると同じように、水分の中でも同じものが同じものと結びついて、そのようにして海とかその他塩分〈を含んだ〉すべてのものが同族相集まって生まれたのである。— だが海が同族のもののみならず、異なるものからもできていることは明らかである。なぜなら、乳香にしても硫黄にしてもシルピオン¹にしても明礬にしても瀝青にしても、〔その他、そういった〕貴重なもの、驚くべきもののいずれも、大地のどこでも産するわけでないからである。— ところで、他のことはともかく、このことは彼にとっては見定めるに容易なことであった。というのも、海も世界の一部とする以上、「自然の驚くべきものも、思いもよらないものも」、稀少なるもの、珍しいものが大地において生じたのとちょうど「同じように、〔海においても〕生じた〔はずだから〕」と彼はいつているからである。— ところで味は〔原子の〕形態によってあり、塩辛い味は大きく角ばった形態によるのであるから、〈塩辛さは、海においてとまったく同じように、大地においても生じる〉として、おそらく不合理ではあるまい。

- (1) ラテン名、シリピウム。北アフリカ産の植物で、セロリないしはウイキョウの一種。食用、医薬用に珍重された。

100

アリストテレス(『気象論』B 3. 356 b 4)

海の塩辛さについて語らねばならない。そしてまた、海は常に同じであるのか、それともかつてはこのようではなかったし、また将来もこのようではなく、やがては絶えることになるのか、このことについても語らねばならない。というのも、そのように考える人たちがいるからである。ところで、海が生成したということ、このことは、宇宙全体もまた生成したとされる以上、万人の認めるところであると思われる。すなわち海の生成もその時同時になされたと人々は考えているのである。だとすれば、いやしくも万有を永遠とするなら、海についてもまたそのように想定しなければならないこと、明らかである。これに対して、デモクリトスのいうように、海はその大きさを減じつつあり、最後には絶えてしまうであろうと考えるのは、アイソポス〔イソップ〕の寓話と何ら異なるところないと思われる。アイソポスの寓話というのは、カリュブディスは〔海の水を〕二度吸い上げ、最初は山を、二度目は島を出現させたが、最後に〔もう一度〕吸い上げるなら、それはすっかり干上がってしまうであろうというものである。さて、このような物語を語るのは、渡し守に対して腹を立てているアイソポスにならふさわしいかも知れないが¹、真理を探究する者には余りふさわしくない。なぜなら、最初に海の定まった原因が、ああいったことを説く人たち〔海は最後には絶えてしまうという人たち〕の中にあってもその若干の人たちのいうように、重さであっても、… あるいは何か他のものであっても、それによって海は明らかにその後も存続しつづけねばならないことになろうからである。

- (1) すなわちアイソポス〔イソップ〕は渡し守に腹を立てて、カリュブディスがもう一度吸い上げるなら海が干上がって、渡し守の仕事など無用のものになってしまうぞと毒づいているわけである。

アリストテレス(『デ・アニマ』A 2. 404 a 27)

だが彼〔アナクサゴラス〕はデモクリトスとまったく同じというわけではない。というのも、デモクリトスは魂と知性を端的に同じとするからである。なぜなら現れは真理であるから〔と彼はいうのである〕。それゆえ「ヘクトルは意識朦朧として横たわっていた」¹と詩作したホメロスは見事であると。事実彼は知性を真理に関わる特定の能力として用いることはせず、魂と知性を同じものとして語っているのである。

(1) われわれに残されているホメロスのテキストには、この詩句は見当たらない(ディールス)。

アリストテレス(『デ・アニマ』A 2. 405 a 5)

ある人は〔魂を〕火だと考えた。なぜなら、火は最も微細で、元素中最も非物体的だからであり、さらに何にもまして運動し、かつ他のものを動かすからである。デモクリトスの論述は、これら双方のことが何ゆえであるかをはっきりと申し述べている点で、余人のそれにもまして洗練されている。すなわち、魂と知性は同じなのである。それは第一の不可分な物体のひとつであり、その微小さと形のゆえに動きやすい。形の中で最も動きやすいのは球形であり、知性と火はそういったものであると彼はいうのである。

ピロポノス(『アリストテレス「デ・アニマ」注解』83, 27)

火は最も非物体的であると彼〔アリストテレス〕は述べているが、本来の意味で非物体的と語っているのではない。彼らのうち誰もこのような意味で語ったものはいなかった。そうではなく、その微細さのゆえに物体中において最も非物体的であるという意味で語っているのである。

アエティオス(『学説誌』IV 3,5 [Dox.388])

〔魂について〕デモクリトスは、〔魂は〕理性によって考察されるものからなる火の結合体であるとする。その姿は球形であり、火の機能を持つが、まさにそれゆえ物体なのである。

マクロビウス(『スキピオの夢』I 14,19)

〔魂について〕デモクリトスは、〔魂は〕諸々の原子の間に注ぎ込まれた氣息であり、極めて動きやすいものであるために身体全体がそれによって貫通されているとする。

アリストテレス(『デ・アニマ』A 3. 406 b 15)

またある人は、魂はそれ自身動くものであることによって、それがその内に存するところの身体を動かすという。例えばデモクリトスがそのようにいうが、その語るところは喜劇詩人のピリッポス¹のそれに近い。すなわちピリッポスのいうには、木製のアプロディーテを動くものとするのにダイダロス²は水銀を注ぎ込んだというのであるが、デモクリトスの語るところも同様である。不可分の球体〔魂〕は決して止まることのない本性のものであるために運動しつづけるが、一緒に身体全体を引きずり動かすと彼はいうのである。

- (1) 前4世紀の喜劇作家という以外、不詳。アリストパネスの子ともいわれる。
- (2) 神話上の名工で、「名工」の代名詞のような存在。クレタのミノス王のもとで迷宮ラビュリントスを造ったといわれる。

104 a

アリストテレス(『デ・アニマ』A 5. 409 a 32)

デモクリトスは〔身体は〕魂によって動かされるという〔が、彼の語る場所は不合理である〕。…なぜなら、いやしくも知覚する身体全体の内に魂があるなら、魂も一種の物体とされる以上、同じところに二つの物体があらねばならないことになるからである。

105

アエティオス(『学説誌』IV 4, 6 [Dox. 390])

デモクリトスとエピクロスは、魂には二つの部分があって、一方理性的部分は胸にその座を有するが、他方非理性的部分は身体組織全体に撒き散らされているとする。

アエティオス(『学説誌』IV 5, 1 [Dox. 391])

というのも、ヒッポクラテス、デモクリトス、そしてプラトンは、それ〔指導的部分¹〕は脳にその座を有するとするからである。

- (1) 「指導的部分」については、パルメニデスの章A 4 5「アエティオス」の注1参照。この見解に対してパルメニデスやアリストテレスは、知性や意志といった指導的部分の座は胸にあると考えた。

ピロポノス(『アリストテレス「デ・アニマ」注解』35, 12)

というのも、デモクリトスは、思惟と感覚は同じであり、これらはひとつの同じ能力から出てくると語ることによって、それ〔魂〕は部分に分かたれないものであり、複数の能力を持つものでないと主張するからである。

106

アリストテレス(『呼吸について』4. 471 b 30)

デモクリトスは呼吸から呼吸するものに一定の効果がもたらされているという。すなわち、魂が押し出されるのを呼吸が阻止していると彼は主張するのである。しかしながら、自然がそれを造ったのはまさにこのためであるとは、彼は一言もいっていない。一般に、他の自然学者たちもそうであるが、彼もまたこの種の原因〔目的因〕に触れるところまっただくなかったからである。だが彼は次のようなことを語っている。魂と熱は同じであり、球の形をした第一の形態〔原子〕である。そこで、取り巻くものによって押し出されそうになると、それらは収縮し、〔いわば〕救助策として呼吸がなされると彼はいうのである。というのも、空気中には彼が「知性」とか「魂」と呼ぶそういったもの〔球形の原子〕が多数存在しているからであり、そこで呼吸によって空気が入ってくる時、それらも共に入ってきて〔外気の〕圧迫に対して抵抗し、動物内にある魂が抜け出て行くのを阻止するのである。それゆえ生と死は息の吸い込みと吐き出しにある。すなわち、取り巻くものがその力によって押し潰

し、呼吸できないためにもはや外から入ってきて〔魂を〕引き止めることができなくなったとき、動物に死が訪れるのである。なぜなら死とは、取り巻くものの押し出しによってそういった形〔原子〕が身体から出て行くことに他ならないからである。だがしかし、なぜすべてのものにいつかは必ず死が訪れるのか、それもある時たまたまというのではなく、自然的には老年において、暴力によっては自然に反して訪れるのか、このことについては彼は何も明らかにしていない。

107

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 349)

他の人たちは身体全体の内にそれ〔思考〕は存するとしており、デモクリトスにしたがう人たちがそうである。

108

ルクレティウス(『事物の本性について』III 370)

ここで貴方がかの見解を受け容れることは決してないであろう。すなわち、それは勇者デモクリトスの聖なる命題が主張するもので、身体と魂の原子がそれぞれひとつずつ並べられ、代わるがわる交互に肢体を織りなしているというものであるが。

109

アエティオス(『学説誌』IV 7, 4 [Dox. 393])

デモクリトス、エピクロスは、〔魂は〕可滅的で、身体と一緒に滅び去るとする。

110

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 369)

一方の人たちは、デモクリトス一派の人たちがそうであるが、現れはこれをすべて否認する。

111

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 140)

ディオティモス¹は、彼〔デモクリトス〕に基づいて、判定基準は三つあると語っている。(1)まず明らかならざるものの把握のそれは現れである。…(2)探究のそれは概念、…(3)選択と忌避のそれは感覚である。すなわち、感覚に身近で親しく感じられるものは選ばれるべきものであり、敵対的に感じられるものは忌避すべきものなのである。

(1) テュロス出身のデモクリトス派の哲学者。デモクリトス同様、「合わせ〔エウエストー〕」を人生の目的としたといわれる。おそらく前3世紀の人。

112

アリストテレス(『形而上学』Γ 5. 1009 b 7)

さらにまた、多くの健康な動物にとってすら同じものが反対であるように思われるし、われわれにとってもまたそうであり、またそれぞれの人においても同じものが感覚において常に同じように判断されるとは限らない。そこで、これらのどれが真であり、どれが偽であるか、明らかでないのである。あれよりもこれが真であるということはまったくないのであり、いずれも同等だからである。それゆ

えデモクリトスは、真なるものはまったくないか、少なくともわれわれには明らかでない」と主張する。一般に彼らは、思惟を感覚と考へ、そして感覚を質的変化と考へたために、必然的に感覚における現れを真であるといわざるをえなかった。

113

ピロポノス(『アリストテレス「デ・アニマ」注解』71, 19)

知性が万有を動かしたと彼らがいうとき、魂にも運動が固有するということを彼らはどのような根拠から語ったのか。根拠はあったと彼〔アリストテレス〕はいう。すなわち彼らは、デモクリトスもまたそう見なしたように、魂と知性を同じと考へたのである。知性と魂を同じと彼らが語ったとする明証的な証拠をわれわれは有さないが、推論によってアリストテレスはそう定めるのである。デモクリトスがそのようにいおうとしていたことは明らかだからと彼はいう。なぜなら、デモクリトスは真と現れは同じであるとはっきり述べており、また真理と感覚に現れるものは何ら相違せず、プロタゴラスも語ったように、各人に現れるもの、そうだと思われるものは、そのまま真理でもあるとしているからである。とはいえ、正しき理〔ロゴス〕にしたがうなら相違があるのであり、現れについては感覚と表象があり、真理については知性がある。さてそこで、知性は真理に係わり、魂は現れに係わるとするなら、そしてデモクリトスの考へによれば真理は現れと同じであるなら、そうするとまた知性は魂と同じであることになる。知性の真理に対する関係は魂の現れに対する関係に等しいからであり、そうすると、項を交換するなら、現れの真理に対する関係は魂の知性に対する関係に等しいことになるのではないか。そこで、現れと真理が同じであるなら、知性と魂もまた同じであることになる¹。

(1) すなわち、「知性」：「真理」＝「魂」：「現れ」ならば、「知性」：「魂」＝「真理」：「現れ」。そこで「真理」＝「現れ」なら、「知性」＝「魂」となる。

114

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 389)

さて、デモクリトスとプラトンがプロタゴラスに反対して教えているように、反転の論証のゆえに表象はすべて真となるとは人はいわないであろう。すなわち、すべての表象が真であるなら、すべての表象は真でないということもまた表象を基礎に置くことによって真となり、このようにしてすべての表象は真であるということは偽になってしまうであろう。

115

アエティオス(『学説誌』IV 10, 5 [Dox. 399])

〔感覚は幾つあるか。〕デモクリトスは、感覚の方が感覚されるものより多いとする。だが感覚されるものの数は知られないのであるから、〔そもそもそのような〕数え上げはできぬことである。

〔参照〕ルクレティウス(『事物の本性について』IV 800)

〔映像は〕稀薄だから、鋭く見なければ、魂は識別することができない。

アエティオス(『学説誌』IV 10, 4 [Dox. 399])

デモクリトスは、非理性的動物についても、知者についても、神々についても、感覚は〔五つより〕多いとする。

アエティオス(『学説誌』IV 4, 7 [Dox. 390])

デモクリトスは、すべてのものが何らかの性質の魂を分け持っており、死体も例外でないという。というのは、大部分は四散してしまうにせよ、〔死体が〕なお何がしかの熱や感覚を有することが常に明瞭に見て取れるからであると。

アレクサンドロス(『アリストテレス「トピカ」注解』21,21)

デモクリトスの考えによれば、死体も感覚する。

キケロ(『親しき人々への書簡』XV 16, 1 [カッシウス宛書簡])

というのは、わたしが君に何かをしたためるとき、あたかも君が眼前にいるかのように思われるということが、なぜかは分からないが、起こるからです。そしてそれは、君の新しいお友達¹がおっしゃっておられるような剥離像〔エイドーラ〕の表象によることではないのです。そのお友達は思想上の表象もカティウスのいうスペクトルム〔視覚像〕によって呼び起こされると見なしておいでのようなのですが。— というのも、忘れないでいただきたいのだが、インスベルのエピクロス学徒カティウス²は、少し前に亡くなりましたが、かのガルゲトス区の人³が、彼以前にもすでにデモクリトスが、剥離像〔エイドーラ〕と呼んでいたものにこの「スペクトルム〔視覚像〕」という名称を与えているからです。— しかしながら、こういったスペクトルム〔視覚像〕が望むと望まざるにかかわらずやってきて、それによって打たれるということが、眼についてなら確かにありうるかも知れないが、魂の場合にどうしてそれが可能なのか、わたしには分かりかねるところであり、無事に当地にお着きの際は、君はわたしに教える義務があります。君のスペクトルム〔視覚像〕はわたしの意のままになるものであって、君について考えようとわたしが思うや否や、それはやってくるのか、さらにまた、わたしの心中深く染み付いている君についてのみならず、ブリテン島についても、それを考え始めるや、その剥離像〔エイドーラ〕がわたしの心まで飛んでくるのかどうかを。

- (1) この手紙の相手であるカッシウスが新たに親交を結んだエピクロス派の人々。
- (2) ティトゥス・カティウス。ガリア・キサルピナ〔アルプス南側のガリア地域〕出身のインスベル人。最近亡くなったエピクロス主義者としてキケロによって言及されている他に、クインティリアヌスによっても言及されており、またプリニウスによっても言及されている。
- (3) エピクロスのこと。ガルゲトスはアッティカ(アテナイを中心とする地域)の区のひとつ。エピクロスの両親がアッティカのガルゲトス区出身であったことから、キケロ、その他によってこう呼ばれる。

アリストテレス(『感覚と感覚されるものについて』4. 442 a 29)

他方ではしかし、デモクリトスや、また感覚について語っている自然学者の実に多くの人が極めて奇異な説を唱えている。すなわち、感覚されるということはすべて触れられることだと彼らはいうのである。しかしながら、もしそうであるなら、明らかに他の感覚のそれぞれも一種の触覚であることになる。

テオプラストス(『植物の諸原理について』VI 1, 2)

まず最初に事柄そのものがある種の疑問をもたす。すなわち〔味は〕感覚における様態によって説明されるべきか、それとも、デモクリトスのいうように、それから各々のものができる諸々の形〔原子〕によって説明されるべきであるか。

シンプリキオス(『アリストテレス「天体論」注解』564, 24)

他方デモクリトスは、テオプラストス¹が『自然学者たち〔の教説〕』において伝えているように、温とか冷とか、その他そういったものによって原因を論じている人たちの説明は凡庸であるとして、原子にいたったのであり、また同じようにピュタゴラスの徒も、形や大きさが温や冷の原因であると見なして、平面にまでいたったのである。すなわち、分解し分離するものは温の知覚を与え、結合し圧縮するものは冷の知覚を与えるのである。

(1) ペリパトス派の哲学者テオプラストスについては、タレスの章B 1の注1参照。

アリストテレス(『感覚と感覚されるものについて』2. 438 a 5)

デモクリトスが〔眼は〕水からできていると語っているのは正当であるが、見ることを映ることと考えているのは正しくない。… 一般に映るということや反射ということについては、けだしまだまったく何も明らかになっていなかったようである。また、なぜ眼だけが見ることができて、剥離像〔エイドーラ〕が映るそれ以外のものは見ないのかということをも問うにいたらなかったのも、奇妙である。

アリストテレス(『デ・アニマ』B 7. 419 a 15)

というのも、デモクリトスが語っていることは正しくないからである。もし中間が空虚になっていたなら、蟻が天空にあっても、われわれはそれを精確に見ることができたであろうと彼は考えている。

アリストテレス(『生成消滅論』A 2. 316 a 1)

それゆえ色は存在しないと彼〔デモクリトス〕はいう。すなわち色を呈するという事は〔原子の〕向きによることなのである。

124

アエティオス(『学説誌』I 15, 11 [Dox. 314])

他の人々は、原子は総じて色を有さない、しかし理性によって考察されるそういった無性質のものから感覚的な性質が生じてくると主張する。

125

アエティオス(『学説誌』I 15, 8 [Dox. 314])

デモクリトスによれば、自然本性的には色は存在しない。なぜなら元素は無性質であり、「密なるもの」〔原子〕と空虚だからである。だがそれらから合成されたものは、それらの「並び具合」と「恰好」と「向き」によって色を帯びる。このうち「並び具合」は配列、「恰好」は形、「向き」は位置である。すなわち表象はこういったものからなるのである。これら表象に対して存在する色には、白、黒、赤、青の四つの種差がある。

126

アリストテレス(『感覚と感覚されるものについて』4. 442 b 11)

というのも、彼〔デモクリトス〕は白と黒を挙げるが、一方は粗さ、他方は滑らかさだというからである。また彼は味を〔原子の〕形に還元する。

126 a

ポルピュリオス(『プトレマイオス「音階学」注解』32, 6 D.)

視覚は、学者たちのいうところによれば、視線を伝達作用によって対象へ向けて送り出すことで対象の覚知を生み出すのであるが、それと同じ仕方で聴覚もまた生み出されるわけではないとデモクリトスはいふ。聴覚は、デモクリトスのいうところによれば、「話しの貯蔵器」であって、「容器」のように音を待ち受けているのである。すなわち、音は「中へ分け入り」、「流れ込む」のであって、われわれが聞くよりも早く見るのはそのことが原因である。というのも、電光と雷鳴が同時にかかるとき、一方電光をわれわれはその発生と同時に見るが、他方の雷鳴はまったく聞かないか、ずっと後で聞くからであり、このことは別の出来事によることではなく、光はわれわれの視覚と〔直接〕出会うが、雷鳴は、聴覚がその雷鳴を「受け容れて」から、その聴覚の上で付随的に生じるからなのである。

127

逸名著作家の古注(『トラキアのディオニュシオスへの古注』p.482, 13 Hilg.)

エピクロス、デモクリトス、それにストア学徒は、音声は物体であるという。

128

アエティオス(『学説誌』IV 19, 13 [Dox. 408])

〔音声について〕デモクリトスは、空気もまた「同じような形のものに細かく砕かれ」、声の破片と共に転々とするという。すなわち、「カラスはカラスの傍に留まり」〔類は類を呼ぶ〕、「神は常に似た者を似た者と引き合わせる」〔『オデュッセイア』XVII 218〕のである。実際また浜辺では、ある場所では球形のものが、別の場所では細長いものがあるというように、同じところに似たような小石が見られるのである。篩にかける場合もまた「同じような形のものが同じところに集

まり、その結果、そら豆とエジプト豆が分離される。だが人はこれらの所見に対して次のようにいうこともできよう。氣息のわずかな破片がどのようにして一万人収容の劇場を満たすことができるのかと。

129

テオプラストス(『植物の諸原理について』VI 1, 6)

デモクリトスはそれぞれの味に〔原子の〕形を割り当てる。甘い味は丸くて大きいのが作り出す。酸っぱいのは形が大きく、ざらざらして角が多く、丸くないもの。鋭い味は、その名の通り塊が鋭く角ばっており、曲がっているが薄くて丸くないもの。刺すような味は丸くて薄く、角ばり、曲がっているもの。塩辛いのは角ばっていて大きく、歪んでいるが二等辺であるもの。苦いのは丸くて滑らか、歪みは有するがサイズは小さいもの。脂っこいのは薄くて丸く、小さいのが〔それぞれ〕作り出す。

130

テオプラストス(『植物の諸原理について』VI 2, 1)

〔デモクリトス説に対する反論〕だがおそらく、先に反論したように、このことも先の説明〔味の相違は味を作り出すものの機能の相違に基づくという説明〕のためになされたものと考えられよう。というのも、このような説明を行なうことによって、機能そのものの原因を説明していると彼は考えているのだからである。すなわち、なぜあるものは収縮させ、乾かし、凝結させ、他のものは滑らかにし、均等化し、静まらせるのか。またあるものは分離し、ほぐすなどといったことを行なうのか、といったことである。だがしかしおそらく人は、それらのことに加えて、〔作用を受ける〕基体〔すなわち主体の側の感覚〕についても、それはどのようなものであるか説明するよう彼らに求めることができよう。なぜなら、作用するものだけでなく、作用を受けるものもまた知らねばならないからであり、とりわけ彼のいうように「同じ味であっても、すべてのものに同じように現れるわけでない」とするならばである。われわれにとっては甘いものが別の動物にとっては苦いということは、当然ありうることであり、その他の場合も同様だからである。

131

テオプラストス(『植物の諸原理について』VI 2, 3)

〔味の相違を説明するのに〕形を語る人たちの場合、次のこともまた不条理である。すなわちそれは、同じ形のものであっても、大と小という点で相違すれば、同じ機能を持たないようになるということである。なぜなら、〔その場合〕機能は姿形ではなく、サイズに基づくのであるが、そのサイズをおそらく人は強制的作用に、一般的にあって、「より大きい」「より小さい」に還元するであろうが、形そのものは機能を有さず、作用もなしえないとするのは、機能は形の内にあるものである以上、合理的でないからである。げだし、それら〔サイズの違うもの〕も同じ形のものであれば、他の場合と同様、それに属するもの〔機能〕も同じであろうから。

132

テオプラストス(『植物の諸原理について』VI 7, 2)

また少なくともデモクリトスに対して人は、一体どのようにして〔味は〕互いに生じ合うのかと問うでもあろう。げだし、〔原子の〕形が変化して、凸凹の鋭角的なものから円形のものになると

しなければならないか、あるいは、すべての味が内在しているが(例えば酸っぱいもののそれも、辛いもののそれも、甘いもののそれも内在しているが)、そのあるものが分離されて〔表面に出てき〕(それらのそれぞれは以前からずっと存在していたが、他方ではそれぞれ固有のものである)、他のものは下に留まるとしなければならないか、あるいは第三のこととして、あるものは出て行き、あるものは入ってくるとしなければならないかであろう。だが、〔原子の〕形が変わるというのは不可能であるから(原子は影響を受けないものであるから)、残るは、あるものは入ってき、あるものは出て行くということであるか、(あるいは、あるものは下に留まり、あるものは〔表面に〕出てくるということ)であろう。だがこのいずれも不合理である。なぜなら、こういったことを惹き起こすもの、こういったことを為すものは何なのかということが、加えて説明されねばならないからである。

133

テオプラストス(『臭いについて』64)

では一体なぜデモクリトスは、味は味覚に関連させて説明しているのに、臭いや色も同じように基礎となっている感覚〔主体の側の感覚〕に関連させて説明しなかったのか。けだし、〔原子の〕形に基づいて説明する必要があったからである。

134

セクストス・エンペイリコス(『ピュロン主義哲学の概要』II 63)

蜜がある人には苦く、ある人には甘く思われるということから、デモクリトスは甘さも苦さもそれ自体としては存在しないと主張した。

135

テオプラストス(『感覚論』49 ff. [Dox. 513])

(49) 他方デモクリトスは感覚について、感覚は反対のものによるのか、同じものによるのか、明確に規定していない。けだし、感覚することは変化を作り出すことであるなら、差異によると彼は考えていたことになるであろう。なぜなら、同じものが同じものによって変化することはないからである。だが逆に、感覚するということは、また一般に変化するということは、作用を受けることであるが、彼もいうように、同じでないものが作用を受けるということは不可能であり、異なるものであっても、異なるものである限りにおいてではなく、そこに何か同じものが存している限りにおいて作用を受けるのだとすれば、感覚は同じものによることになるだろう。それゆえ感覚についての〔デモクリトスの見解は〕両様に解することが可能なのである。だが彼は〔このことに明確に答えることはしないで、〕すぐさま感覚のそれぞれについて順に語ることを試みている。

(50) さて、見ることは映ることによると彼はする。だが映るというこのことについては、彼は彼独自の見解を語っている。すなわち、映るのは瞳において直接起こるのではなく、眼と見られるものの間の空気が見られるものと見るものによって縮められて刻印されるというのである。というのも、あらゆるものから絶えず何らかの流出物が流れ出ているからである。そしてこの刻印されたものが固形で異なる色のものであるとき、湿った「眼に」映ずるのである。そして密なるものは通ることを許さないが、湿ったものは通ることを許す。それゆえまた湿った眼の方が硬い眼より見るのに適しているという。ただし、外側の「被い」は能う限り細かく密であるが、内部は能う限りスポンジ状になっていて、緻密で丈夫な肉がなく、また濃くて脂っこい水分もなく、また眼の表面

上の管もまっすぐで湿気がなく、刻印されたものと「同形になっている」場合の話であるが。なぜなら、それぞれのものを最もよく認知するのは同性のものだからである。

(51) さて、まず第一に、空気への刻印というのは不条理である。なぜなら、刻印されるものは密でなければならず、「脆く碎ける」ようなものであってはならないからである。ちょうどデモクリトス自身これを譬えて「例えば人が蠟に印を押す場合のような刻印」といつているように。次に、水の中に刻印する方が、〔空気に刻印するより〕密である分だけ、容易である。だが、それだけ好都合であるはずなのに、見えるのは劣るのである。一般に、『エイドス〔形〕について』の中でのように、形を運ぶ流出物といったものを持ち出しながら、どうして〔その上〕刻印といったものを持ち出さねばならないのか。というのも、剥離像〔エイドーラ〕はそれ自身が映ずるからである。

(52) しかしそのようなことが実際に起こり、空気が押されて密になった蠟のように象られるとした場合、〔眼における〕映りはどのようにして生じ、またどのようなものであるだろうか。というのも、刻印は、他のものにおいてと同様、見られるものに対して顔を向け合うようになること、必然だからである。だがそのようになるなら、刻印が反対にひっくり返るのでなければ、映りが生じるということは不可能である。このことが何によって起こるのか、またどのようにして起こるのか、明らかにされねばならない。それ以外の仕方で見るということは成立しえないからである。次にまた、同じ場所で複数のものが見られる場合、同じ空気の内にもどのようにして複数の刻印が存するのであるか。さらにまた、互いに相手を見るということはどういうようにして可能なか。というのも、そこから刻印が発する元のもの同士が互いに向き合う形になるので、刻印はぶつかり合わざるをえないからである。かくて以上のことが〔さらなる〕探究を必要としているのである。(53) また以上のことに加えて、一体なぜ各人は自分自身を見ないのか。というのも、近くにいる人の眼に映ると同じように、自分の眼にも刻印は映ずるのであるから。それがまっすぐに向き合って位置し、木霊の場合とちょうど同じ効果をもたらす場合には、とりわけそうである。声はそれを発した当人にも撥ね返ってくると彼はいつているのである。しかし一般的にいつて、空気への刻印ということがそもそもおかしいのである。なぜなら、彼の語るところからして、必然的にすべての物体が〔空気に〕押印されることになり、その多くは重なり合うことになろうが、このことは視覚にとって妨げとなろうし、またその他の点でも理に適っていないからである。さらに、いやしくも刻印が存続するなら、物体がはっきりしていなかったり近くにないような場合でも、夜はともかくも、昼間であれば、見えねばならないはずである。もっとも、夜は空気が一層生き生きしているのだから、それだけ一層刻印が存続するということもありそうなことであるが。(54) しかしおそらく太陽や光は、ちょうど〈光線を〉差し向けるように、視覚の上に映像を作り出すのである。これがデモクリトスのいおうとしていることであるように思われる。というのも、少なくとも「太陽は自分から押しやり、撥ね返して空気を密にするから」と彼はいつているが、これは不条理である。なぜなら太陽はむしろ分解する本性を持っているからである。またひとり眼だけでなく、身体のものであつては〔視覚という〕感覚能力を分与しているのは不条理である。すなわち彼は、広汎に受け容れ、身体のものであつては他の部分にそれを伝えるために、眼は空虚と水分を有さねばならないというのである。また一方では同性のものが最もよく見えるといいながら、他方では同じものは映えないからという理由で、異なる色によって映像を作り出しているのも不条理である。大きさや距離はどのようにして映るのかという問題についても、語ろうと試みてはいるが、明らかにしていない。(55) かくて、視覚についてデモクリトスは、幾つかの点では独自の説を語ろうとしたが、それ以上に多くの問題を〔将来の〕研究に委ねたのである。

聴覚については、彼は他の人たちと似たような仕方で説明している。すなわち空虚の中に入り込

んだ空気が内部で運動を作り出すのである。ただし、空気は身体全体に同じように入っていくが、耳を通して最もよく、そして最も多量に入っていくとする〔点が彼独自の点である〕。というのは、〔耳において空気は〕最大の空虚を通るからであり、また停滞すること最も少ないからである。それゆえに身体他の部分では音は感覚されず、ひとり聴覚によってのみ感覚されるのである。また内部でそういった運動が生み出されると、それは速さのために「拡散される」。すなわち音は、空気が濃密化され、力を伴って入っていくとき、生じるのである。かくして彼は、外部感覚を「接触」によって説明したように、内部感覚もそうしているわけである。(56) 最も鋭く聞こえるのは、外部の「被い」は密であるが、血管が空で最大限乾いており、他の身体部分、すなわち頭や聴覚器官によく通じている場合である。さらに骨が密で、脳が良好な状態にあり、脳の周辺も最大限乾いている場合が、そうである。なぜなら、音はそのような場合には広くて乾いたよく通じる空虚を通ることになるので、ひとまとまりになって入って行き、速やかに「拡散して」、身体全体にまんべんなく行き渡り、しかも外に抜け出ることがないからである。(57) さて、規定が不明瞭であるのは他の人々と同様であるが、音が入ってくるのは〔聴覚だけでなく、〕身体全体にわたってであり、聴覚を通ってくる時も〔すぐさま〕全面に拡散されるとし、あたかも〔音の〕感覚は聴覚のみによってではなく、身体全体によって生み出されるかのように語っている点は〔デモクリトスに〕固有の不条理である。なぜなら、身体の全体も聴覚と共に何らかの影響は受けるにしても、そのゆえに身体の全体もまた音を感覚するというにはならないであろうからである。けだしこのこと〔身体の全体が共に影響を受けるということ〕はすべての感覚の場合に同様に起こることであって、感覚の場合のみならず、魂の場合もそうである。視覚と聴覚についてのデモクリトスの説明は以上のごとくであるが、他の感覚については大多数の人々とほぼ同じである。

(58) 思惟について彼の述べるところは、わずかに次のようなことでしかない。すなわち「〔思惟は〕魂が混合において釣り合いのとれた状態にあるとき成立する」ということである。魂が過度に熱くなったり、冷たくなったりすると、それは変様すると彼はいう。それゆえ古人がそういった状態にあるものを「意識朦朧状態」¹といったのは正当なのである。したがってデモクリトスが思惟を身体の混合に基づいて説明していることは明らかであり、この説明はまさに魂を物体とする彼にとってはおそらく理に適ったものだったのである。さて、感覚と思惟について先人たちから継承された見解としては、ほぼこういったものが、ほぼこれだけある。

(59) 他方、感覚されるもの〔感覚の対象〕について、その本性は何であり、またそのそれぞれはどのようなものであるか、〔プラトンとデモクリトス以外の〕人々はこれを十分論じていない。というのも、触覚によるもののうち、彼らが語るところあるのは「重と軽」、「温と冷」といったことでしかないからである。例えばアナクサゴラスが空気とアイテールを区別する場合など、まばらで稀薄なものは温かく、濃密で分厚いものは冷たいとされる。「重い」と「軽い」も彼はほぼ同じ原理によって説明しており、さらに上方運動と下方運動によって説明し、そしてそれに加えて、音については、それは空気の運動であるとし、臭いについては、一種の流出物であるとしている。だがエンペドクレスは色についても論じており、白は火から、黒は水からなるとする。これ以外の人々は、白と黒を原理とし、それ以外の色はそれらが混合されて生じるとするにとどまっている。アナクサゴラスですら、これらについては簡単な論述しかしていない。(60) しかしデモクリトスとプラトンは〔感覚について〕極めて広汎に論じており、それぞれに規定を与えている。ただし、一方〔プラトン〕は感覚されるものからその実在性を奪っていないのに対し、他方〔デモクリトス〕はすべてを感覚の受様態とする。どちらに真理があるかは当面の論点ではないが、それぞれがどれだけのことを論じ、またどのような規定を与えたか、それぞれの全般的な論述法を最初に述べ

た上で、説明を試みたいと思う。

さて、デモクリトスはすべての感覚について同じように語っているわけではなく、あるものは大きさによって、あるものは〔原子の〕形によって、若干のものは配列と位置によって規定している。他方プラトンはほとんどすべてを様態と感覚に関係づけて説明している。したがって両者ともそれぞれその前提と矛盾するような仕方で語っているように見える。(61) なぜなら、一方〔デモクリトス〕は〔感覚されるものを〕感覚の受様態としながら、その本性を自体的としているのに対し、他方〔プラトン〕は〔感覚されるものも〕実体によって自体的に存するとしながら、それを感覚の諸様態に関係づけて説明しているのだからである。

さて、重さと軽さをデモクリトスは大きさによって区別する。なぜなら、それぞれがひとつひとつ分離されるなら、形の上では〔それぞれ〕異なるにしても、目方は大きさに基づいてそのあり様を獲得するだろうからである。ではあるが、混合体の場合は〔事情が異なり〕、より多くの空虚を含むものはより軽く、それが少ないものはより重いという。幾つかの箇所では彼はこのように述べている。(62) だが他のところでは単純に、稀薄なものは軽いと彼はいつている。硬さと軟らかさについても似たようなことであって、密なものは硬く、疎なるものは軟らかいのである。「より硬い」「より軟らかい」「最も硬い」といったことも当然同じ理屈で成立する。だが空虚の位置と含まれ方は、硬軟・軽重に対応するわけではない。それゆえ鉄はより硬いが、鉛はより重いのである。ただし鉄は均一な仕方で合成されておらず、多くのところで、また広汎に空虚を含んでおり、あるところでは密となっているが、一般にはより多くの空虚を含んでいる。それに対して鉛は空虚を余り含まず、全体にわたって均一的かつ一様に合成されている。それゆえ鉛は鉄に比べてより重い、しかしより軟らかいのである。(63) 重さと軽さ、硬さと軟らかさについてデモクリトスの規定するところは、以上のようなことである。その他の感覚は何ものに属するのでもなく、すべては感覚〔器官〕が質的に変化する場合のそのあり様であり、そういった感覚から表象が生じるという。なぜなら、冷についても、温についても、その実在的本性といったものは存在せず、〔原子の〕形が「移動する」ことによってわれわれの側に変化を作り出したものでしかないといふからである。すなわち、何であれひとまとまりになったものが、それぞれにおいて優勢となるのであり、広く分散したものは知覚されないのである。それらが実在的にあるのでないことの証拠は、それらはすべての動物に同じものとしては現れず、われわれにとって甘いものが他の人には苦く、また別の人には刺すような味のものが他の者にはヒリヒリしたり酸っぱかったりする等々のことである。(64) さらに、様態と年齢に応じた「混合によって人々は変化する」。そこでまた〔身体の〕状態が表象の原因であることも明らかである。かくて要するに、感覚についてはこのように想定されねばならないといふのである。とはいえ、他のものの場合と同様、感覚もまた彼は〔原子の〕形に還元する。もっともすべての感覚について彼は形態を当てがいでいるわけではなく、味と色についてはかなり成功しているが、その中でも味に関する方を、その表象を人間に関係づけて、より厳密に規定している。

(65) さて、「刺すような味」は、形が「角ばり」、屈折していて、微小かつ微細であるものである。その鋭さのゆえに速やかに、そしてくまなく通り抜け、ざらざらし「角ばっている」ために、結びつけ、縮ませるのである。それゆえ、それはまた内に空隙を作り出すため、体を熱くする。空虚を最も多く持つものが最も熱くなるからである。「甘い」のは円形の小さすぎない形からなる。それゆえそれは身体に全面的に拡散し、ごくスムーズに、そしてゆっくり全体に達する。(がしかし)それは通り抜けて行く際に他のものを「逸らせ」湿らせるために、他の味をかき乱す。他方、湿らされ、それ本来の並びから動かされたものは腹部へと流れ込む。というのは、そこは空虚が最

大であるので、通り抜けるのが最も容易だからである。(66) 「酸っぱい」のは大きくて角が多く、丸みが最も少ない形からなる。なぜなら、そういったものは身体に入るとき、血管を詰まらせて滞り、流れ込むのを妨げるからである。それゆえ腹部を沈静化するのである。「苦い」のは小さく滑らかで丸いのからなっており、湾曲した表面を具えている。それゆえそれはねっとりとし、ねばねばするのである。「塩辛い」のは、大きい丸くはなく、ある部分では凸凹であるが、〈大部分は凸凹でない〉ものからなる。それゆえ「曲がりくねったものから」なるのではない。(デモクリトスが「凸凹の」ということで語ろうとしているのは、相互に「かみ合い」、組み合わせられるものである。) 大きいものからなるというのは、塩分は地表に吹き出てくるからである。小さくて周囲のものに衝突されると、〔完全に〕全体と混じり合っていたであろう。また丸くないものからなるというのは、塩辛いものはざらざらしているが、丸いものは滑らかだからである。凸凹のからなるのではないというのは、他のと「かみ合わない」からであり、それゆえ「砕けやすい」のである。(67) 「ヒリヒリする」のは、小さくて丸くて角ばっているが、凸凹していないものからなる。けれど、ヒリヒリするものは角が多いためにその粗さによって熱くし、小さく丸く角ばっているために拡散するのである。というのも、角ばったものとはそういったものだからである。それぞれの味のその他の効力についてもデモクリトスは、同じように諸々の〔原子の〕形に関係づけて説明しているが、しかしそれらの形のどれひとつを取ってみても、純粋に他のものと混じり合うことなく存在しているわけではなく、それぞれの味の中には多くの形があり、同じ味が「滑らかい」「粗い」「丸い」「鋭い」、その他を含んでいるという。そしてその中に最も多く含まれるものが感覚とその効力に対して最も効果を及ぼすのであるが、さらにどのような〔身体の〕状態の中に入るのかも影響する。なぜなら、そのことによる相違は小さいものではなく、同じものが反対の感覚を作り出すこともあれば、ある場合には反対のものが同じ感覚を作り出すこともあるからである。(68) 味に関するデモクリトスの規定は以上のようなものである。

まず最初に不条理に思われるのは、すべての感覚について同じように原因を説明しないで、一方、重さと軽さ、軟らかさと硬さは、〔原子の〕大と小、疎と密によって説明し、他方、温と冷、その他の感覚は〔原子の〕形によって〈規定している〉点である。次に不条理なのは、一方、重さ・軽さ、硬さ・軟らかさについては、その本性を自体的としながら(大や小や密や疎は相対的でないからである)、他方、温と冷、その他は感覚器官との関係においてのみあるとし、しかもそのことをしばしば熱の〔原子の〕形が球形であることを理由にして語っていることである。(69) だが一般に、最大の矛盾、すべての場合に共通する矛盾は、一方では〔味を〕感覚の様態としながら、同時にそれを〔原子の〕形によって規定していることである。同じものであっても、ある人には苦く、ある人には甘く、また別の人には別様に現れる。だが形は様態ではありえず、同じものがある人には球形で、別の人には別の形ということはあるにないし(いやしくもある人には甘く、ある人には苦いという以上、そうあらねばならないであろうが)、またわれわれの側の状態によって形が変わるといってもありえない。端的に言って、形は自体的に存在するものであるが、甘さや、一般に感覚知覚は、彼もいうように、他のものに対して〔相対的に〕あるのであり、また他のものの内にあるのである。また同じものについては、それを感覚するすべての人に同じものが現れるとし、そしてそれらの真理を問いただすことを求めておきながら、それに先だって、同じ状態にない者には現れも同じでなく、ある者が別の者より真理を射当てているわけでは決してないといっているのも不条理である。(70) なぜなら、勝れた者が劣った者より、健康な者が病気の者より真理を捉えているということはあるそうだからである。そういった者の方が一層自然に即しているのだから。さらに、すべての人に同じように現れるわけではないからという理由で感覚されるものには自然本性

はないとされるのであるなら、明らかに、動物にも、他の物体にも、自然本性はないことになる。それらについても人々の判断が一致しているわけではないからである。しかしながら、甘くなったり苦くなったりするのがすべての人にとって同じことを理由としてでないとしても、少なくとも甘さや苦さの本性はすべての人に同じものとして現れているのである。このことは、思うに、デモクリトス自身もまた証言しているところである。なぜなら、もしそれらがある一定の本性を持っていなかったとするなら、どうしてわれわれにとって苦いものが他の人には甘かったり酸っぱかったりするといえるであろうか。(71) さらにまた、それぞれの感覚は実際にそのようなものとして生じているし、また存在してもおり、特に苦さにおいては「判断力の一部を分け持っている」とすら語っている箇所において、彼はそのこと〔感覚が特定の本性を有すること〕を一層明らかにしているのである。したがって、以上のことを通じて感覚に特定の本性を認めないのは明らかに矛盾しているし、またそれに加えて特に矛盾しているのは、以前にも語ったことであるが、他のものの場合と同様、〈苦さの〉実体を〔原子の〕形としながら、それには自然本性はないといっている場合である。なぜなら、一般に何ものについても自然本性といったものはないというか、同じ原因がある以上、それら味についても自然本性はあるとするか、いずれかだからである。また温と冷は、これを彼らは原理として立てるのだから、ある特定の本性を持っていそうである。だがそれらが持っているなら、他のものも持っているであろう。実際デモクリトスは、硬さと軟らかさ、重さと軽さについては、ある種の実体性を認めているのである。だがそれにもかかわらず、それらもまたわれわれとの関係において〔初めて〕語られると彼は考えるのであり、温や冷、その他については、何らの実体性も認めないのである。しかしながら少なくとも重さや軽さを彼が〔原子の〕大きさによって規定するとき、単純物体はすべて同じ運動傾向を持つこと必然であるから、したがってそれらはひとつの特定の質料からなるのであり、同じ本性のものであることになる。(72) しかしこのことについてはデモクリトスは思惟を〔身体の〕変化に基づける人たちに一般的にしたがっているだけであるように思われる。これは極めて古い考えであって、あらゆる古人が、詩人も知者も、〔身体の〕状態に基づいて思惟を説明しているのである²。他方、味のそれぞれにデモクリトスは、様態における〔味の〕機能に対応させて、形を割り当てる。〔そうすると〕形は前者の味からだけでなく、感覚器官からも結果しなければならない。味が感覚器官の様態とされるのであれば、とりわけそうである。なぜなら、球形の形も、別の形も、あらゆる場合に同じ機能を有するわけではないからであって、したがって〔味は〕基体の側〔感覚する主体の側〕によっても規定されねばならないからである。〔感覚器官は〕同じものからできているのか、あるいは同じでないものからできているのか、また感覚の変化はどのようにして生じるのか、規定しなければならない。またそれに加えて、味覚についてだけでなく、触覚によるあらゆる場合に同じように説明しなければならない。しかしそれ〔触覚〕は味に対して何らかの相違があるということなのか(そうだとすれば、彼はそれを分けねばならない)、あるいは同じように説明することが可能であったが、それを彼は怠ったかであろう。

(73) 色には四つの単純色があると彼はいう。さて、白いのは滑らかなものである。なぜなら、ざらざらしていて蔭をなすということがなく、また〔光の〕通りが難しくないもの、そのようなものはすべて明るいからである。明るいものは孔がまっすぐで透明でなければならない。かくして白いものの中でも硬いものはこういった形からできているのであり、例えば貝殻の内側の面がそうである。それは実際そのように陰なところがなく、「輝かしく」、孔がまっすぐなのである。〈他方〉脆くて壊れやすいのは、丸いが位置が互いに斜めになっているものからできており、それが二つつ結びつくことによってなっている。しかし全体の配列は能う限り一樣なのである。そういっ

たものである。脆いわけであるが、それは結合部が小さいからである。壊れやすいのは同じように並んでいるからである。蔭なるところがないというのは、滑らかで平たいからである。それらの間でより白いということがあるとするなら、それは形がより精確に、より純粋に上述のようなものであり、また配列や位置がより上述のようなものであることによる。(74) さて、白はこういった形からなるが、他方黒はそれとは反対の形からなる。すなわち、ざらざらし、凸凹した一様でないものからなる。さればこそ、それは蔭を生み、孔もまっすぐでなく、通りも悪いのである。さらに流出物も鈍く、乱れている。けだし流出物もまた、それがどのようなものであるかによって、表象に対して何がしかの相違をもたらすからである。表象は空気の遮りによって異なるものとなるのである。(75) 赤は、温もまたそれからなるのと同様の〔形の原子〕からなるが、ただより大きいものからなる。すなわち、形そのものは同じであっても、合成がより大きい場合は、それだけ一層赤いのである。赤がそういったものからなることの証拠は、熱くなればわれわれは赤くなるということである。またその他、火にかけられたものも、火の色を持つにいたるまでは、赤みを帯びる。また大きい形からなるものはより赤いというのは、例えば生の木の炎や炭火は乾いた木のそれより赤いのである。鉄やその他のものも、火にかけられると、そうなる。最も多くの、最も繊細な火を含むものが最も明るい、しかしぶつ太くて少ない火の方がより赤い。それゆえより赤いものはそれだけ熱さが劣るのである。熱いものは微細なものだからである。また緑は固体と空虚から、それら両者が混合することによってできているが、位置と配列によってその色合いは〈変化する〉。(76) かくて、単純な色は以上のような形に関係して成立しているのである。それぞれは、混じり気のない要素からなればなるだけ、それだけ一層純粋である。その他の色はそれらの混合に基づく。例えば、金色とか銅色とか、そういった類のものはすべて、白と赤からなる。すなわち、明るさは白から得、赤みは赤から得ているのである。というのも、赤が混合の際に白の空虚の内へと入り込むからである。もしこれらに緑が加わるなら、極めて美しい色が生まれるであろう。だが緑色の合成はわずかでなければならぬ。なぜなら、白と赤がこのように合成されている場合、その合成は大きいものでありえないからである。その取り上げの多少に応じて、色合いは異なるものとなる。(77) 紫は白と黒と赤からなる。赤が大部分を分け持ち、黒はわずかであり、白はその中間である。それゆえ紫は感覚に対して快いものとして現れる。ところで、黒と赤がその色〔紫〕に内在することは視覚に明らかである。また白が内在することは、明るさと透明さが示している。こういったものを作り出すのは白だからである。藍色は深い黒と緑からなるが、黒の役割の方が大きい。また葱色〔濃緑色〕は紫と藍色から、あるいは緑と紫からなる。なぜなら硫黄色がそういったものであって、明るさを分け持っているからである。紺碧色は藍色と炎の色からなるが、その形は丸く針型であって、ために暗さのうちに輝きがあるのである。(78) 赤褐色は緑と紺碧色からなる。緑(と白)が混ざっている場合には、炎のような色になる。蔭のないものとなり、暗さが駆逐されるからである。赤も白と混ぜ合わされると、大抵の場合、輝かしい緑色を作り出し、黒色を生み出すことはまずない。それゆえ植物もまた、熱せられてほぐされる以前は、最初緑色なのである。さて、〔デモクリトスによって〕述べられている色は、数の点ではこれだけであるが、色も味も混合によって無限となる。あるものは除去したり、あるものは付け加えたり、またあるものはより少なく、あるものはより多く「混ぜる」なら、そうである。なぜなら、それらのいずれも他のものと同じとはならないだろうからである。

(79) さて、最初に、原理〔となる色〕を増やしていることがまず問題である。他の人々は白と黒を、それらのみが単純色であるとして、挙げているのである。次に彼は、すべての白に対してひとつの形態を割り当ててではなく、硬いものと脆いものに〔それぞれ〕異なる形態を配当してい

るが、触覚における違いによって別の原因があるというのはありそうなことでないし、また形が違いの原因ではなく、むしろ位置がそうだということになってしまうであろう。なぜなら、丸い形も、一般にすべての形が、それだけで蔭を作ることができるからである。その証拠は次のことである。デモクリトス自身、滑らかなものもそのあるものは黒く見えるという限りにおいて、そのような確信を口にしてしているのであって、黒いものと同じ合成や配列を持つから、それらのゆえにそのように見えるという。逆にざらざらして白いもの場合もまたそうである。すなわち、それらは大きな形からなるが、その結合が丸くなく、「何列にも並んで」おり、形の形態が混合的で、ちょうど登攀路や城壁の前の盛土のような状態になっているという。そういったものであっても、蔭のないものでありうるし、また明るさを妨げないこともあるのである。(80)これに加えてまた、動物のあるものは、蔭で暗くなっているような位置に置かれるなら、その白さが黒くなるということがあがるが、このことを彼はどのように説明するのであろうか。一般に彼は、白の本性というよりは、透明や明るさの本性を語っているように思われる。なぜなら、見通しのよいことや孔が纏れ合っていないことは透明に属することであるが、透明なもののどれだけのものが白いであろうか。さらに、白いものの孔はまっすぐであるが、黒いのは纏れ合っているというのは、〔対象そのものの〕本性が〔われわれの中に〕入ってくるというように想定していることである。だが彼は他方では、流出物とその視覚への現れによってわれわれは見るといっているのである。もしそうなら、孔が互いに整然と並んでいるか、纏れ合っているかは、何の関係もないことである。また流出物が空虚からどのようにして生じるのか、想定するのは容易でない。したがってその原因が語られねばならない。というのも、彼は光ないしは他の何らかのものから白を派生させているように思われるからである。それゆえに、空気の濃厚さが黒く見えることの原因であるといったりしているのである。(81)さらに、黒を彼はどのように説明するのか。それを理解するのも容易でない。すなわち、蔭は黒の一種であり、白の遮りである。それゆえ第一に白こそ実在的本性である。だが同時に彼は、蔭を作ることだけでなく、空気や中に入ってくる流出物の濃厚さ、さらには眼の錯乱をもその〔黒の〕原因としているのである。だがこれらは見通がよくないことのために起こるのか、あるいはそれ以外の何かによって起こるのか、そしてそれはどのような原因によってなのか、彼は明らかにしていない。(82)また緑については形態を指定せず、固体と空虚のみから作り出しているのも不条理である。なぜなら、これらは少なくともすべてのものに共通であるからして、〔したがって緑は〕どのような形からでも生じることになろうからである。他の色に対してと同様、〔緑に対しても〕何らかの固有の形を想定すべきであった。またもし、黒が白の反対であるように、緑は赤の反対であるとすると、それは〔赤の形態と〕反対の形態を持たねばならないはずである。他方、反対でないとするなら、原理〔的な色〕を反対関係にあるとしないということ、このこと自体が驚くべきことであろう。というのは、すべての人がそのように〔すなわち原理的な色は反対関係にあると〕考えているからである。だが、何にもまして正確に規定すべきであったのは次のことである。すなわち、どのような色が単純色であり、何ゆえあるものは複合色であるが、他のものは複合色でないのかということである。なぜなら最大の難問は原理〔となる色〕についてだからである。しかしこれはおそらく困難な課題であろう。というのも、味の場合であっても、もし人が単純な味を指定することに成功するなら、そのことは〔単純な味にとどまらない〕それ以上を語ることになろうからである。臭いについては、ただ重いものから出る微細な流出物が「香り」を作り出すというだけで、それ以上の規定を与えていない。だが、その本性はどのようなものであり、何によって影響されるのか、おそらくこのことこそ最も主要な点であったであろうが、彼はそれ以上何も付け加えていない。(83)このようにデモクリトスは幾つかのことを論じぬまま放置しているのである。

(1) 「古人」はホメロスを指しているが、ただ現存するホメロスのテキストにこの語は見出されないようである。本章A 1 0 1の注1参照。

(2) 詩人ではホメロス、アルキロコス、エウリピデス、哲学者ではヘラクレイトス、パルメニデス、エンペドクレスなど、多くの古人が思惟を四肢のその都度の状態に基づいて説明した。

136

テルトゥリアヌス（『魂について』43）

デモクリトスは、〔眠りは〕氣息の欠乏であるとする。

アエティオス（『学説誌』V 2, 1 [Dox. 416]）

デモクリトスによれば、夢は剥離像〔エイドーラ〕の現前によって生じる。

137

キケロ（『ト占について』II 58, 120）

かくしてわれわれは、夢を見ているとき、眠っている人の魂はそれ自ら動くと思なすべきであるか、あるいはデモクリトスがそう見なしているように、外からやってくる外部の像〔剥離像〕によって打たれる〔ことで動かされる〕と考えるべきであるか。

138

キケロ（『ト占について』I 3, 5 [Dox. 224]）

多くの箇所では権威ある作家であるデモクリトスは未来の予兆を是認しているし、またペリパトス派のディカイアルコス¹も、その他の予言は否定したが、夢と狂気のそれは残している。

(1) ペリパトス派のディカイアルコスについては、ピュタゴラスの章8 aの注1参照。

キケロ（『ト占について』I 57, 131）

他方デモクリトスは犠牲獣の内臓を調べるのに古人は賢明な定めを設けていたと考えている。それらの状態や色合いから、ある場合には健康の、ある場合には病の徴候が認知されるのであり、また時にはそれは農地の将来の不毛とか豊穡の徴候でもあるのである。

139

ケンソリヌス（『生誕の日について』4, 9）

他方、アブデラのデモクリトスは、人間は最初水と泥から発生したと考えている。

アエティオス（『学説誌』V 19, 6 [Dox. 431 n.]）

デモクリトスは、分節化される以前の諸部分が組み合わされることによって動物は生み出されたのであるが、水が最初に動物を生む因になったとする。

ラクタンティウス（『信教提要』VII 7, 9）

人間こそが、世界とその内に存在するすべてのものが造られた原因〔目的〕であるとストア学徒

はいう。聖書も同じことをわれわれに教えている。それゆえ人間は創造主によるのでもなければ、また理由もなく、蛆虫のように大地から湧き出てきたと考えるデモクリトスは誤っているのである。

140

アエティオス(『学説誌』V 4, 3 [Dox. 417/8])

ストラトン¹とデモクリトスは、〔精子の質料のみならず、〕その機能も物体であるとする。なぜならそれは気息的だからと。

(1) ランプサコスのストラトン。ペリパトス派第3代目の学頭。パルメニデスの章A 3 8の注1参照。

141

アエティオス(『学説誌』V 3, 6 [Dox. 417])

デモクリトスは、〔精子は〕身体全体と骨や肉や腱といった身体の最も主要な部分から発するとする。

142

アエティオス(『学説誌』V 5, 1 [Dox. 418])

エピクロスとデモクリトスは雌もまた精子を発するとする。すなわち雌は反対の方向に向いた〔すなわち内側の方に向いた〕生殖腺を持つのである。それがために性交への欲求もまたある。

143

アリストテレス(『動物発生論』Δ 1. 764 a 6)

他方、アブデラのデモクリトスは雌と雄の違いは母親の体内で生じるというが、しかしながら、あるものが雌となり、あるものが雄となるのは、少なくとも熱さや冷たさによることではなく、〔左右〕どちらの部分から出てきた精子が優勢になるかによるのであり、その部分によって雌と雄に分かれるという。

ケンソリヌス(『生誕の日について』6, 5)

他方、デモクリトスは、どちらの親の原理が先に座を占めるかで、その親の本性が再現されると述べている。

アエティオス(『学説誌』V 7, 6 [Dox. 420])

デモクリトスは、共通の部分はどちらかに偶然的に由来するが、性に特有である部分はどちらが優勢であるかによって決まるとする。

ネメシオス(『人間の本性について』247 Matth.)

ところでアリストテレスとデモクリトスは、女の精子が子供の誕生に寄与するとはまったく考えようとしなない。

アリストテレス(『動物発生論』B 4. 740 a 33)

血管が根のように子宮に結びついていて、それを通して胎児は栄養を摂取する。げだしこのことのために動物は子宮内にとどまるのであって、デモクリトスのいうようにその諸部分が妊婦の諸部分に則って形づくられるためではないのである。

アリストテレス(『動物発生論』B 7. 746 a 19)

子宮内の子供は肉のようなものを吸うことによって養われていると知っている人たちもいるが、正しく語られていない。

アエティオス(『学説誌』V 16, 1 [Dox. 426])

デモクリトスとエピクロスは、母胎内の胎児は口によって養われているという。それゆえ生み落とされるとすぐに乳房に口をもっていくのである。というのは、母親の胎内にもそれらによって胎児が養われる一種の乳頭と口があるからである。

アリストテレス(『動物発生論』B 4. 740 a 13)

デモクリトスのように、動物においては、外側が最初に分化し、しかる後に内部が分化すると語っている人は、すべて正しく語っていない。

ケンソリヌス(『生誕の日について』6, 1 [Dox. 190])

[胎児においては何が最初に形成されるのか。] デモクリトスは腹と頭だという。それらは空虚を最も多く含むからである。

アリストテレス(『動物発生論』Δ 4. 769 b 30)

さてデモクリトスは、奇形が生まれるのは、二つの精液が合流するのに、一方が早く発出し、他方が遅れることによってであるという。そしてこの〔遅れて〕出てきたものが子宮の中に入ってくると、そのために諸部分がぐじゃぐじゃになって纏れ合うのである。鳥の場合、交尾が迅速に行なわれるという特質があるので、卵もその色も常に混交したものになっていると彼はいう。

アリストテレス(『動物発生論』E 8. 788 b 9)

さて、このこと〔歯の抜け変わり〕についてはデモクリトスもまた述べている。すなわち、歯が落ちるのは然るべき時より早く動物に歯が生えるためであると彼はいうのである。というのも、いわば最も盛りにある時にこそ、生えるのが自然だからである。然るべき時より前に生じるのは、哺乳が原因であると彼はいう。

アリストテレス(『動物部分論』Γ 4. 665 a 30)

無血動物はいずれも内臓を持たない。無血動物の場合は小さいためにそれらはよく見えないのだ

とデモクリトスは考えたようであるが、そうだとするならば、それらについて正しく判断したとは思えない。

149

アリストテレス(『動物発生論』B 8. 747 a 29)

というのも、騾馬の孔〔生殖管〕は、その始まりが同種のものからでなかったために、子宮の中で破壊されてしまったとデモクリトスはいうからである。

150

アリストテレス(『動物誌』I 39. 623 a 30)

蜘蛛は生まれるとすぐに糸を発することができるが、これは、デモクリトスのいうように中から排泄物として出すのではなく、樹皮とか、あるいは毛を逆立てるもの、例えばヤマアラシのように、体〔の表面〕からである。

150 a

アイリアノス(『動物誌』VI 60)

ヘロドトス〔『歴史』I 216〕の語るところによれば、マッサゲタイ人¹は自分たちの前に簾を掛けただけで、男は女と公然と交わるという。万人が彼らを見ておろうとも、彼らは少しも気にしないのである。だが駱駝は決して公然と交わるようなことはなく、例えば証人が見ているような場合には交わらない。しかし、それを慎みと呼ぶべきか、あるいは自然の密やかな恵みと呼ぶべきか、そういったことを詮索するのはデモクリトスやその他の人々に委ねることにしよう。彼らは、予測すべき手掛かりもなければ、比較しうるものとしてないものについてすら、その「原因」を十分語りうると考えているのである。牧童ですら、駱駝どもの間に番い合おうとする欲求が感じられたときには、すぐさまそこから身を引くのであって、それはちょうど寝室に赴こうとする新郎新婦のために人々が辞去するのに似ている。

(1) カスピ海の東方に広がる大平原の少なからぬ部分を占めていたというスキュタイ人の一支族。右に述べられている話については、ヘロドトス『歴史』I 216 参照。

151

アイリアノス(『動物誌』XII 16)

デモクリトスは豚と犬は多産であるという。そしてその理由を説明して、それらは子宮ないし精子を受け容れる場所を多く持っているからであると語っている。そこで精液は一度の射精でそれらのすべてを満たすということがなく、連続した射精で精液の受容器官が一杯になるよう、そうした動物は二度三度と番うのである。しかし騾馬は子を生まないと彼はいう。その理由は、他の動物と同じような子宮を有さず、形態が異なり、精液を受け容れるのが極めて難しいからである。というのも、騾馬は自然の造り出したものではなく、それは人間の思いつきと大胆な所業によるいわば姦通によって生まれた人工物であり、盗品だからである。「たまたま馬を騾馬が強姦したことから妊娠したのであるが、そういった強制行為をさせることを人間が学び取ったため、それからはそれが彼らの種族の習性となるにいたったとわたしには思われる」と彼〔デモクリトス〕は語っている。特に顕著なのは体格が最大のリビアの騾馬であるが、彼らはたてがみが長くなく刈り込まれた馬と

交尾する。というのも、そのたてがみによって自らの美しさを誇るほどの牝馬はそのような夫を受け入れようとしなからず、そのように知者たちは彼らの娶せを語っている。

ヒポクラテス(『子供の本性について』31 [VII 540 L.])

一度の性交によって双子が生まれることは、次のことがその証拠となる。犬や豚や、その他、一度の性交によって二匹あるいはそれ以上の子を産む動物があり、またこうした動物のそれぞれ〔の胎児は〕は子宮内の〔同一の〕胎盤と被膜の中にあるのである。こうなっていることをわれわれは自分の目で見ることができ、またそれらは、大抵の場合、同じ日の内にすべての子を産むのである。

擬アリストテレス(『問題集』10, 14. 892 a 38)

動物の中には、豚や犬や兎のように多産なのもあれば、人間やライオンのようにそうでないものもあるが、これはなぜであろうか。一方は子宮や、また彼らが満たそうと欲望する場所を多く持っていて、精液がそれらに分かれるが、他方はその反対となっているからであろうか。

アリストテレス(『動物発生論』B 8. 747 a 29)

というのも、驃馬の孔〔生殖管〕は、その始まりが同種のものからでなかったため、子宮の中で破壊されてしまったとデモクリトスはいふからである。〔本章A 149 に既出〕

152

アイリアノス(『動物誌』XII 17)

胎児の流産は北よりも南の方が多いとデモクリトスは語っているが、ありそうなことである。なぜなら、南風によって妊婦の体は弛み、間延びするからである。すると「被い」が拡がり、しっかりと縛り留めなくなるので、身ごもった胎児もまた動くようになり、熱くなって滑り、流産しやすくなるのである。だが霜が降りて北風が吹くようになれば、胎児は固まり、動きにくくなって、波に洗われるように揺さぶられることもなくなる。そして波に洗われることなく、凧のような状態になるので、しっかりとし、ぴんと張って、自然による誕生の時まで持ちこたえるのである。かくして「寒さにおいては〔胎内に〕よく留まるが、暑さの中ではしばしば吐き出される」とアブデラの人〔デモクリトス〕はいふ。熱が過剰になると、血管にしる、関節にしる、間延びするのは避けがたいというのである。

153

アイリアノス(『動物誌』XII 18)

またこの同じ人〔デモクリトス〕は、鹿に角が生え出る原因は次のようものであると語っている。鹿の腹部が極めて熱いものであることを指摘すると共に、身体全体に生まれつき具わった彼らの血管は極めて繊細であり、また脳を被う骨も極めて薄く、皮膜状で繊細であるが、そこから出て頭の頂頭部まで上がっている血管は極めて太いと彼はいう。いずれにせよ、栄養が、あるいは少なくとも栄養の中でも最も肥沃なものが、極めて迅速に〔頭部に〕供給されるのであり、そして「脂肪がそれを外から包んでいる」(と彼はいう)が、栄養の強力なのが血管を通して頭に噴き上げてくる。その結果、多量の水分が供給されて、角が生え出てくるのである。そしてその流れが連続しているため、以前のものを押し出す。そのようにして体の外に出た水分は硬くなり、空気がそれを凝結さ

せて角とするが、依然として中に閉じ込められているものは柔らかい。一方は外の冷たさによって固められるが、他方は内部の熱によって柔らかいままでありつづけているのである。かくして、新しい角の成長が古いそれを異質なものであるかのように押し出す。内部のが圧迫し、古いのを押し上げようとして苦しみ、脈動しているのもあって、それはあたかも生み出されて世に出ることを急いでいるかのようである。というのも、実際水分は、凝縮され、下から湧き上がってくるので、穏やかな状態にあることの不能なものとなっているからである。そしてそれ自身もまた硬くなって、以前のに向かって押し出される。大部分は〔このように〕内部の力によって押し出されるのであるが、あるものは枝に絡みつかれたり、動物が勢いに駆られてすばやく走るのに邪魔になったりして、早々と折ってしまう。このようにして一方は滑り落ち、他方では今にも出てこようとしていたものを自然が導き出すのである。

154

アイリアノス(『動物誌』XII 19)

デモクリトスは語っている。去勢された牛は細くて長い曲がった角を生やすが、去勢されていないのは根元の部分が太く、まっすぐで、長さがあまり伸びない。また去勢されていないのは他のものに比べて額がはるかに広いが、それはその部分に血管が多くあって、それらによって骨が押し広げられるからであるという。生え出てくる角が太いと、それは動物のその同じ部分をそれだけ広くするのである。それに対して去勢されたものは角の根元の周辺が小さいので、それだけ広がりも小さいと彼はいう。

155

アイリアノス(『動物誌』XII 20)

他方、角のない牡牛は前頭部が「蜂の巣状」(デモクリトスはこのようないい方をしている。その呼び方で彼がいわんとしているのは、スポンジ状で孔が多いということである)になっておらず、骨の全体が堅くて体液の流入を受け入れないので、むき出しで防御の手段を欠いた状態となっている。またこの骨にそった血管も、他と比べて栄養状態が良くなく、その分、細くて弱い。必然的に角のない牛の首は相対的に乾いている。なぜなら、その部分の血管もまた細いからであり、そのことによって強さもまた劣るのである。しかしアラブ産の牛は、その性が牝であっても、角が立派に生えているが、彼女たちの場合は「体液の大量の流れ」(と彼はいう)が、角が立派に生長する栄養となっているのである。だがアラブ牛であっても、水分を受け取る骨が硬くて体液の受容が極めて劣るものは、角がない。これを要約していえば、体液の流れが角にとって成長の原因なのである。そして、最も多くの、また最も太く、中に容れることができる限りの水分を懐に抱く血管が流れを引き入れるのである。

155 a

アイリアノス(『動物誌』IX 64)

魚は塩水によって養われているのではなく、海の中に含まれている甘い水〔真水〕によって養われていると… デモクリトスはいう。

テオプラストス(断片171, 12 W.)

そのことは、乾いた土の中にいるものと掘って漁られるものの両種類〔の魚〕¹についても考えることができるであろう。果たしてそれらは水の中に放たれるなら、〔そのままそこで〕生きるだろうか、それとも固有の場所を探すだろうか。ちょうど海の中にいるものや川の中にいるものにとってもそうであるごとく、そのことがそれらにとって自然であるかのように。なぜなら、少数の例外を除けば、それらもまた〔環境〕変化を受け容れないからである。とにかくも干上がったために下に潜り込むものや氷に取り囲まれているものも、少なくともそれらにとっても水分が固有のものであることは明らかである。掘って漁られるものやその他のものにとってはなお一層そうであって、あるものにとっては無条件に、あるものにとっては、デモクリトスのいうように、両棲であるという意味で、そうである。このことは他の場合にも当てはまる。というのも、先にも述べたように、あるものは空気を必要とするからである。

(1) 黒海沿岸のパプラゴニアなどに生息するといわれる土中に棲む魚。

156

逸名著作家の古注(ホメロス『イリアス』XI 554 への古注)

〔ライオンは〕多量の熱を有するので、火を恐れる。それゆえ眠っているときもそれは眼を閉じないのであり、デモクリトスのいうところによれば、生まれてくるときもそうである。

アイリアノス(『動物誌』V 39)

動物のうち、ライオンだけが眼を開けたまま生まれてくる。すでにある意味でそれは怒っており、誕生時からある種気高いところを見せているのである。

157

『語源辞典』(Etymologicum Genuinum:「梟」の項)

なぜなら梟は…最も視力が鋭く、夜間も見ることができる動物だからである。鉤型の爪をした肉食の鳥の中で、それだけが盲目でない雛を生むが、それはその眼の周囲に多量の火や熱を有するからであるとデモクリトスは語っている。それは極めて鋭く、切り分ける力に勝れているので、視覚を分離したり混合したりすることができるのである。それゆえ「月のない夜も」視力の火によって見ることもできるのである。

158

キケロ(『ト占について』II 26, 57)

デモクリトスは実際、なぜ雄鶏は夜明け前に鳴くのかの理由を最上の表現で説明している。すなわち〔その頃には〕食物が胸部から押し出されて身体全体に分散され、消化されてしまっているので、静かな満ち足りた状態になり、鳴き声を発するのである。

159

ソラノス(『婦人科学』III 17 p.105, 1 Ilberg)

「炎症」〔プレグモネ〕は「燃やす」〔プレゲイン〕という語からそうに呼ばれているのであ

て、デモクリトスが述べたように粘液〔プレグマ〕が原因であることからではない。

160

キケロ(『トゥスクルム荘対談集』I 34, 82)

すなわち、魂も身体と同じように滅びるとしてみよう。そうすると、果たして何らかの痛みとか、あるいは一般に感覚が死後も身体の中にあるだろうか。そのようなことをいう者は誰もいまい。デモクリトスを〔そのようなことをいったとして〕エピクロスは告発しているが、デモクリトスの徒はそれを否定している。

テルトゥリアヌス(『魂について』51)

しかしプラトンは…『国家』〔X 614 ff.〕において、埋葬されなかった人の屍体は、魂が離れて行かないために少しも傷むことなく長時間保たれると唱えている。このことに関してはデモクリトスもまたかなりの時間にわたって墓の中で爪や頭髮が伸びることを指摘している。

ケルスス(『医術について』II 6)

いやそればかりか、正当に偉大と呼ばれるべき人物であるデモクリトスもまた、人生が限られているということの、医者目からして信ずるに足るような確かな証拠といったものは決して存在しないと主張した。ましてや、死の訪れを示す何らかの確かなしるしがあるとといったことを認める余地などまったくなかったのである。

161

ウァロ(『諷刺詩集』より「キュクヌス、埋葬について」断片81 Buecheler)

そのゆえに、火葬にするよう指示したポントスのヘラクレイデス¹は、蜂蜜水の中で保存するよう指示したデモクリトスよりはるかに賢明である。もし一般に彼〔デモクリトス〕にしたがうようなことになるなら、100デナリウスで蜂蜜酒の鉢を買うことができるのであれば、わたしは死を厭わないであろう。

(1) ポントスのヘラクレイデスについては、タレスの章A1の注14参照。

162

テオプラストス(『植物の諸原理について』II 11,7 ff.)

デモクリトスは、曲がった木よりまっすぐな木の方が短命で芽生えが早いのも同じ必然的原因によることであると説明しているが(すなわち、一方まっすぐな木においては若芽や果実のもとになる栄養が速やかに送り渡されるが、他方の曲がった木においては土より上の部分が「流れがよくない」ために緩慢であり、根そのものが栄養を使ってしまうと彼はいう。というのも、曲がった木は根が長く、かつ太いからであると)、正しく語っているようには思えない。まっすぐな木の場合には根が弱く、〔まっすぐであることと弱いことの〕両方のことから裂けて、〈木に〉腐りが〈生じる〉と彼はいうのである。なぜなら、まっすぐに進むために冷氣も熱気も上から根元へと迅速に通過し、弱いために根がそれに耐えられないからである。一般に、そういったものの多くは根の弱さのために下から老化し始めるといふ。さらにまた、土より上の部分が弱いために風によって曲がり、根を動かす。こういったことが起こると根が引きちぎられたり損なわれたりして、そのことから木

全体に腐りが生じるのである。彼のいうところはこのようなことである。

〔参照〕 テオプラストス(『植物の諸原理について』 I 8, 2)

〔植物の成長の速さは〕デモクリトスのいうように、孔〔管〕がまっすぐであることに基づいて理解されるべきであるか。すなわち〔そのような場合には〕、彼がいうには、運動は「流れがよく」、妨げられないのである。

163

テオプラストス(『植物の諸原理について』 VI 17, 11)

しかし、以前にもいったことであるが、あのことは奇妙である。すなわちそれは、われわれには悪臭であったり無臭であったりするものが彼ら〔動物〕にはよい香りになるということであるが、おそらくそれは不条理ではないのであろう。そういったことが他の場合でもあることをわれわれは見るのであって、例えば他ならぬ栄養においてそうである。とりわけ人は、混合が少なくとも一様でないということを、その理由として挙げるであろう。だがしかし、少なくともデモクリトスの形〔原子〕は、先にも述べたように、秩序整然とした形態を有し、またその様態も秩序整然としていとされねばならなかったのだから、〔理由として挙げることはできない〕。

164

アルベルトゥス・マグヌス(『石について』 I 1, 4 [II 213 b Jammy])

しかしデモクリトスや他のある人たちはまた、元素も魂を有し、それが石の生成の原因であると語っている。それゆえに石の中には魂があるのであって、それはちょうど他の何であれ生み出されるものの種子の中にそれがあると同じであり、それが、鍛冶屋が斧や鋸を作るのに槌を振うのと同じように、石の生成においても質料の内部で熱を動かすのだと彼はいうのである。

165

アレクサンドロス(『問題集』 II 23 [II 72, 28 Bruns])

〔ヘラクレイアの石〔磁石〕について。なぜヘラクレイアの石は鉄を引き寄せせるのか。〕デモクリトス自身もまた、流出ということが起こり、同じものが同じものに向かって運ばれるとするが、しかしすべては空虚へと運ばれるとする。こう仮定した上で、彼は次のように考える。石も鉄も同じような原子からなるが、石はより微細な原子からなっており、鉄に比べてより稀薄で多くの空虚を含んでいる。それがために〈その原子は〉より運動しやすく、より速やかに鉄に向かって運ばれる(というのも、移動は同じものに向かってなされるのだからである)。そして鉄の孔に入り込み、その微細さによって鉄の中の諸物体〔諸原子〕を通り抜けつつ、それらを動かすのである。他方、動かされた〔鉄の〕諸物体〔諸原子〕は外へ流出し、それらの同質性と〔石が〕より多くの空虚を含むことのゆえに石に向かって運ばれる。それらに鉄はついて行くのであり(それはまとまって切り離され移動するためである)、自身も石に向かって運ばれるのである。しかし石は鉄に向かって運ばれるということがないが、それは、石が含むほどの空虚を鉄は含んでいないからである。さてしかし、石と鉄が同じような原子からできているということは受け入れることができるにしても、琥珀も靱殻もそうだとすることをどうして受け入れることができるだろうか。それらについてもその同じ理由を語る人はいるかも知れないが、その場合でも、琥珀によって引き寄せられるものは多数存在するのである。それらすべての場合に同じような原子からできているとするなら、それらも

また、互いに同じような原子からなるのであるから、互いに引き合うことになる。

アレクサンドロス(シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』1056, 1 より)

あるいは、ある人が語っているように、静止していて、そのような状態にありながら引き寄せるものから何か物體的な流出物が出ていて、それらが触れ合い絡み合うために引き寄せられるものが引き寄せられるのであるか ……。

166

エピパニオス(『異端派論駁』III 2, 9 [Dox. 590])

ダマシッポスの子、アブデラのデモクリトスは、宇宙は無限であり、空虚によって動かされているといった。また彼は、万物の目的はひとつであって、「明朗快活」が最高善であるという。苦しみが悪の基準である。正しいと思われるものは〔実際には〕正しくなく、自然に反するものが不正である。なぜなら法は悪しき人工物だからであって、「知者は法に服従すべきでなく、自由に生きるべきである」と彼は語っている。

167

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 7, 3i [ディデュモス・アレイオスより])

デモクリトスとプラトンは共通して魂の内に幸福を置いている。デモクリトスは次のように書いている。「幸・不幸は魂に属すること。」「幸福は家畜や黄金の内に住まない。魂がダイモーンの住まうところ。」〈幸福を〉彼は「明朗快活」「仕合せ」「調和」「均斉」「平静」などと呼ぶ。幸福は快楽を区別し分離することからなり、それがまた人間にとって最も美しく、最も有益なことであるという。

168

ストラボン(『地理書』I p.61)

何事にも驚かぬ心を広汎にわれわれに備えさせようとして、彼らはまた移住による変化についても付言しているが、デモクリトスをはじめとして、すべての哲学者がそういった心を称えている。

169

キケロ(『最高善と最高悪について』V 8, 23)

ところでデモクリトスの平静心は、それはいわば魂の平穏さであり、彼はそれを「明朗快活」と呼んでいるが、それはここでの議論からは切り離して理解されるべきものであった。なぜなら、かかる魂の平穏さこそまさに至福の生そのものだからである。

キケロ(『最高善と最高悪について』V 29, 87)

デモクリトスは(その真偽を詮索する積もりはないが)自ら視力を奪ったといわれている。たしかに彼は、魂が思惟から引き離されるのを最小限にするために父祖伝来の財産をないがしろにし、また田畑を耕すことなく放置したわけであるが、彼が求めたものは至福の生以外の何であろうか。またどれほど事物の認識の内にそれ〔至福の生〕を置いたにせよ、そういった自然の探究から魂がよくなるといったことが結果することを彼は欲していたのである。それゆえ彼は最高善を「明朗快活」とか、またしばしば「平然」と呼んだが、それは魂が恐れから自由になっていることである。

(88) しかしこれは立派な考えではあるが、まだ彫琢されたものではない。なぜなら徳について語られているところはわずかであって、それゆえその説そのものは決して判然としていないからである。

170

クレメンス(『雑録集』II 138)

デモクリトスは結婚も子供を儲けることも避けたが、それはそういったことから必要事が増えて、多くの不快や煩いが生じるためである。エピクロスも彼にならった。

B 著者断片

トラシュロスの四部作集における真正著作

I - II. 倫理学関係

O a [トラシュロス I 1]

『ピュタゴラス』

O b [I 2]

『知者のあり方について』

O c [I 3]

『ハデス〔冥界〕にいる者たちについて』〈第1巻、第2巻……?〉

アテナイオス(『食卓の賢人たち』IV 168 B)

アブデラの民衆が父祖の財産を蕩尽したとしてデモクリトスを告発したとき、デモクリトスは彼らの前で『大宇宙』と『ハデス〔冥界〕にいる者たちについて』を朗読し、これらのために使ったと訴えて、放免された。

1

プロクロス(『プラトン「国家」注解』II 113, 6 Kroll)

死んだと思われていたが、その後生き返った人に関する報告を、昔の多くの人もそうしているが、自然学者デモクリトスが『ハデス〔冥界〕について』という著作において集めている。かの驚くべき人物コロテス¹もまた(彼はプラトンの敵対者であった)、徹底的なエピクロス主義者だったのだから、エピクロスの〈教説〉の先駆者〔デモクリトス〕〈の学説〉に無知であるべきでなかったし、またそれを知らぬまま、どうして死んだ者が再び生き返ることが可能なのか探究するといったことはすべきでなかったのである。けだし、その場合の死は生命全体の身体からの消失ではなく、恐らく何らかの打撃とか負傷による気絶だったのであり、髄周辺の魂の絆はなお依然として根を下ろしていて、心臓はその深みに包まれた生命の火種を〔なお〕保持していたのである。そしてそれらが残っていたために、蘇生に適った状態になったとき、消失していた生命を再び取り戻したのである。

(1) エピクロス派の唯物論哲学者コロテスについては、エンペドクレスの章B 1 0の注1参照。

1 a

ピロデモス(『死について』 29, 27 Mekler)

さらにまた腐敗ということでも、デモクリトスによれば、その臭いや醜悪さの〈イメージ〉によって、ためらいが持たれる。というのも、豊かな肉付きと美を具えた死者の影〔イメージ〕がそのような状態へと追いやられるからである。

ピロデモス(『死について』 30, 1 Mekler)

また人々は〔遺体を墓場へと〕送り届けるが、それは、ミロン¹のような肉付きのよい人も含めて、すべての人がわずかな内に骸骨となり、遂には元の自然へと解体されるからである。先にいったのと同様のことは、明らかに肌の色についても、また一般に姿について、理解されねばならない。したがって、高価な注目されるような墓ではなく、簡素でどこでも見られるような墓を思って苦しむといったことは、極めて空しいことなのである。

(1) オリュンピア競技で6度も優勝したことがあるといわれるクロトンの競技者。体格、勇気共に傑出した人物だったそうで、シュバリス人との戦争において指揮官として活躍した。ピュタゴラスの章1 4参照。

ピロデモス(『死について』 39, 9 Mekler)

次に、その〔死の〕考察が生々しいものになると、パラドクシカルな思いが彼らの心に浮かんでくる。そのような理由から、死に捉えられた者は遺言を書く気力すら失って、デモクリトスの言によれば「二倍の食事を詰め込まずにおれなくなる」のである。

1 b [I 4]

『トリトゲネイア¹』

(1) この書の書名については、本章A 3 3の注1参照。

2

オリオン(『語源辞典』 p.153, 5)

デモクリトスにおいては「トリトゲネイア」たるアテナ女神は「思慮(プロネーシス)」と見なされている。「思慮することから次の三つのことが生まれる」という。正しく思量し、誤ることなく語り、然るべきことを行なうことである。

逸名著作家の古注(Schol. Genev. I 111 Nic.)

デモクリトスはこの語〔「トリトゲネイア」という語〕の語源を探って、思慮から次の三つのことが結果するからであるといっている。「正しく推理すること、正しく語ること、そして然るべきことを行うこと」である。

2 a [II 1]

『男らしさについて』あるいは『徳について』

2 b [II 2]

『アマルテアの角¹』

(1) 本章A 3 3の注2参照。

2 c [II 3]

『明朗快活さについて』あるいは『仕合せ』

3

プルタルコス(『爽快な気分について』2 p.465 C)

そこで、「明朗快活な気分でいたいと思う者は、公私いずれにおいても多くのことをしてはならない」という人は、まず第一に明朗快活をわれわれにとって高価なものとしていることになる。なぜならそれは無為でもって購われねばならないものとされているのだから …。

ストバイオス(『精華集』IV 39, 25)

「明朗快活な気分でいたいと思う者は、公私いずれにおいても多くのことをしてはならない。何をするにしても、自らの能力と本性を越えて求めるべきでない。むしろ、幸運が舞い込み、その見かけによってより多くものへと誘われるときでも、それを押し止め、自分の能力に適ったもの以上のものに手を出さぬよう用心すべきである。なぜなら適度は過度より安全だから。」

4

クレメンス(『雑録集』II 130)

しかしアブデラの人たちもまた〔人生に〕目的があることを教えている。デモクリトスは『目的について』において「明朗快活」がそれであるとし、それをまた「仕合せ」とも呼んだ。そしてしばしば次のように付言している。「なぜなら愉快と不愉快が〈有益なものと無益なものを分ける〉境界だから」であり、〈若い人々の人生にとっても〉盛りにある人々の〈それにとっても、この目的がその前に掲げられているのである。〉ヘカタイオス¹は自足を挙げ、キュジコスのアポドロトス〔アポドロス〕²は感動を挙げているが、それはナウシパネス³が沈着を挙げているのと同様である。これはデモクリトスによって「平然」といわれていたものであると、彼〔ナウシパネス〕はいつている。

(1) アブデラのヘカタイオスであって、ミレトスのヘカタイオスではない。アブデラのヘカタイオスは前4世紀の歴史家で、プトレマイオス一世治下のエジプトに住み、エジプト人の見地から見た歴史書『エジプト誌』を著した。また理想的な国制による一種のユートピア論ともいべき『ヒュペルボレイオイ人について』を残した。

(2) キュジコスのアポドロスについては、本章A 1の注10参照。

(3) デモクリトス流の原子論者で、エピクロスの師。レウキッポスの章A 2の注2参照。

4 a [II 4]

『倫理学覚書』〈第1巻、第2巻 … ?〉

III - IV. 自然科学関係

4 b [III 1]

〈レウキッポスの〉『大宇宙』

[ヘラクラネウム・パピュロス] (Coll.alt.VIII 58-62 断片1 [Grönert, *Kolotes und Menedemos*, S. 147])

〈…〉同じことがそれ以前に『大〈宇宙〉』(これは〈レウキッポスの〉ものであるといわれている)の〈中で述べられていた〉と彼は記している。そして〈他人のものを〉我物にして『大〈宇宙〉』にあったであろうことを『〈小〉宇宙』の内に転載したと〈非難された〉だけでなく …。

4 c [III 2]

『小宇宙』

5

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』IX 41)

ところで年代に関しては、彼〔デモクリトス〕自身が『小宇宙』において語っているところによると、アナクサゴラスが老人であったときに彼はまだ若く、アナクサゴラスより40歳年少であった。そしてこの『小宇宙』はイリオン〔トロイア〕の陥落から730年後に纏められたものであると彼自身が語っている。

ディオゲネス・ラエルティオス (『ギリシア哲学者列伝』IX 34-35)

だがパボリノスは『歴史研究雑録集』の中で、アナクサゴラスについてデモクリトスは次のように語ったと述べている。すなわち、太陽や月についてのアナクサゴラスの見解はアナクサゴラス自身のもではなく、古くからあったもので、剽窃したものだというのである。(35)また彼は、アナクサゴラスが彼を受け入れなかったので、アナクサゴラスに対して恨みの気持を抱き、アナクサゴラスの宇宙体系とヌース〔知性〕に関する教説をさんざんにこき下ろしたとのことである。

[『小宇宙』の内容(宇宙論、動物発生論、人間の文化史)は、アブデラのヘカタイオスによるデモクリトス学説の改作(ディオゲネス・ラエルティオスとディオドロス『世界史』Iに見られる)とエピクロスによる改作(ルクレティウス『事物の本性について』Vとオイノアンダのディオゲネス fr. 10 W.に見られる)、それにカトラレス(『ヘルミッポス』)とツェツェス(『ヘシオドス注解』)が利用している著作家から推測される。デモクリトスの学説はエンペドクレスとプロタゴラスの仕事をさらに一歩進めたものである。最重要テキストは次の三点である。]

1. ディオドロス(『世界史』I 7, 1 ff.)

万有の最初の形成時には天と大地はひとつの姿をしていて、それらの本性は混ざり合っていた。その後諸物体は互いに分離し、宇宙は自らの内に現在見られるような組織のすべてを獲得したので

ある。空気は連続した運動を得て、その火的な部分が天空の最も高いところに集まった。そういった本性のものは軽さのために上方へと運ばれるからである。そしてそのために、太陽や、その他多くの星が渦全体の中に閉じ込められたのである。他方の泥のような濁った部分は、水分と結びついて、重さのために同じところに落ち着いた。(2) そしてこれがそれ自身の中で連続的に回転して圧縮され、その湿った部分から海が、より固い部分から泥状の柔らかい土〔大地〕が形成されたのである。(3) 大地は、最初、太陽周辺の火に照らされて固まり、次に熱によって表面が醗酵させられて、湿った部分が多くのところの一斉に膨れ上がった。そしてそれらの周辺に薄い被膜に包まれた腐敗が生じたのである。これは沼地とか澱んだ場所で今も見られるものであるが、土地が冷却化される一方、大気が少しずつ変化するのではなく、急激に熱くなるようなときに生じる。(4) さて湿った部分が熱によって上記のような仕方では生気づけられると、夜間に周囲を取り巻くもの〔大気〕から降りてくる霧から栄養を摂取し、昼間熱暑によって固められた。そして最後に生まれたものが完全な生長を遂げたとき、「被膜」が強く熱せられて剥ぎ取られ、さまざまなタイプの生き物が生み出されたのである。(5) これらのうち、熱を最も多く分け持ったものは翼を持つものとなってより高いところへ赴き、土の合成物から離れられなかったものは爬虫類とか、その他地上に棲息するものの系列に入れられ、水分の本性を最も多く分取したものは「同類の」場所へ集まって水棲動物と名づけられた。そして大地は太陽周辺の火と風によってますます固くなり、最後にはもはや大きい動物のどのようなものも生むことができなくなり、生き物はそれぞれ互いの交配から生まれるようになったのである。

8 (1) 宇宙全体の最初の生成についてわれわれが受け取った教えは以上のようなものであるが、他方、人間でも初期に生まれたものは無秩序な野獣のような生活の中に置かれていて、草原へばらばらに出て行っては、植物の最も柔らかいものとか樹木の自生の果実を採取していたという。(2) そして野獣に攻撃されたときには互いに助けに駆けつけるようになったが、そうすることが利益であることを学んだのである。また恐れから集団を作るようになり、少しずつ互いの性格を知るようになった。(3) また音声も〔当初は〕不分明ではっきりしないものであったが、少しずつ言葉を分節化し、かつ対象の各々について互いの間で印を定めることによって、あらゆるものについて表現を彼らの間で互いに理解できるものにした。(4) そして、このような集団が人の居住する地域全域にわたって生まれてきたが、すべての人間が同じ言語を持っているわけではなかった。それぞれが偶然的な仕方では話し言葉を作ったのだからである。それゆえさまざまな性格の言語が存在するのであり、最初に生まれた集団がすべての部族の起源となったのである。(5) ところで、最初の人間たちは生活にとって有用なものを何ひとつとして見出していなかったため、苦勞の多い生活を送っていた。装いは裸のまま、家に住む習慣も火を使う習慣もなく、食物を栽培することなどまったく思いも及ばなかった。(6) というのも、彼らは野生の食料を収穫することにすら無知であったため、欠乏するときのために果実を貯えるといったことはまったくしなかったからである。それゆえ冬場には、寒さと食料の不足のために、彼らの多くが命を落としたのである。(7) しかしこういったことから少しずつ経験に学んで、冬場には洞窟に避難し、また果実の中でも保存可能なものは貯えるようになった。そして火や、その他有用なものが知られるようになってからは、種々の技術や、その他、共同生活に役立つものが少しずつ見出されて行ったのである。というのも、一般にすべてについて人間の教師となるものは必要性だからであり、それは資質に恵まれた動物に対してそれぞれの学習をふさわしい仕方では教示するのであり、またあらゆることに対する協力者として〔人間は〕手と言葉と魂の俊敏さを持っているのである。

[前掲の宇宙論はアブデラのヘカタイオスの『エジプト史』(第73章 B 6-13a)を典拠とするものであるが(ヘカタイオスのそれはデモクリトスの『小宇宙』をもとにしている)、これと部分的に一致しているのが次の対話篇『ヘルミッポス』である。この対話篇は今日ではヨハネス・カトラレス(14世紀)に帰されている。カトラレスの宇宙論は全体としてはキリスト教のそれに準拠しているが、第5章以下では明らかにデモクリトス学説に移行している。]

2. ヘルミッポス(『天文学について』II 1, 4 ff. p.33, 15 Kroll-V.) [ヨハネス・カトラレスによる]

最初に〔創造主は〕宇宙を越えた諸力と宇宙内の諸力を造り出し、それからこのように天と地、惑星と恒星を造り出したのであるが、時間も他所からの素材も別段必要としなかった。そして、われわれが初めに仮定したように、それらの各々に固有の場所を配当した上で、ふさわしい運動を与えた。実にこのようにして、天と惑星は終わることのない運行を〔それぞれ〕逆方向に始めたのである。(5) 大地は水と混じり合っていたが、水によって一層崩れ落ちたところが深くなり、窪みが生じた。他方、水がまったくないか、わずかしかないところは山となって残った。(6) しかし、水が大地の上でふさわしい場所を占め、水浸しであった大地が太陽から光を投げかけられてより乾いたものに変えられ、少しずつふさわしい形態を取るようになると、実にそのようにしてまず最初に樹木と植物が、そして「泡に似た被膜のようなもの」が生まれ出た。そしてまさにそれが、昼には太陽によって熱せられ、夜には月や他の諸星によって温められて、ある時破裂し、動物を生み出したのである。(7) そのあるものは十分な熱を得て雄となり、より温かいものとなったが、反対に温の欠乏に甘んじたものは雌の姿を取った。(8) 動物と植物は最初、水と混ざり合った土から造物主の知性に則って形成されたというのは、何ら驚くべきことでないのである。なぜなら、水の中には氣息が含まれており、そしてその中に生命の熱が含まれているということがありうることは、大地の穴の中で発生する動物とか、また腐敗から発生する生き物が明瞭に示しているからである。それらはすべて、そのようにして出現したにもかかわらず、それ自身としては驚くべき組成を明確に示しているのである。(9) とはいってもしかし、なぜ今日においてもまたそのようにして出現することがないのかと問う人は恐らくないであろうと、わたしは思う。なぜなら、土はもはや同じようには水と混じり合っていないし、また星も同じ形態に集まってはいないからである。(10) けれど今日にいたってもどこかでそのようなことが起こっているということは道理の示すところであるが、そのことには触れないでおく。ただいっておかねばならないことは、大地はかのもの〔造物主〕からいわば序奏を受け取ったあとは、もはや大型の動物を生むことはできず、草や木や植物や果実を〔産するのみで〕、〔それらによって〕寒さでほとんど死なばかりに硬直した動物を熱と力で満たすということである。(11) さて、先にも述べたことであるが、諸々の生き物に関して、混合が同じようになされたわけではない。むしろ土の要素を最も多く分け持ったものは植物や樹木となり、下方の大地に向かって根をおろす頭を持った。それらが足のない無血動物と異なるのは、この後者のものは〔自ら〕動いて土の外に頭を運ぶというその限りにおいてである。また水分を多く分け持ったものは水の下という定めを喜んで受け入れたが、あのものたち〔足のない無血動物〕とほとんど等しいあり方をしている。(12) 土の要素と熱により一層係わるものは陸棲動物となるだろう。そして空気の元素と熱をより多く分け持つものは翼の生えたものとなるが、それらの混合の割合に応じて、体全体がまっすぐなものもあれば、体の上に頭を持つものもある。(13) そして人間は、その身体をなすところの質料がより純粋で〈より多く〉熱を受け入れうるものであるからして、あれらのものより多く熱を分け持つと思われる。したがって、まさにこのことのゆえに、他

の動物に比してひとり人間だけが直立の体形を取ったのであり、土にわずかしか触れないのである。そして何かあるより神的なものがその中に流入してきて、それがために人間は知性と理性と思考に与り、諸存在を探究することができるようになったのである。

[次のツェツェスの報告は、ヘカタイオスによって伝えられたデモクリトスの『小宇宙』の末端における流布形態を示すものである。]

3. ツェツェス(ヘシオドスへの注 [Gaisford, Poet. gr. min. III 58])

ギリシア人のうち、宇宙を生まれたものであると語っている人たちは、幽冥が引き裂かれ、空気ができ、泥状の柔らかい土が下に落ち着いたあと、それから腐敗した「泡のような被膜」が生み出されたという。それらが昼間は太陽によって熱せられ、夜は月からの湿気によって養われて、そして、そのようにして成長した上で破裂し、人間とかさまざまな種類の動物が、どの元素が優勢であるかに応じて、すなわち水が優勢であるか、火が優勢であるか、土が優勢であるか、空気が優勢であるかに応じて、生み出されるにいたったのである。また大地が太陽によって乾かされて、もはや生む能力を持たなくなったとき、出産は相互生殖によるものになったと彼らはいふ。大地が生き物を生むすべを知っているということを彼らは多くのことから証明しているが、とりわけエジプトのテーベにおけるナイルの増水が引いた後の鼠の〔異常〕発生から証明している。ところで、その当時の人々はひたすら素朴で無経験であって、いかなる技術も農業も知らず、またその他のことにもまったく無知で、病気が何であり、死が何であるかも認識せず、床の上に倒れるように大地の上に倒れて、その身に何が起こったのかも知らぬまま息を引き取っていたのである。彼らは相互に親愛の情を示すことを行なうのみで、野原に放たれた羊の群れのように群居生活を営み、共同して木の実や青物で栄養を摂っていた。そして野獣に出遭ったときには互いに呼び合い、裸のまま素手で一緒に戦った。だが彼らは裸のままこのように行き当たりばつたりの生き方をし、身を覆うものも道具もなく、また貯蔵のために果実や木の実を集めることも知らず、ただその日その日の食糧を摂るのみであったので、冬ともなれば多くの者が命を落とした。しかし最後には彼らは少しずつ必要を教師として、木の窪みや茂みや岩の割れ目、それに洞窟の中に身を隠すようになり、また果実の中で保存の利くものをなんとか識別するようになり、そしてひとたびそれらを集めるや、それらを洞窟に貯えて、それによって一年を通じて身を養うようになった。このような運命のもと彼らは単純で素朴な互いに親しみ合う生活を、火の知識もなく、共に生きていたのであって、王を戴くこともなければ、執政管を戴くことも主人を戴くこともなく、兵役もなければ苦役もなく、搾取もなかった。むしろ彼らが知っていることといえば、互いに親愛の情を示し合うことだけであり、自由で素朴な生活をしていたのである。だが先見の明が付き、将来のことをおもんばかることができるようになって火を見出すや、彼らはより熱いものも(つまりより邪悪なものもということであるが)希求するようになり、素朴で自由な生活を気晴らしと宿命に転換させたのである。世界は〔今や〕これらのものによって飾られており、われわれにとって快いもの、楽しいもの、そして極めて贅沢なものが生み出され、女のようにわれわれを魅了し、軟弱なものにしているが、このことを詩人〔ヘシオドス〕は「女の造形」と呼んでいる。

5 a [III 3]

『宇宙誌』

5 b [III 4]

『惑星について』

5 c [IV 1]

『自然について』(第1巻)、あるいは『宇宙の本性について』

5 d [IV 2]

『自然について』(第2巻)、あるいは『人間の本性について』ないしは『肉について』

5 e [IV 3]

〈レウキッポスの〉『ヌース〔知性〕について』

5 f [IV 4]

『感覚について』

5 g [V 1]

『味について』

5 h [V 2]

『色について』

5 i [V 3]

『(原子の)異なる恰好について』 〈あるいは『(原子の)イデア〔形〕について』〉

6

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 137)

『イデア〔形〕について』の中で彼〔デモクリトス〕は、「この規準によって、人は真実から隔てられていることを認識しなければならない」といっている。

7

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 137)

また、「実にこの論もまた、真実にはわれわれは何事についても何も知らず、ドクサ〔考え〕は各人への〔原子ないしは剥離像の〕流れ込みであることを明らかにしている」といっている。

8

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 137)

さらにまた、「しかしながら、各々のものが真実にはどのようなものであるか、認識するのは困難であることが明らかになる」といっている。

8 a [V 4]

『形態変換について』

『補強』

9

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 135)

また時にはデモクリトスは感覚に現れているものを否定し、それらのいずれも真実に現れているのではなく、思惑上そう見えているに過ぎないものであると語っている。そして諸存在において真にあるのは原子と空虚のみという。「甘さは慣わしによること、苦さは慣わしによること、温かさは慣わしによること、冷たさは慣わしによること、色は慣わしによること、本当は原子と空虚〔あるのみ〕」と彼はいう。(これはすなわち、感覚されるものも存在すると見なされ、かつそう考えられているが、実際にはそれらは存在せず、存在するのは原子と空虚のみということである。)

(136) 『補強』の中では彼は感覚に対しても確信の力を認めることを支持しているが、それにもかかわらず、〔別のところでは〕それを断罪しているのが見出されるのであって、次のようにいっている。「真実にはわれわれは確かなことを何ひとつとして知ってはいないのであって、身体の状態に応じて、また入ってくる諸原子とそれに対抗する諸原子の状態に応じて変化するものを知るに過ぎないのである。」

10

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 136)

また彼は次のようにいっている。「さて今や、各々のものが本当はどのようなであり、〈あるいは〉どのようなでないかをわれわれは知ってはいないことが、多くの仕方で明らかにされた。」

10 a [VI 2]

『剥離像〔エイドーラ〕について』あるいは『予見について』(?)

10 b [VI 3]

『ロギコンについて』あるいは『規準論』第1巻、第2巻、第3巻

〔参照〕エピクロス(ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』X 27より)

『基準について』あるいは『規準論』〔エピクロスの著作一覧より〕

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VIII 327)

哲学者の中のドグマティコイ〔独断論者〕は…論証を立てるが、エンペイリコイ〔経験論者〕はそれを廃棄する。おそらくデモクリトスもこういった論者〔すなわち後者のような論者〕であった。といのも、彼はその『規準論』によって強くそれ〔論証〕に異議を唱えているからである。

11

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 138)

『規準論』において彼〔デモクリトス〕は、認識は二つあるという。一方は感覚による認識、他方は思考による認識であるが、一方の思考による認識を彼は「真正な認識」と呼び、この認識には真理判定の信頼性を認める一方、他方の感覚による認識はこれを「闇の認識」と呼び、この認識に

対しては真理決定に対する信頼性を却下している。(139) 逐語的には彼は次のように語っている。「認識には二つの形、真正な認識と闇の認識がある。以下のすべては闇の認識に属する。視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚。他方は真正な認識であり、闇の認識から区分される。」そして彼は真正な認識を闇の認識の上位に置き、次のように付け加えている。「闇の認識がより小さなものに当面して、もはや見ることも聴くことも嗅ぐことも味わうことも触覚で知覚することもできなくなったとき、にもかかわらずより微細なものに向かって〈探究しなければならないとき、そのとき真正な認識がつづくのであって、というのもそれは、より微細なものであっても、それを見分ける器官を持っているからである。〉」

〔参照〕 ヒッポクラテス(『技術について』11)

なぜなら、肉眼の視覚を逃れたものは、思考の視覚で捉えられるからである。

11 a [VI 4]

『問題集』〈第1巻、第2巻 …〉

分類づけられない著作

11 b [分類づけられない著作1]

『天界の諸原因』

11 c [2]

『大気中の諸原因』

11 d [3]

『地上の諸原因』

11 e [4]

『火と火の中にあるものに関する諸原因』

11 f [5]

『音に関する諸原因』

11 g [6]

『種子と植物と果実に関する諸原因』

11 h [7]

『動物に関する諸原因』第1巻、第2巻、第3巻

11 i [8]

『諸原因雑纂』

11 k [9]

『石について』

VII-IX. 数学関係

11 l [VII 1]

『意見の相違について¹』あるいは『円と球の接触について』

(1) この書名については、本章A 3 3の注3参照。

11 m [VII 2]

『幾何学について』

11 n [VII 3]

『幾何学の諸問題』〈第1巻、第2巻(?)〉

11 o [VII 4]

『数』

11 p [VIII 1]

『通約不可能な線分と立体について』第1巻、第2巻

11 q [VIII 2]

『投影図』

11 r [VIII 3]

『大年』あるいは『天文学』、『パラペグマ〔天文学的暦、暦法〕¹』

(1) 「パラペグマ」というのは黄道に基づく太陽年の日付が通常の時候変化の兆に並べて記された青銅製ないしは大理石の板で、日付に並んで孔があげられていて、民間暦の月の日付が差し込めるようになっていた(ディールス/クランツ)。

ディオゲネス・ラエルティオス(『ギリシア哲学者列伝』V 43)

『デモクリトスの天文学について』第1巻。[テオプラストスの著作名]

12

ケンソリヌス(『生誕の日について』18, 8)

ピロラオスの大年も・・・デモクリトスのそれも82年からなっており、[カリッポスのそれと同様] その内に28の閏月を含む。

アポロニオス・デュスコロス(『代名詞について』 p.65, 15 Schneid.)

ペレキュデス¹は『神学(テオロギア)』において、またデモクリトスも『天文学』や彼が残した諸論考において、かなりの頻度でἐμεῦとか、またἐμέοといった形²を使用している。

- (1) シュロスのペレキュデス。ギリシア最古の神学的著作家。タレスの章A 1の注4 7参照。
- (2) いずれもイオニア方言の「わたしの」を意味する人称代名詞、一人称属格の形。アッティカ方言ではἐμοῦとなる。

『天文学』の中の『パラペグマ〔暦法〕』の残存部。

1. ウイトルウィウス(『建築について』 IX 6, 3)

他方自然の諸事象については、ミレトスのタレス、クラズメナイのアナクサゴラス、サモスのピュタゴラス、コロポンのクセノパネス、アブデラのデモクリトスが、それら諸事象は事物の本性によってどのように支配されているのか、またどのような結果をもたらすか、といったことについての巧みな理論を残した。そしてこれらの人々の諸発見につづいて、エウドクソス¹、エウクテモン²、カリッポス³、メトン⁴、ピリッポス⁵、ヒッパルコス⁶、アラトス⁷、その他の人々が星の〈出〉と入りや天候の兆候を「パラペグマ」〔暦法〕の教えに基づいて天文学から理解し、その説明を後につづく人々に残した。

(同書IX 5, 4)

天界において形づくられ形成された諸星の姿(これは自然と神的精神によってデザインされたものである)がどのようなものであるか、わたしは自然学者デモクリトスの考えにしたがって説明したわけであるが、しかしその出と入りにわれわれが気づき、また肉眼によって観察できるものについてだけであった。

- (1) クニドスのエウドクソス。クニドス出身の高名に数学者、天文学者、地理学者。前408－355年頃。タレスの章A 1の注2 1参照。
- (2) 天文学者。前432年にアテナイで後出のメトンと一緒に夏至を観察した。星の出と入りの日付とそれに関連する気候現象を一覧表にしたパラペグマ〔天文学的暦、暦法〕を作成した。後の現存する暦はそれを抜粋したものである。
- (3) 前4世紀の後半に活躍したキュジコス出身の天文学者。アテナイでアリストテレスと共に仕事した。26個の天球を組み合わせたエウドクソスの天体運動の説明を、さらに7個増やして33個とすることで、一層精巧なものにしたことで知られる。
- (4) アテナイの天文学者。前432年頃活躍。エウクテモンと共に夏至の観察を行なったことについては、前述の通り。また太陽の周期と月の周期の関係を研究し、19年周期の閏年を提唱した。
- (5) ロクリスのオプス出身の哲学者。前4世紀の人。プラトンの弟子で、プラトンの偽書『エピノミス』の著者といわれる。
- (6) 前2世紀の天文学者。ニカイアの人。パルメニデスの章A 48の注1参照。
- (7) キリキアのソロイ出身の天文学詩人。前315－240年頃。エウドクソス天文学を基に

して天界現象を歌った『天象譜(パイノメナ)』を著した。

2. 擬エウドクソス(『天文術』 coll. 22, 21 p.25 Blass)

エウドクソス、デモクリトスによれば、冬至はアテュル月¹の、ある時には20日、ある時には19日である。

(同書 coll. 23, 3)

秋分から冬至までは、エウドクソスによれば92日、デモクリトスによれば91日である。…冬至から春分までは、エウドクソスとデモクリトスによれば91日、エウクテモンによれば92日である。

(1) 現行暦の11月から12月にかけての月。

3. 擬ゲミノス(『天文学入門』 p.218, 14 Manit. [前2世紀頃の暦])

[天蠍宮] デモクリトスによれば、第4日目〔現行暦10月29日〕に「スバル星(プレイアデス)」が曙と共に沈む。大抵の場合、すでに冬の風や寒気が吹きつけ、霜が降りるのが常である。また大多数の樹木が葉を散らしはじめる。

(同書 p.220, 5)

デモクリトスによると、[天蠍宮の] 13日目〔現行暦11月7日〕に「琴座」が日の出と共に昇る。大気も概して荒れ模様となる。

(同書 p.222, 9)

[人馬宮] デモクリトスによると、16日目〔現行暦12月10日〕に「わし座」が太陽と共に昇る。そしてそれは多くの場合、雷や稲光、また雨とか風、あるいはその両方で時候変化の兆を知らず。

(同書 p.224, 5)

[摩羯座] デモクリトスによれば、〈大抵の場合〉12日目〔現行暦1月4日〕に南風が吹く。

(同書 p.224, 22)

[宝瓶宮] エウクテモンによると、3日目〔現行暦1月24日〕には雨となる。デモクリトスによれば「厄日」、嵐となる。

(同書 p.226, 4)

デモクリトスによると、[宝瓶宮の] 16日目〔現行暦2月6日〕に「西風」が吹き始め、その状態がつづく。冬至から43日目である。

(同書 p.226, 15)

[双魚宮] デモクリトスによれば、4日目〔現行暦2月24日〕から「ハルキュオニデス(ハルキュオンの日々)」と呼ばれる変りやすい日々となる。

(同書 p.226, 23)

デモクリトスによれば、14日目〔現行暦3月6日〕に「鳥風」と呼ばれる冷たい風がほぼ9日間吹く。

(同書 p.228, 23)

[白羊宮] デモクリトスによれば、日の出と共に「すばる星(プレイアデス)」は姿を隠し、40夜見られなくなる〔「白羊宮」の第13日目=現行暦4月4日〕。

(同書 p.232, 16)

[双子宮] デモクリトスによれば、10日目〔現行暦6月3日〕に雨となる。

(同書 p.232, 21)

デモクリトスによれば、29日目〔現行暦6月22日〕に「オリオン座」が昇り始め、そこに時候変化の兆を見せるのが常である。

4. プリニウス(『博物誌』 XVIII 231)

デモクリトスは、将来の冬は冬至とその前後三日間のようなものになろうし、夏もまた夏至の頃のようなものになると考えている。

(同書 XVIII 312)

さらに、稀なことであるが、ピリッポス、… デモクリトス、エウドクソスは、10月1日の4日前〔9月28日〕、早朝にカペラ星は現れ、3日前〔9月29日〕に子山羊星が現れるという点で一致している。

5. 逸名著作家の古注(ロドスのアポロニオス『アルゴナウティカ』 II 1098 への古注)

「ゼウスは北風の激しき息吹を起し、水でアルクトゥロス星¹の流れる道を指し示した」〔『アルゴナウティカ』 II 1098〕。彼がこういったのは、アルクトゥロス星の昇る頃、激しい雨が降るからであり、そのことはデモクリトスが『天文学について』の中でいっており、またアラトスも〔『天象譜(パイノメナ)』 745 で〕いっている。

(1) 大角星。牛飼座の主星で、それが昇るのは現行暦の9月中旬。

6. クロディオスの暦(リュディアのヨハネス『前兆について』 p.157, 18 Wachsm.より)

これらもまたクロディオス¹はエトルリア人の神聖文書から逐語的に得ているのであって、〔もつとも〕そうしたのは彼だけでなく、偉大なエウドクソスもそうであるし、デモクリトス(彼がそうした最初の人である)もそうだし、ローマ人のウァロもそうである …。

(1) 紀元前後に活躍した天文学者と思われるが、リュディアのヨハネスによって言及されている同名の暦が知られるのみ。

7. プトレマイオス(リュディアのヨハネス『前兆について』 p.275, 1 Wachsm.より)

そしてこれらの中からわたしは、エジプト人たちとドシテオス¹、… それにデモクリトスに基づいて、時候変化の兆を記録し、整理した。これらの人々のうち、エジプト人たちはわれわれのところで観察し、… デモクリトスはマケドニアとトラキアで観察した。実にこのことのゆえに、ほぼ平行線上の場所で観察されたエジプト人の兆と… デモクリトスの兆を適合させることができるのである。彼によると、日の中で最も重要なのは昼夜平分時期〔春分・秋分時〕の15日目である。

(同書 p.213, 19)

トートの月の第17日〔9月14日〕、アブデラのデモクリトスよると〈時候変化の兆が現れ〉、ツバメが姿を消す。

(同書 p.215, 18)

トートの月の第29日 [9月26日]、デモクリトスによると、雨が降り、風が荒れ狂う。

(同書 p.217, 12)

パオーピの月の第8日 [10月5日]、デモクリトスによると、嵐が襲う。種蒔きの時季。

(同書 p.220, 13)

アテュルの月の第2日 [10月29日]、デモクリトスによると、寒気あるいは霜。

(同書 p.223, 14)

アテュルの月の第17日 [11月13日]、デモクリトスによると、地上も海も嵐が吹く。

(同書 p.227, 5)

コイアクの月の第1日 [11月27日]、デモクリトスによると、多くの場合大気が不安定となり、海もまたそうなる。

(同書 p.229, 10)

コイアクの月の第9日 [12月5日]、デモクリトスによると、嵐となる。

(同書 p.230, 11)

コイアクの月の第14日 [12月10日]、デモクリトスによると、雷、稲光、雨、風。

(同書 p.233, 8)

テュービの月の第1日 [12月27日]、デモクリトスによると、大嵐がくる。

(同書 p.233, 15)

テュービの月の第3日 [12月29日]、デモクリトスによると、時候変化の兆が現れる。

(同書 p.234, 17)

テュービの月の第9日 [1月4日]、デモクリトスによると、多くの場合南風が吹く。

(同書 p.237, 17)

テュービの月の第25日 [1月20日]、デモクリトスによると、雨が降る。

(同書 p.238, 6)

テュービの月の第29日 [1月24日]、デモクリトスによると、嵐となる。

(同書 p.240, 12)

メキルの月の第12日 [2月6日]、デモクリトスによると、「西風」が吹き始める。

(同書 p.241, 6)

メキルの月の第14日 [2月8日]、デモクリトスによると、「西風」が吹く。

(同書 p.243, 5)

メキルの月の第30日 [2月24日]、デモクリトスによると、「ハルキュオン」と呼ばれる変わりやすい日々となる。

(同書 p.245, 1)

パメノートの月の第11日 [3月7日]、デモクリトスによると、冷たい風が吹く。これが「鳥風」で、9日間吹く。

(同書 p.246, 16)

パメノートの月の第22日 [3月18日]、デモクリトスによると、時候変化の兆が現れ、冷たい風が吹く。

(同書 p.247, 18)

パルムティの月の第1日 [3月27日]、デモクリトスによると、時候変化の兆が現れる。

(同書 p.252, 2)

パルムティの月の第29日 [4月24日]、デモクリトスによると、時候変化の兆が現れる。

(同書 p.258, 10)

パユニの月の第3日 [5月28日]、デモクリトスによると、雨模様となる。

(同書 p.259, 9)

パユニの月の第9日 [6月3日]、デモクリトスによると、雨がつつく。

(同書 p.262, 19)

パユニの月の第28日 [6月22日]、デモクリトスによると、時候変化の兆が現れる。

(同書 p.263, 18)

エピピの月の第4日 [6月28日]、デモクリトスによると、「西風」が吹き、明け方の雨となる。それから夏の先駆けとなる北風が7日間吹く。

(同書 p.267, 4)

エピピの月の第22日 [7月16日]、デモクリトスによると、暴風雨がくる。

(同書 p.268, 21)

メソリの月の第2日 [7月26日]、デモクリトス、ヒッパルコスによると、「南風」が吹き、酷暑となる。

(同書 p.271, 22)

メソリの月の第26日 [8月19日]、デモクリトスによると、雨と風による時候変化の兆が現れる。

- (1) エジプトのペルシウム(ナイルの東河口の町)の人。その盛年は前230年頃。天文学者コノンの弟子。彼はアレクサンドリアの天文学者たちとアルキメデスの間の関係を継続させた。アルキメデスはその著作の幾つかを彼に献呈している。恒星の出現の時と時候変化の兆に関する彼による観察がゲミウス、その他のパラペグマ〔暦法〕の中に記録されている。

8. リュディアのヨハネス(『暦月について』IV 16 ff. [暦] p.78, 15 Wunsch)

[1月15日] デモクリトスは雨の後、南西の風になるという。

(同書 p.79, 5)

[1月18日] デモクリトスは、「いるか座」が沈み、多くの場合、時候に変化が生じると語っている。

(同書 p.79, 16)

[1月23日] デモクリトスは「南西」の風が吹くという。

(同書 p.109, 3)

[3月17日] バッコス祭の日に「魚座」が沈むと、デモクリトスは語っている。

(同書 p.159, 16)

[9月2日] この日に風の向きが変わり、雨が優勢になると、デモクリトスは語っている。

(同書 p.163, 10)

[10月6日] デモクリトスは「仔山羊座」が昇り、北風が吹くと断言している。

(同書 p.169, 3)

[11月25日] デモクリトスは、太陽が「人馬宮」の〈中に〉あるようになると語っている。

14 a [VIII 4]

『アマラ・クレプシュドライ [水時計による競争] ¹』 (?)

- (1) どのような内容のものなのか、書名からは推測し難いので、デいいルス／クランツは疑問詞を付している。

14 b [IX 1]

『天界誌』

14 c [IX 2]

『地誌』

15

アガテメロス(『地理誌』 I 1-2)

次いで、(1)シゲイオンのダマステス¹が、大部分をヘカタイオス²の書物から書き写して、『周航記』を著した。そしてそれにつづいて、デモクリトスやエウドクソス、その他の人々が旅行記や周航記を書き上げたのである。(2) ところで昔の人々は人の住む世界を丸いものとして描き、その中心にギリシアを位置づけ、ギリシアの中心にデルポイを置いている。デルポイが大地の臍だからというのである。だが経験豊かな人物であったデモクリトスは、大地は長方形であり、長さが幅の一倍半であることを初めて見て取った。ペリパトス派のディカイアルコス³も彼に同意している。

- (1) 前5世紀のシゲイオン出身の地理学者、歴史家。
(2) ミレトスのヘカタイオス。前500年頃活躍したミレトス出身の歴史家、地理学者で、『世界周遊記(ペリエゲシス)』を著した。
(3) ペリパトス派のディカイアルコスについては、ピュタゴラスの章8 aの注1参照。

15 a

『天極図』

15 b

『光線論』

X-XI 音楽関係

15 c

『リズムと調和について』

16

マリウス・テオドルス(『韻律について』 VI 589, 20 Keil)

長短短格のヘクサメトロス〔六脚韻〕の韻律はオルペウスによって初めて見出されたとクリティアス¹は主張しているが、デモクリトスはムーサイオス²によってであるとする。

(1) プラトンの母方の伯父にあたるアテナイの政治家。三十人執政官政権の指導的人物。弁論家、ソピストとしても活躍した。前460年頃－前403年。

(2) ホメロス以前の伝説的詩人。オルペウスの弟子といわれ、エレウシスの呪術師であったともいわれる。

16 a

『詩作について』

17

キケロ(『弁論家について』II 46, 194)

というのも(このことはデモクリトスとプラトンによって書き物の中に書き留められた見解だといわれているが)、いかなる人も、魂の燃え上がり、いわば狂気のごときある種の靈感なくしては、よき詩人とはなりえないということをわたしはしばしば耳にしたからである。

キケロ(『ト占について』I 38, 80)

なぜなら、[ある種の]狂気なくしてはいかなる詩人も偉大とはなりえないとデモクリトスは主張しており、プラトンもそれと同じことを語っているからである。

ホラティウス(『詩論』295)

デモクリトスは、天賦の才能を哀れな技術より祝福されていると信じて、常識的な詩人をヘリコン山¹から締め出しているので …。

(1) ムーサ[ミューズ]たちの住む山。転じて詩神の殿堂。

18

クレメンス(『雑録集』VI 168)

デモクリトスも[プラトン『イオン』534 B と]同じように、「詩人が靈感と聖なる息吹を受けて記すものはまことに美しい … 」と知っている。

18 a [X 3]

『詩句の美しさについて』

18 b [X 4]

『響きのよい文字と悪い文字について』

19

エウスタティオス(『「イリアス」注解』p.370, 15 [III 1 への注])

イオニア人、特にデモクリトスは字母のガンマ[γ]を「ゲンマ」と呼ぶ。デモクリトスはまたミュー[μ]を「モー」と知っている。[ポティオスによる]

20

逸名著作家の古注(『トラキアのディオニシオスへの古注』 p.184, 3 ff. Hilg.)

字母の名称は語尾変化しない。…しかしデモクリトスのもとでは語尾変化している。すなわち彼は「デルタの(δέλτατος)」とか「テータの(θήτατος)」といったいい方をしているのである。

20 a

『ホメロスについて』あるいは『正しい表現法となまりについて』

21

ディオオン・クリュソストモス(『弁論集』 36, 1 [II 109, 21 Arnim])

デモクリトスはホメロスについて次のようにいっている。「ホメロスは神的な素質を引き当てていたがゆえに、ありとあらゆる種類の詩句の世界を創り上げることができたのである。」というのも、神めかつ靈的な素質なくしては、あのように美しく巧みな詩句を創り出すことは不可能だからである。

22

ポルピュリオス(『ホメロス「イリアス」についての諸問題』 I 274, 9 Schrad.)

[『イリアス』 XXI 252 に関して] 他の人々は詩人〔ホメロス〕が(μέλανος τοῦ [黒い(鷲)]) というべきところ)、Ὀρέστου [オレステスの] という表現のように、一言で μελανόστου [黒い骨の] といったとして、責めているが、デモクリトスが鷲についてその骨は黒いと伝えているために、彼らは事実を誤って非難しているのである。

逸名著作家の古注(ホメロス『イリアス』 VII 390 への古注(A))

「その前に彼〔パリス¹〕が死んでしまえばよかったのに」というのは、伝令はこれを他のトロイア人(彼らにとってもパリスは腹立たしいものであった)に寛容を示させるためにギリシア人たちにも聞こえるところで語っているのか、あるいはデモクリトスが主張しているように、あからさまにいうのは不体裁であると考えて、自分だけに静かにいっているのか、この双方の問いをさらに提出しなければならない。

- (1) トロイアの王子アレクサンドロス。彼によってスパルタ王メネラオスの妃ヘレナが拉致されたことから、トロイア戦争が起こった。

24

エウスタティオス(『「オデュッセイア」注解』 p.1784 [XV 376 への注])

この忠実な奴隷エウマイオス¹は、古人たちに「彼の母」なるものを考え出させるまでに議論に値する人物と見なされていたということを知るべきである。デモクリトスは「ペニア」、エウポリオン²はパンティア、シドンのピロクセノス³はダマエをその母としている。

- (1) オデュッセウスの忠実な豚飼。オデュッセウスは帰国したとき、まず最初に乞食の姿で彼の小屋を訪れ、自らの帰国を知らせた。そして彼の協力を得て宮殿に巣くう求婚者たちを退治した。

- (2) エウボイア島のカルキス出身の詩人、文法家。前3世紀の人。アテナイで学んだのち、シリアに赴き、アンティオコス3世(大王)によってアンティオケイアの図書館長に任ぜられた。
- (3) シドンのピロクセノスという人物については、ここに記されている以上のことは知られない。前5世紀のキュテラ島出身のディテュランボス詩人ピロクセノスとはおそらく別人。

25

エウスタティオス(『「オデュッセイア」注解』p.1713 [XII 62 への注])

他の人々は太陽をゼウスと考え、… 太陽がそれによって養われている蒸気をアンブロシア¹と見なしたが、デモクリトスもまたそのように考えている。

- (1) 神々の食べ物。その飲み物がネクタル。

25 a [XI 2]

『頌歌について』

25 b [XI 3]

『言葉について』

26

プロクロス(『プラトン「クラテュロス」注解』16 p.5, 25 Pasqu.)

ピュタゴラスとエピクロスはクラテュロス¹の考えに属し、デモクリトスとアリストテレスはヘルモゲネス²の考えに属すということを…³。

- (1) 前5世紀の後半に活躍したヘラクレイトス派の哲学者。ヘラクレイトスが「われわれは同じ川に二度入ることはできない」といったのに対し、彼は「一度も入ることはできない」と主張した。またヘラクレイトスが「何のものもあるとはいえず、ありかつない」といわねばならないとしたのに対し、彼はすべての言表可能性を否定し、どのような問いかけに対してもわずかに指一本傾げるだけであったといわれる。プラトンは若い時、このクラテュロスに師事し、ヘラクレイトス派の思想に親しんだ。
- (2) ソクラテス学徒のひとり。アテナイの裕福な家の出であったが、兄のカリアスが遺産のすべてを継承したため、彼自身は困窮していたといわれる。ソクラテスの死刑の場に居合わせ、その死を看取った弟子のひとり。
- (3) プラトンの『クラテュロス』篇において、クラテュロスは名称は事物の本質を表わすとする立場を代表し、ヘルモゲネスは名称は人間の勝手な取り決めに過ぎないとする立場を代表している。

プロクロス(『プラトン「クラテュロス」注解』16 p.6, 10 Pasqu.)

「名をつけるもの」といういい方で彼〔ピュタゴラス〕は魂を語ったが、その場合の魂はいずれも知性をその土台としている。そして事物そのものは知性のように第一義的に存在するのではなく、むしろ知性が諸存在の「彫像」のごときそれらの似像と広汎なる本質的ロゴスを保持しているのであり、それらはいわば知的形相、すなわち数を模倣する名称のごときものなのである。したがって

すべてのものにとって存在するという事は自らを認識する知者たる知性によることなのであり、また名をつけるということも知性を模倣する魂によることなのである。そこでピュタゴラスはいう。名をつけるということは誰にでもできることではなく、知性を見る者、諸存在の自然本性を見る者にして初めてなしうることであると。したがって〔ピュタゴラスにとっては〕名称は自然本性的なのである。他方デモクリトスは、名称は制定によるとして、四つの弁証的議論によってこれを証明した。同名意義による議論。異なる事物が同じ名称で呼ばれる。したがって名称は自然本性的でない。次に〔同一物が〕複数の名称を有することによる議論。異なる名称が同一の事物に適合するのであれば、名称相互も適合し合うことになるが、これは〔名称を自然本性的とする場合には〕不可能である。第三は名称の変更による議論。名称が自然本性的であるとするなら、どうしてわれわれはアリストクレスをプラトンという名に変えたり、テュルタモスをテオプラストスという名に変えたりできるのだろうか¹。類似名の欠如による議論。われわれは「思慮」から派生させて「思慮する」〔という動詞〕を語るのに、「正義」からはもはやそのような派生語を語ることがないのは何ゆえか。したがって名称は偶然によることであって、自然本性によることではないのである。デモクリトスは第一の議論を「多義」による議論、第二の議論を「同義」による議論、〈第三の議論を「変名」による議論、〉そして第四の議論を「欠名」による議論と呼んでいる。

- (1) アリストクレスはプラトンの、テュルタイモスはテオプラストスの本名。「プラトン」というのは額が広がったことからそう呼ばれたあだ名であり、また「テオプラストス」というのもその語り方に神的な響きがあったことからアリストテレスによってつけられた別称であるが、いずれも別称の方が通称となったわけである。

26 a [XI 4]

『語彙集』 [巻数欠如]

XII - XIII. 技術関係

26 b [XII 1]

『予後』

26 c [XII 2]

『食餌について』あるいは『食餌論』

〔参照〕ヒポクラテス(『食餌法について』冒頭部 [VI 466 L.])

もし健康のための人間の食餌法について著述した先人の誰かが、正しく認識した上であらゆることをあらゆる面にわたって著述しているとわたしに思われたのなら、… そういったものを利用するだけで … わたしには十分であったろう。… しかし実際には、多くの人がこれまで著述してきたが … 。

26 d [XII 3]

『医学的見解』

26 e [XII 4]

『時宜に適っていないものと適ったものに関する諸原因』

26 f [XIII 1]

『農業について』あるいは『農業論』

ウァロ(『農業について』I 1,8)

〔農業について〕著述したギリシア人は・・・哲学者についていえば、自然学者のデモクリトス、ソクラテス学徒のクセノポン、ペリパトス派のアリストテレスとテオプラストス、ピュタゴラス学徒のアルキュタスなど。

コルメラ(『農業について』I praef. 32)

その人が完全な農夫であることをわれわれが望む人の場合、もし彼が最高度の技術の持ち主となり、事物の一般的な本性においてデモクリトスとかピュタゴラスの眼識にしたがって、・・・していたならば、・・・進歩していたであろうということが、この点に付け加わる。

27

コルメラ(『農業について』III 12, 5)

気候風土の状態、どの方角にブドウの樹は向いているべきかということについては、古くから論争がある。・・・デモクリトスとマゴン¹は北の方角を推奨している。それはその方角に向けられたブドウの樹が最も多産となろう — 最も葡萄酒の品質の点では劣るが — と見積もったのである。

(1) カルタゴ出身の『農事記』28巻の著者。生涯、年代ともに不詳。

27 a

コルメラ(『農業について』IX 14,6)

ミツバチは小牛の死体から発生することがあるとデモクリトスとマゴン、それにウェルギリウス¹が報告している。

(1) ローマの国民的詩人。前70－19年。北イタリアのマントヴァ近郊に生まれる。アウグストゥス帝の時代に主にローマで皇帝とその側近たちの庇護を受けて活躍した。トロイアの英雄アエネアスを歌った大叙事詩『アエネイス』が代表作であるが、その他に『牧歌』『農耕詩』などの作品があった。

28

コルメラ(『農業について』XI 3, 2)

デモクリトスは『農業論』と題した書物の中で、農園に防護壁を築く人ははなはだ賢明でないと宣いつている。なぜなら、レンガで造られた塀は多くの場合雨や嵐で傷められて長く持ちこたえることができないし、また石によるそれは当該物の価値を越える支出を要するからである。しかしそれでも広大な境に垣を巡らせたいと思うのなら、父祖伝来の財産が必要であると。

28 a [XIII 2]

『絵画術について』

28 b [XIII 3]

『戦術論』

28 c [XIII 4]

『重装戦闘論』

不明著作からの真正断片

29

キティオンのアポロニオス(『ヒッポクラテス注解』 p.6, 29 Schöne)

この〔脱臼した関節の〕整復は極めて強い強制を含むものであるが、バツケイオス¹は『ヒッポクラテスの用語について』において、梃子の形をした木を支えにしたアンバーと呼ばれるものを次のように注釈している。「『用語集』に記載されているところによれば、ロドスの人々は山の尾根や、また一般に梯子のことをアンバーと呼んでいる。」この後のところでまた次のようにもいう。「またデモクリトスが盾の窪みで縁取られた眉をアンバーと呼んだとも記載されている。」

(1) 前3世紀の末に活躍した医師。ボイオティア地方のタナグラ出身。ヒッポクラテスの注釈家。

29 a

アポロニオス・デュスコロス(『代名詞について』 p.92, 20 Schn.)

イオニア人やアッティカの人々のところでは、ἡμεῖς [われわれは]、ὕμεῖς [あなたたちは]、σφεῖς [彼らは] といった複数の主格形が日常言語でも使われており、またイオニア人のもとでは主格の不可分な形〔すなわち約音されない形〕が使われているのが、デモクリトス、ペレキュデス、ヘカタイオス¹の言葉遣いから確認される。

(1) ミレトスのヘカタイオス。ミレトスのヘカタイオスについては、アナクシマンドロスの章 A 6 の注 1 参照。

30

クレメンス(『プロトレプティコス』 68、『雑録集』 V 103)

「われわれギリシア人が今日天空と呼んでいるところへと手を差し伸べて、ゼウスはすべてを斟酌したもう。彼はすべてを知り、すべてを与え、取り去る。彼こそは万物の王なり(といったのは) 学識ある人の中でもわずかな人であった。」

31

クレメンス(『教育者』I 6)

というのも、デモクリトスによれば、「医術は身体の病気を癒すが、知恵は魂を情念から解放する」からである。

32

クレメンス(『教育者』II 94)、ヒッポリュトス(『全異端派論駁』VIII 14)、ストバイオス(『精華集』III 6, 28)

「性交は小さな卒中である。なぜなら、人間が人間から跳び出してきて、ある種の打撃によって引き離され、分割されるのだから。¹⁾」

- (1) 難解な文章であり、諸家によってさまざまに解釈されている。いえることは、デモクリトスは性交をある種の病気のようなものと見なして、災いの一種と考えていたということである。この考えはエピクロスに継承された。

33

クレメンス(『雑録集』IV 151)、ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31, 65)

「自然と教育は似たところがある。なぜなら、教育もまた人間を変様させるが、変様させることで〔新たな〕本性を作り出すから。」

34

ダウイッド(『哲学序説』38, 14 Busse)

万有の中にわれわれはもっぱら支配するもの、例えば神的存在と、支配しもすればされもするもの、例えば人間存在(人間は神的存在からは支配されるが、非理性的な動物を支配する)と、非理性的動物のようにもっぱら支配されるものを見るが、ちょうどそれと同じようにデモクリトスのいう「小宇宙たる人間」の中にもそういったものが観察される。すなわち、理性のようにもっぱら支配するもの、気概のように支配しもすればされもするもの、欲望のごとくもっぱら支配されるものがそれである。

ガレノス(『身体部位の行使について』III 10 [III 241 K., I 177, 10 Helmr.])

しかし動物もまた「小宇宙」のごときのものであると、自然に通曉した昔の人たちはいっている。

デモクラテスの箴言¹⁾ [B35-B115]

- (1) 以下の箴言をデモクリトスのものとするについては、議論がある。アテナイのアピドナイ区の人デモクラテスが前350-330年頃にアッティカ方言で著したものが後にデモクリトスの著作とされたとの説があるからである。しかしディールスは、これらがアッティカ起源でなく、イオニア(アブデラ)起源であることは確かであるとして、一応ここに収めているが、この問題についてはなお精密な研究が必要であるとしている。

35

デモクラテス1.

わたしのこれらの知恵に、もし人が分別をもって耳を傾けるなら、その人はよき人物にふさわしい多くのことをなすことになる。そしてつまらぬことを行なうことはないであろう。

36

デモクラテス 2.

人間にとっては、身体よりも魂に意を用いることこそふさわしい。なぜなら、魂の完全さは肉体の悪を正すが、肉体の強さは、思慮がなければ、魂を何らよきものとはしないからである。[ストバイオス『精華集』III 1, 27]

37

デモクラテス 3.

魂の善を選ぶ者はより神的なものを選ぶ。肉体のそれを選ぶ者は人間的なものを選ぶ。

38

デモクラテス 4.

不正をなすを阻止するは立派なこと。さもなければ、一緒に悪事をなさぬこと。

39

デモクラテス 5.

よき人であるか、あるいはよき人を真似るべし。[ストバイオス『精華集』III 37,22]

40

デモクラテス 6.

身体によっても金銭によっても人間は幸福たりえない。正しさと思慮深さによって〔初めて〕人間は幸福たるのである。

41

デモクラテス 7.

恐れゆえではなく、なすべきことのゆえに、過ちから遠ざかること。[ストバイオス『精華集』III 1, 95]

42

デモクラテス 8.

不運の内であって、なすべきことを考えるというのは偉大である。[ストバイオス『精華集』I V 44, 68]

43

デモクラテス 9.

醜い行いへの後悔は人生の救い。

44

デモクラテス 10.

真理を話す人たるべきであって、多くを語る人である必要はない。 [ストバイオス『精華集』 II I 12, 13]

45

デモクラテス 11.

不正をする者の方が不正をされる者より不幸である。

46

デモクラテス 12.

度量の大きさと非礼を穏やかに耐えること。 [ストバイオス『精華集』 IV 44, 69]

47

デモクラテス 13.

法と統治者とより賢明な人にしたがうは節度あること。 [ストバイオス『精華集』 III 1, 45]

48

デモクラテス 14.

悪しき者が咎めだてても、よき人はそれを意に介さない。 [ストバイオス『精華集』 III 38, 46]

49

デモクラテス 15.

劣った者に支配されるは、耐え難し。 [ストバイオス『精華集』 IV 4, 27]

50

デモクラテス 16.

金銭に完全に圧倒されるような者は決して正しい人たりえないであろう。

51

デモクラテス 17.

説得には言葉が多くの場合黄金より強力である。 [ストバイオス『精華集』 II 4, 12]

52

デモクラテス 18.

知性を有すると思っている者に意見する人は、無駄骨を折るものである。 [ストバイオス『精華集』 III 10, 42]

53

デモクラテス 19.

多くの者はロゴス〔理〕を学んでいないが、ロゴス〔理〕にしたがって生きている。

53 a

デモクラテス 19.

多くの者が、極めて醜いことを行ないながら、極めて立派な論理を作り上げる。〔ストバイオス『精華集』II 15, 33〕

54

デモクラテス 20.

知性のない者は、不幸にあって節度を持つ。

55

デモクラテス 21.

徳の行ないと実践を求めるべきであって、その言論を追い求めるべきでない。〔ストバイオス『精華集』II 15, 36〕

56

デモクラテス 22.

美しいものを認識し求めるのは、そういったものに生まれつき素質のある人。

57

デモクラテス 23.

家畜の良さは体の壮健さ、人間のそれは品性の良さ。〔ストバイオス『精華集』IV 29, 18〕

58

デモクラテス 23 a.

正しきことを思慮する人たちの希望は実現可能であるが、愚かな者たちのそれは不可能。〔ストバイオス『精華集』IV 46, 18〕

59

デモクラテス 24.

技術も知恵も到達不可能、学ぶのでなければ。〔ストバイオス『精華集』II 31, 71〕

60

デモクラテス 25.

自分の過ちを責めるのは、他人のそれを責めるよりよい。〔ストバイオス『精華集』III 13, 46〕

61

デモクラテス 26.

その性格が秩序立った人は、その人生もまた秩序あるものとなる。 [ストバイオス『精華集』II I 37, 25]

62

デモクラテス 27.

不正をなさないことではなく、それを欲さないことがよきことなのだ。 [ストバイオス『精華集』III 9, 29]

63

デモクラテス 28.

うるわしき行ないに称賛を送るはうるわしきこと。というのも、悪しき行ないにそうするは、人をたばかる詐欺師のすることだから。 [ストバイオス『精華集』III 14, 8]

64

デモクラテス 29.

多くの者は博識ではあるが、分別を持たない。 [ストバイオス『精華集』III 4, 81]

65

デモクラテス 30.

博識ではなく、分別を得るよう努めねばならない。

66

デモクラテス 31.

行為の前に思量するは、後で考える [後悔する] よりよい。

67

デモクラテス 32.

すべての人を信じるのではなく、信頼できる人を信じること。前者は愚かであり、後者こそ思慮ある人に属することだから。

68

デモクラテス 33.

信頼できる人物かできない人物かは、その行なうところからだけでなく、欲するところからも知られる。

69

デモクラテス 34.

善と真はすべての人に同じであるが、快は各人に各様に異なる。

70

デモクラテス 35.

度外れに欲求することは子供に属すことであって、大人のすることではない。

71

デモクラテス 36.

時宜に適わぬ快は不快を生む。

72

デモクラテス 37.

ひとつのものに関する過度の欲求は、他のものに対して魂を盲目にする。

73

デモクラテス 38.

正しきエロス〔愛〕は礼を失しない仕方で美しいものを求める。〔ストバイオス『精華集』III 5, 23〕

74

デモクラテス 39.

もしそれがためにならないものであるなら、そういった快は決して受け入れぬこと。

75

デモクラテス 40.

思慮のない者は、支配するよりされる方がよい。〔ストバイオス『精華集』IV 2, 13〕

76

デモクラテス 41.

愚かな者には、ロゴス〔道理〕ではなく、不幸が教師となる。

77

デモクラテス 42.

知性の伴わぬ名声と富は確かな財産たらず。〔ストバイオス『精華集』III 4, 82〕

78

デモクラテス 43.

金を稼ぐのは無益なことではない。しかし不正によってそうするのは何よりも悪しきこと。〔ストバイオス『精華集』IV 31, 121〕

79

デモクラテス 44.

悪しき者どもを模倣し、よき人々を真似ようとしめないというのは、悲しむべきこと。

80

デモクラテス 45.

他人のことはあれこれ詮索するが、自分のことには無知であるのは恥ずべきこと。

81

デモクラテス 46.

いつもそのうちにとというのは、行為を未完のものにする。[ストバイオス『精華集』III 29, 67]

82

デモクラテス 47.

すべてを言葉で済ませ、行為によって何もしない人は、人を欺く善人の見せかけ。

デモクラテス 48.

財産と知性を併せ持つものは幸いである。彼はそれを然るべきことに立派に用いるであろう。

83

デモクラテス 49.

過ちの原因は、より良いものについての無知。

84

デモクラテス 50.

醜いことを行なう者は、まず自らに恥じねばならない。

85

デモクラテス 51.

反論ばかりして多く喋る者は、すべきことを学ぶのに不向きである。[ストバイオス『精華集』II 31, 73]

86

デモクラテス 52.

傲慢とは、いうばかりで、何ひとつ聞こうとしないこと。[ストバイオス『精華集』III 36, 24]

87

デモクラテス 53.

悪しき者を見張らねばならない。彼がチャンスを掴むことのないように。

88

デモクラテス 5 4.

嫉妬深い者は、敵を苦しめるかのように自らを苦しめる。[ストバイオス『精華集』III 38, 47]

89

デモクラテス 5 5.

不正を犯す者ではなく、犯そうと意図する者が敵である。

90

デモクラテス 5 6.

同族の間の敵意は、他人との間のそれより厄介である。

91

デモクラテス 5 7.

すべての人に対して疑いの心を持つというのではないが、用心深く慎重であれ。

92

デモクラテス 5 8.

好意は、それよりよいお返しをするつもりで、受けねばならない。

93

デモクラテス 5 9.

好意を施す時は受け取る者をあらかじめよく見るべし。その者がいんちき野郎で善に報いるに悪をもってしないかどうか。

94

デモクラテス 6 0.

小さな好意も、時宜に適えば受け取る者にとって極めて大きいものとなる。

95

デモクラテス 6 1.

名誉は、名誉の何たるかを知る思慮深い人たちのもとでは大きな力を持つ。

96

デモクラテス 6 2.

好意ある人とは、お返しには目もくれず、よくすることを何よりも選び取る人のことである。

97

デモクラテス 6 3.

友人であると思われている多くの人が実はそうでなく、そう思われていない人が実はそうである。

98

デモクラテス 64.

ひとりの知ある人との友情は、知なきすべての人とのそれに優る。

99

デモクラテス 65.

よき友がひとりもないような人生など、生きるに値しない。

100

デモクラテス 66.

親しい友が長くつづかない人は、険しい性格の人である。

101

デモクラテス 67.

友人が富裕から貧乏に転落したとき、多くの者は背を向ける。

102

デモクラテス 68.

すべてにおいて等しいことがうるわしい。超過と不足は、そうはわたしには思われぬ。

103

デモクラテス 69.

誰ひとり愛さない人は、誰からも愛されぬとわたしは思う。

104

デモクラテス 70.

魅力ある年寄りとは、口が上手で、しかも重々しく語ることのできる人。

105

デモクラテス 71.

身体の美は、もしその下に知性がなければ、動物的である。

106

デモクラテス 72.

幸運にあつて友を見つけるのはたやすいが、不運にあつては何よりも難しい。

107

デモクラテス 73.

同族の者すべてが友であるわけではなく、有益なことについて意見が合致する者がそうである。

107 a

デモクラテス 74.

人間であるなら、人の不幸を笑うべきでなく、涙することこそふさわしい。

108

デモクラテス 75.

よきことは求める者にかろうじてやってくるに過ぎないが、悪しきことは求めぬ者にもやってくる。[ストバイオス『精華集』IV 34, 58]

109

デモクラテス 76.

非難好きの人は友情に不向きである。

110

デモクラテス 77.

女は言葉の練習をするべからず。それは恐るべきことだから。

111

デモクラテス 78.

女に支配される、男にとって究極の屈辱。[ストバイオス『精華集』IV 23, 39]

112

デモクラテス 79.

常に美しいことを沈思するは、神的知性に属すること。

デモクラテス 80.

神々はすべてを見そなわしたまうということを信ずるならば、人は隠れても、あからさまにも、過ちを犯すことはないであろう。[『デモクリトス、エピクテトス、イソクラテスのことば』9 = ポルピュリオス『マルケラ宛書簡』20 参照]

113

デモクラテス 81.

知性のない者を褒める人は、彼らを大いに害しているのである。

114

デモクラテス 82.

自分によってよりも、他の人によって褒められる方がよい。

115

デモクラテス 83.

もし讃辞が解せぬなら、お世辞をいわれているものと考えよ。

デモクラテス 84.

宇宙は舞台、人生はパロドス¹、お前はきて、見て、去る。

(1) 「パロドス」は劇場用語としては合唱隊の舞台への最初の登場、ないしは登場に伴って歌われる最初の歌。一般的には「通り過ぎること」「通りすがり」の意味。

デモクラテス 85.

宇宙は変化、人生は思いよう。 [=マルクス・アウレリウス『自省録』4, 3 extr.]

デモクラテス 86.

知恵は、小さなそれも、無知の大きな判断より尊重されるべきものである。

115 a

ディオゲネス・ラエルティオス(『ギリシア哲学者列伝』I 22-23)

(22) ところでタレスは、ヘロドトスとドゥリスとデモクリトスのいうところによると、エクサミュエスを父とし、クリオブウリネを母とし、テリダイー族の出であった。この一族はフェニキア人であり、カドモスとアゲノルの系統の中で最も名門である。… (23) … エウデモスも『天文学史』の中でいっているように、彼〔タレス〕は天文学を研究した最初の人であり、また日蝕や太陽の回帰を予いした最初の人であったように思われる。クセノパネスやヘロドトスが彼を称賛しているのはそのためであり、ヘラクレイトスやデモクリトスもそのことを証言している¹。

(1) ここで言及されている人々については、タレスの章A 1の注1、注2、注6を参照のこと。

116

ディオゲネス・ラエルティオス(『ギリシア哲学者列伝』IX 36)

というのも「わたしはアテナイに行ったが、わたしと認める者は誰もいなかった」と彼〔デモクリトス〕自身語っているからである。

キケロ(『トゥスクルム荘対談集』V 36,104)

それゆえ理解すべきは、世間の栄光はそれ自体として求めるべきものではないし、また世に知られないことも危惧すべきことでないということである。デモクリトスはいっている、「わたしはアテナイに行ったが、わたしと認める者は誰もいなかった」と。栄光から遠ざかっていることを〔むしろ〕光栄とする人が、冷静で重厚な人であるのだ。

117

ディオゲネス・ラエルティオス(『ギリシア哲学者列伝』IX 72)

デモクリトスは性質を追放して、「熱いは慣わしによること、冷たいは慣わしによること、本当は原子と空虚〔あるのみ〕」といっている。そしてさらに「本当はわれわれは何も知ってはいないのであって、真理は深みに沈んでいる」と。

[参照] キケロ(『アカデミカ第一』II 10, 32)

自然を責めよ。というのも、自然は、デモクリトスのいうように、真理をはるかな深みに隠したのだから。

118

アレクサンドリアのディオニュシオス(エウセビオス『福音の準備』XIV 27, 4 による)

いずれにせよ、デモクリトス自身は「ペルシア人の王国が自分のものとなるより、原因のひとつでも発見することを望む」といったといわれている。しかしこのことを彼は、空虚な原理と不安定な仮説から出発し、諸存在の本性の根と共通の必然性を見ないで、いたずらにいわれのない説明を繰り返し、愚かでバカな観察を結果しながらそれを最大の知恵と思い込み、そして偶然を普遍的なもの・神的なものの女王として立てて、すべては偶然によって生じると主張する一方、他方ではそれを人間の人生からは廃嫡し、偶然を第一位に置く者を無知愚昧の輩として非難して、いつているのである。

119

アレクサンドリアのディオニュシオス(エウセビオス『福音の準備』XIV 27, 5 による)

少なくとも彼〔デモクリトス〕は『忠告集』を始めるに当たって次のように語っている。「人間どもは自分の考えのなさの口実として偶然の像をこしらえ上げた。」すなわち偶然はその本性上知と争うものなのである。そして偶然は思慮に最も敵対するものであって、思慮に打ち勝つことさえあると彼らはいった。否、むしろ彼らは思慮を根本から廃棄し、消し去って、それに代えて偶然を立てているのである。というのも、思慮を祝福されたものとして讃えるのではなく、むしろ偶然を最も賢明なるものとして讃えているのだから。

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 8, 16)

デモクリトスの言葉。「人間どもは自分の思慮のなさの口実として偶然の像をこしらえ上げた。なぜならまれに偶然は思慮と争うことがあるからであるが、だが人生における大抵のことは、賢明なる洞見がこれを正してきたのである。」

エピクロス(『主要教説』16)

偶然はわずかしか知者に忍び込まない。むしろ最も重要で最も主要なことは理性がこれを管理してきたし、またこれからも人生の全期間にわたって管理しつづけるであろう。

120

エロティアノス(『ヒッポクラテス用語解』p.90, 18 N.)

血管(プレプス)という名称で彼は、通常そう呼ばれているものではなく、動脈をそう呼んだ。またデモクリトスは動脈の動きを「脈拍」(プレボパリエー)と呼んでいる。

121

エウスタティオス(『「オデュッセイア」注解』p.1441 [II 190 への注])

デモクリトスは「最もふさわしいもの」(ἐπιτηδείστατον)といういい方¹をしている。

(1) これは最上級の不規則な形であり、デモクリトスにのみ固有の異例な表現である。

『語源辞典』(Etymologicum Genuinum)

「空にすること」(ἀλαπάξαι)：お腹を空っぽにする働きのある植物であるラパトス(ダイオウ)によって〔水分を〕取り去ってしまうこと。またデモクリトスは猟師が作る穴を空っぽになっていることから「ラパトス〔落とし穴〕」と呼んでいる。

〔未刊行資料〕(Anecd. Gr. ed. Bekker Lex. VI 374, 14)

いずれにせよデモクリトスは猟師によって掘られる穴を、それはその中に兎が落ちるように上に薄く灰が撒かれ、薪がかぶせられたものであるが、それを「ラパトス〔落とし穴〕」と呼ばれているといっている。

『語源辞典』(Etymologicum Genuinum)

「女」(γυνή)：…あるいは、デモクリトスのいうように一種の母体(γυνή)であるからして、精子(γυνή)を受け容れるもの。

『語源辞典』(Etymologicum Genuinum)

「表象」(δείκτελον)：デモクリトスのもとでは、その形が事物と似た流出物。

擬ガレノス(『医学定義集』439 [XIX 449 K.])

精子は、プラトン [『ティマイオス』91 A] とディオクレシ¹のいうところによれば、脳と脊椎から出てくる。他方、プラクサゴラス²、デモクリトス、それにヒッポクラテスは、身体全体から発するとするが、デモクリトスは「人間どもはひとつであるだろうし、すべての人間が〔ひとつの〕人間であるだろう」(?)³と語っている。

- (1) カリュストスのディオクレシ。前4世紀のエウボイア島カリュストス出身の医者で、アテナイで医師として活躍した。
- (2) 前4世紀後半の医者。コスの人。彼については他の人の証言によってしか知られないが、偉大な解剖学者カルケドンのペロピロス(前3世紀の前半、アレクサンドリアで活躍)の師といわれる。彼自身解剖学者としてかなり重要な存在であったようで、そのことはガレノスも認めている。しかしガレノスは、神経は心臓から発するとする彼の学説は攻撃している。
- (3) ディールスはこの箇所を理解困難として疑問符を付しているが、人間の真のリアリティは個体性ではなく、類的存在にあることを語ったものであろうか。

ガレノス(『経験派の医術について』断片 ed. H. Schöne 1259, 8)

というのも、〔事実の〕明証性を離れては出発することすらできない人が、それから原理を得ておきながら、それに対して向うみずな態度を取るなら、どうして信頼できる人といえるだろうか。デモクリトスも、見かけを論難して次のようにいうとき、このことをよく知っていたのである。

「色は慣わしによること、甘さは慣わしによること、苦さは慣わしによること、本当は原子と空虚あるのみ。」また彼は感覚をして思考に向かって次のように語らせている。「哀れなる心よ、お前はわれわれから信念を得ておきながら、われわれを投げ捨てるのか。われわれを投げ捨てることはお前にとって転倒なのだ。」

126

ガレノス(『脈の相違について』 I 25 [VIII 551 K.])

[波のような脈とミミズがのたうつような脈について] 共通に見られる現象があるのであり、それに基づいてそれぞれに名称があるのである。すなわち、一方の波のようなのは、動脈において次々と波のように隆起することがそれであり、他方のミミズがのたうつようなのは、ミミズの歩みに似ているということである。またそれは波のように動く生き物の歩みにも似ている。それはちょうどデモクリトスがどこかで、「歩みの上で波のように行きつ戻りつする」そのようなものについて論じて語っているのと同じようなものである。

アリストテレス(『動物誌』 E 19. 551 b 6)

また幼虫も蛹もこういった別のものから生じる。それらは歩みでは波のようにうねり、別の部分を曲げることによって踏み出し、進んで行く。

127

ヘロディアノス(『一般的韻律について』 [エウスタティオス『「オデュッセイア」注解』 p.1766: XIV 428 への注による])

またデモクリトスはいふ。「こする者たちは快樂を楽しんでいるのであって、性交する人とまさに同じことを行なっているのだ。」

128

ヘロディアノス(『一般的韻律について』 [テオグノストス『正書法について』 p.79 (I 355, 19 L.) による])

ων, ην, αν, εν, ιν, υν には中性の単数は見出されない。というのも、デモクリトスのもとに見られる τὸ ἰθύτην [「まっすぐにくり抜かれたもの」]は無理な形だからである。

129

ヘロディアノス(『語形変化について』 [『語源辞典』 νέωταιの項 [II 253 L.] より])

さらにまた、χρυσόονται [「金めつきされる」] が χρυσοῦνται となるように、そのように νόονται [「思惟される」] も νοῦνται となる。デモクリトスにおける用例。「神的なものは心によって思惟される(νοῦνται)。」

129 a

ヘロディアノス(『ホメロス索引』 p.396, 11 [II 224 n. L.])

またデモクリトスのもとには κλίνω [「傾ける」] から νを取った κέκλιται という形が見られる。

130

ヘシュキオス(『辞典』)

ἀμφιδήττοι : デモクリトスにおいては、中が空洞の環。

131

ヘシュキオス(『辞典』)

ἀπάτητον : デモクリトスにおいては、不規則に組み合わせられたもの。

132

ヘシュキオス(『辞典』)

ἀσκαληρές : デモクリトスにおいては、辺の等しいもの。

133

ヘシュキオス(『辞典』)

βροχμώδης : 濡れていて柔らかいこと。デモクリトス。

134

ヘシュキオス(『辞典』)

βρόχος : 革紐、デモクリトス。縛り首、紐帯。

135

ヘシュキオス(『辞典』)

δεξαμεναί : 水の容器。身体においては血管。デモクリトスの用語。

136

ヘシュキオス(『辞典』)

δυοχοῖ : デモクリトスにおいては、かぶせる。

[参照] ヘシュキオス(『辞典』)

δυοχωῶσαι : かぶせる。

137

ヘシュキオス(『辞典』)

συγγονή : 組み立て、デモクリトス。

138

ヘシュキオス(『辞典』)

ἀμειψικοσμή : 様変わり。

139

ヘシュキオス(『辞典』)

ἀμειψιρυσμεῖν : 結合を変えること、あるいは変形すること。

139 a

ヘシュキオス(『辞典』)

ἀμειψίχρο <ο> v : <色> を変えるもの。

140

ヘシュキオス(『辞典』)

εὖεστῶ : 家がよく整っていることからくる幸福。

141

ヘシュキオス(『辞典』)

ἰδέα : 同様性、形、形相、また最小のもの〔原子〕。

142

オリュンピオドロス(『プラトン「ピレボス」注解』 p.242 Stallbaum)

神々の名に対するソクラテスの畏れはなぜあれほどのものであったのか [『ピレボス』 12 C 参照]。古人はそれぞれの神にふさわしい名を献じており、動かすべからざるものを動かすのは尋常ならざることであるためなのか、あるいは『クラテュロス』の議論にもあるように、神々には本性的に固有する名があるためであったのか、あるいはデモクリトスのいうように、名は「音声となった彫像」であり、しかもそれらは神々のそれであるためであるのか。

ヒエロクレス(『ピュタゴラス「黄金詩篇」注解』 25)

ゼウスという名は創造的実体の音声におけるシンボルであり、似像である。それは、傑出した知恵によって事物に最初に名を定めた人々が、ちょうど卓越した彫像の製作者が似像によってするように、名によってそれらの力を顕わならしめたものなのである。

143

ピロデモス(『怒りについて』 28, 17 G.)

そしてしばしば多くの不幸が友にも他の身内の者にも起こるし、また時には祖国にも王国にも起こるが、かの憤激が数え知れない苦しみをアカイア人に与えた〔あの〕古の不幸のみならず、日々のそれも、またデモクリトスのいう「人が思いつく限りの災い」のほとんどすべてが、度を過ぎた怒りからもたらされているのである。

144

ピロデモス(『音楽について』 IV 31 p.108, 29 Kemke)

そこで、古人の中でも最大級の自然学者であるのみならず、記録されているいずれの人にも劣らない業績を残した人、デモクリトスは「音楽の方が新しい」という。そしてその理由を次のように語っている。「それは必要さが分離し出した〔生み出した〕ものではなく、すでにあり余る状態から生み出されたもの〔だから〕。」

144 a

ポテリオス(『辞典』Aの項 p.106, 23 Reitzenst.)

ἀναβήσομαι(「戻るであろう」)。デモクリトス：始めの〈ところへ〉わたしは戻るであろう。

145

プルタルコス(『子供の教育について』14 p.9 F)

なぜなら、デモクリトスによれば「言葉は行ないの影」であるから。

146

プルタルコス(『いかにして自らの徳の進歩に気づきうるか』10 p.81 A)

〔節制を通して人が示すものは〕すでに内部で養われ、それ自身に根ざすところの、そしてデモクリトスのいうところの「自分自身から喜びを得るのを常とするロゴス〔理性〕」なのである。

147

プルタルコス(『健康のしるべ』14 p.129 A)

というのも、カラスのカーカー鳴く声や雌鶏のコッコッと鳴く声に、またデモクリトスのいう「豚が藁屑の上で転げまわる」行動に風や雨の前兆を見ようとして注意を凝らしておきながら、身体の動きや動揺や予感を優先的に取り上げて見張り、それを自分の中に生じるであろう将来の嵐の前兆と見なさないのは、理解に苦しむことだからである。

クレメンス(『プロトレプティコス』92, 4)

他方の者たちは、水溜りや泥の周りにいる蛆虫のように快樂の流れにのたうちまわって空しく愚かな贅沢を食んでいるが、豚のような連中である。というのも、彼〔ヘラクレイトス〕の言によれば「豚は清水より泥を喜び」、デモクリトスによれば「藁屑の上を転げまわる」からである。

〔参照〕擬テオプラストス(『気象の諸兆候について』49)

豚が藁屑の上で争ったり絡まり合ったりするとき、それを嵐の前兆と見るのが、どこでも語られている一般的見解である。

〔参照〕アラトス(『天象譜(パイノメナ)』1123)

「豚は藁屑の上を転げまわる。」

148

プルタルコス(『子供に対する愛情について』3 p.495 E)

降りかかってくる精子を子宮が受け取って包むとき、〔子宮の内に精子の〕根づきが生じるが(というのも、デモクリトスのいうように、「最初に臍が〔精子が〕揺れたりき迷ったりしないための投錨として母胎の内に植え付けられるからであり、それは生まれてくる将来の果実〔胎児〕のための元綱であり、蔓なのである」)、そのとき自然は月毎の清めの管を閉ざし、云々。

プルタルコス(『心と身体の影響はどちらがより有害か』2 p.500 D)

そこでわれわれは自分の内に向かって次のように語ることにしよう。おお人間よ、君の身体もまた多くの病や苦しみを本性的に自分の中から発し、また外から降りかかってくるものを受け入れる。だがもし君が自分を内部から開いて見せるなら、デモクリトスのいうように、「悪の多彩な情念に満ちた貯蔵庫とその宝物」を君は発見するであろう。それらは外から押し寄せてくるものではなく、いわば土地に根ざした土着のものであって、〔そこから〕情念において溢れんばかりに豊かな悪徳が発するのである。

プルタルコス(『食卓歓談集』I 1, 5 p.614 D-E)

このように軽い探究は魂を適度に、そして有益に動かすが、しかしデモクリトスによれば、「争論家や小手先を弄する者の議論」は捨てるべきだからだ。

プルタルコス(『食卓歓談集』II 10, 2 p.643 F)

なぜなら、デモクリトスのいうように「共通の魚には背骨がない」からである¹。

- (1) 魚を分けるとき、一方が上の方を取り、他方が下の方を取るなら、背骨はそのまま残される。したがってどちらにも背骨がない。コムニスムスは「わたしのもの」「お前のもの」といった争いをなくするというのである(ディールス)。

プルタルコス(『食卓歓談集』IV 2, 4 p.665 F)

雷の火は精確さと微細さの点で驚くべきものである。それは純粹で清浄な実体から生成を得ており、すべてのものを、たとえそこに湿ったものとか土的なものが混入しておろうとも、運動の鋭さがそれを振り落として、すっかり清めてしまう。デモクリトスのいうごとく、「ゼウスによって投ぜられしもので、アイテールの〈清浄な〉輝きを保た〈ないようなものは〉何ひとつない」のである。

プルタルコス(『食卓歓談集』VIII 10, 2 p.734 F)

[なぜ秋の夢は信じられること最も少ないのか。] パボリノスは … デモクリトスの旧い説を、ちょうど煙にくすぶった説からほこりを払い、磨きをかけるようにして取り上げているが、その際デモクリトスのいう次のことを共通認識として基礎に置いている。「剥離像〔エイドーラ〕が孔を通して身体内に進入してくるが、それが立ち昇ることによって睡眠中の視覚像を作り出す。それら剥離像〔エイドーラ〕は、家具や衣類や植物など、いたるところから発せられて訪れるが、また動きが激しいのと熱があるためにとりわけ動物から発せられるが、身体の形の刻印された類似性を有するのみならず」(エピクロスはこの点まではデモクリトスにしたがったが、ここでその説と袂を分かったように思われる)、「それぞれにおける魂の動きや意思や性格や情念の映像をも捉えて一緒に引き摺ってくるのであり、そしてそれらを伴って降りかかるとき、あたかも生き物のように、

それらを送り出した当のものの考えや推理や衝動を、その像が明瞭で混乱しないまま接触されるとき、その受け手に語りかけ、伝えるのである。」このことが最もよく実現されるのは、それらの移動が妨げられることなく、かつ速やかに、滑らかな空気を通してなされる場合である。だが、木々の落葉する秋の空気ははなはだ不均質で粗い状態にあって、剥離像〔エイドーラ〕をさまざまに歪めたり逸らせたりし、進行を緩慢にすることによって、それらの明瞭さを色あせた貧弱なもの、ぼんやりしたものにする。これは、高揚し燃焼するものからは多くの剥離像〔エイドーラ〕が飛び出し、それが速やかに到達する場合には新鮮で意味明瞭な映像を与えるが、それとちょうど逆の事態である。〔本章A77に同じ〕

153

プルタルコス(『政治的提い』28 p.821 A)

政治的人間というものは、少なくとも記憶にとどめてくれる人たちの善意と心情の内に住まう真の評価と好意を軽視することはないであろうし、また評判を侮って、デモクリトスが求めたような「隣人に喜ばれること」をなないがしろにすることもないであろう。

ピロデモス(『追従について』pap. 1457 C.10 [Crönert, *Kolot und Menedemos*, S.130])

むしろそれは、平凡な人たちによってそういったお追従を伴わずに獲得されているのが見られる。とはいえ、ニカシクラテス¹は、「隣人に喜ばれる」お追従を百害あって一利なしと非難したデモクリトスを称えながら、どういうわけか、エピクロス一派の人々には賛同を示している。

- (1) 不詳。ピロデモスの言及から、デモクリトスやエピクロス派に関する著作があったことが知られるのみ。

154

プルタルコス(『陸棲動物と水棲動物のどちらが利口か』20 p.974 A)

学ぶことに関して動物に勿体をつけるなら、恐らくわれわれは笑い者になろう。彼らについてデモクリトスはこう主張している。「最も重大な事柄において、われわれは彼らの弟子だったのである。機織術と修繕術においてはクモの弟子であったし、建築術においてはツバメの弟子であり、真似て歌うことにおいてはハクチョウやナイチンゲールといったよく声の通るものの弟子であった。」

155

プルタルコス(『ストア派の共通観念について』39 p.1079 E)

ではさらに、彼〔クリュシッポス¹〕がどのようにデモクリトスに答えたか見てみたまえ。デモクリトスは次のように自然学的な仕方での確に問題を提起している。「円錐が底面に平行な面で切られた場合、切られた〔二つの〕平面は、どのように考えるべきであろうか。等しくなるであろうか、それとも等しくなくなるであろうか。等しくないとするなら、円錐は多くの階段状の切り込みとギザギザを得ることとなり、一様でない様相を呈することになるだろうし、他方、もし等しいなら、切り口も等しくなるであろう。したがって等しくない円からではなく、等しい円からなることになり、円錐は円柱の様相を呈することになるが、これは極めて不合理である。²」

- (1) ストアの哲学者クリュシッポスについては、本章A 3 5 a の注1 参照。
(2) いわゆる「無限小の理論」に係わる問題であり、この論述は後代の積分の考え方に通ずるものである。

155 a

アリストテレス(『天体論』Γ 8. 307 a 17)

デモクリトスによれば、「球も一種の角である」から、分断する。

シンプリキオス(『アリストテレス「天体論」注解』p.662, 10)

球形も全体としては角である[アリストテレス『天体論』307 a 17]。けだし、折れ曲がっているものが角であるなら、そして球もその全体としては折れ曲がっているのであるなら、当然その全体は角といわれる。

156

プルタルコス(『コロテス論駁』4 p.1108 F)

まず最初にコロテス¹はデモクリトスを、事物の各々はこれこれである以上にこれこれであるわけではない[何ものもこれといった定まったものであらねばならないという特別な理由はない]ということによって人生をメチャクチャにしてしまったと告発しているが、しかしデモクリトスは実際は事物の各々はこれこれである以上にこれこれであるわけではない[すなわち何ものもこれといった定まったものであらねばならないという特別な理由はない]と考えたということからは程遠いのであって、むしろそういったことを語るソピストのプロタゴラスと戦って、彼に対抗して多くの説得的なことを書き残しているのである。そういったものにコロテスは夢にも出遭わなかったとみえて、かの人[デモクリトス]の言葉に躓いているのである。そこでは「あるもの(δέν)もあらぬもの(μηδέν)以上にあるわけではない」と述べられているが、あるもの(δέν)とは物体のことであり、あらぬもの(μηδέν)とは空虚のことである。そして空虚もまたある一定の本性と固有の実在性を持っているといっているのである。

- (1) エピクロス派の哲学者コロテスについては、エンペドクレスの章B 1 0 の注1 参照。

157

プルタルコス(『コロテス論駁』32 p.1126 A)

これらのことについては、経済的・政治的に生きてきた人たちはわたしを非難するでもあろう。だがこれらはみんなコロテスが罵ってきた人たちである。一方デモクリトスは彼らの「政治的技術は大したものであるから、学び取って、[そういった]苦勞を[自ら]求めるべきである」と勧めている。「そういった苦勞から偉大で輝かしいことが人間に生じてくるのだから」というのである。

[参照] プルタルコス(『コロテス論駁』1 p.1100 C)

… 支配とか政治や王たちとの親交、こういったものから偉大で輝かしいことが人生に生じてくるとデモクリトスはいった。

プルタルコス(『「隠れて生きよ」について』5 p.1129 E)

太陽が昇り、… その光によって〔生きとし生ける〕すべてのものの活動と思惟が駆り立てられる。それは「人間どもは日ごとに新たなることを思慮する」とデモクリトスのいうごとくであって、ピンと張ったブイに引かれるごとく互いに引き合う衝動に引かれて、それぞれのものがそれぞれのところから活動へと立ちあがる。

プルタルコス(『情念と病について』断片2)

諸々の災いについての魂に対する身体のそういった訴えは何か昔からのものであるように思われる。デモクリトスもまた不幸(の原因を)魂に帰して次のようにいっている。「もし身体が魂に対して、一生を通じて苦しめられ、ひどい目に遭わされてきたことで訴訟を起し、わたし自身がその告訴の裁(定者)となるなら、喜んで魂に有罪の判決を下すであろう。それは、身体のある部分はなおざりによって駄目にし、また酩酊によって弛緩させ、またある部分は好色によって損ない、引き裂いたことを理由としてであって、ちょうど道具や器具の調子が良くないのに、それらを容赦なく使用した者の責任を問うのと同様である。」

〔参照〕プルタルコス(『健康のしるべ』24 p.135 E)

他の人に対して尊大に振舞う者たち、あるいは妬みを抱く者たち、あるいは是が非でも他人に勝ろうとする者たち、あるいは不毛な空しい名声を追い求める者たち。というのも、とりわけこういった者たちに向かってデモクリトスは語っていると思われるからである。「もし身体が虐待のかどで魂に対して訴訟を起こすなら、魂は逃れることができないであろう。」

ポルピュリオス(『禁忌について』IV 21)

というのも、悪しく生きて、節度をもって思慮深く敬虔に生きるのではないなら、「[そもそも]悪しく生きているのではなく、長時間死んでいるのだ」とデモクリトスは語っているからである。

逸名著作家の古注(ロドスのアポロニオス『アルゴナウティカ』III 533 への古注 (AB))

昔、魔女が月と太陽を取り払うと考えられていた。それゆえデモクリトスの時代にいたるまで、多くの人が蝕を「取っ払い」と呼んでいた。

逸名著作家の古注(ホメロス『イリアス』XIII 137 への古注)

デモクリトスは円筒形を「転石」と呼んでいる。

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 53)

コリントスのクセニアデス¹。デモクリトスもまた彼に言及している。

(1) このクセニアデスについては、「すべては偽であり、すべてはあらぬものから生成し、またあらぬものへと消滅して行く」と語った哲学者としてセクストス・エンペイリコスによって言及されている以外のことは知られない。おそらく前5世紀の半ば頃に活躍したエレア派の系統に属する哲学者と推測される。シノペのディオゲネスの主人になったといわれる「コリントスのクセニアデス」とは恐らく別人。

164

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 116 f.)

同じものが同じものを認識しうるとする古い考え……。 (117) デモクリトスは生命あるものと生命なきものについて次のように立論する。「なぜなら」と彼はいう、「鳩が鳩と群れ、鶴が鶴と群れ、その他の動物も同様であるごとく、動物もまた同種の動物と群れるからである。このことは無生物の場合も同様であって、篩にかけられた種や砂浜の小石において見られるごとくである。というのも、前者の場合には篩の回転によって豆は豆と、大麦は大麦と、そして小麦は小麦とはっきりそれと見分けられるような形で並ぶからであり、後者の場合は波の運動によって細長い小石は細長いのもと同じところに押しやられ、丸いのは丸いのもと同じところに押しやられるからであって、あたかも事物における類似性が事物を集合させる何かを持っているかのごとくだからである。」デモクリトスはこのようにいうのである。

165

セクストス・エンペイリコス(『諸学者論駁』VII 265)

デモクリトスは〔自らを〕ゼウスの声になぞらえ、「すべてのものについてこれらのことを語る」ことを宣言して、〔人間の〕概念を呈示しようと試みているが、そのいうところは素人式の判断に勝るものでなかった。「人間とはわれわれの誰もが知っているところのものである」〔というのが彼のいうところだからである〕。

キケロ(『アカデミカ第一』II 23, 73)

デモクリトスについてはどういふべきであろうか。才能の偉大さにおいてのみならず、その魂の偉大さにおいて誰を彼と比べることができるであろうか。彼は大胆にも次のように語り始めている。「すべてのものについてわたしはこれらのことを語る。」それについて語らないものとして、彼は何も除外しないのである。というのも、すべてのものの外に何がありうるというのか。…そしてまた彼がこのようにいうのは、あるものが真理に属することを否定しないわれわれが、それが知覚されることは否定するためではない。彼は〔感覚が〕真であることを明らかに否定している。そしてその同じ感覚を不明瞭というのではなく、「暗い」といつている。感覚を彼はそのように呼ぶのである。

〔参照〕アリストテレス(『動物部分論』A 1. 640 b 29)

そこで、もし形や色によって動物のそれぞれや各々の部分が〔まさにそれであるところのもの〕あるのだとするなら、デモクリトスは正しく語っていることになるろう。というのも、彼はそのように理解していたと思われるからである。少なくとも彼は、人間がどのようなものであるかはその姿において万人に明らかだといっているが、それはあたかも人間そのもの〔人間の本質〕が形と色によって認識されるかのごとくである。だが死者もまた同じ姿形をしているが、しかし死者は

〔もはや〕人間ではないのである。

〔参照〕エピクロス(断片310 [セクストス・エンペイリコス『諸学者論駁』VII 267])

人間とはこのような形に生命の伴ったものである。

166

セクストス・エンペイリコス (『諸学者論駁』IX 19)

デモクリトスは「剥離像(エイドーラ)のようなものが人間にやってくる」が、そのあるものは善をなすものであり、あるものは悪をなすものであるという。そこで彼は「好運な剥離像(エイドーラ)に行き当たる」ことを祈ったのである。それらは巨大で超自然的であり、破壊しにくいものはあるが、不朽ではないという。また見えるものや音声を発することによって人間に未来のことを予め告げ知らせる。こういったことから、それらの現れをキャッチして、昔の人たちはそれを神と考えたのである。それら以外に不朽の本性的な神的なものは存在しないからである。

167

シンプリキオス(『アリストテレス「自然学」注解』327, 24)

さまざまな形〔原子〕からなる渦巻が万有から分離された。

168

シンプリキオス(『アリストテレス「自然学」注解』1318, 34)

これら〔原子〕を彼らは「自然」と呼んだからである。… というのも、それらが「一面に撒き散らされている」と語っているから。

169

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 1,12)

デモクリトスの言葉。「すべてを知ることを求めてはならない。すべてに無知とならぬために。」

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 4,12)

説得には言葉が多くの場合、黄金より強力となる。[本章B 5 1に同じ]

170

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 7,3i)

幸・不幸は魂に属すること。

171

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 7, 3i)

幸福は家畜の内にも黄金の内にも住まわない。魂がダイモーンの住まうところ。

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 9, 1)

デモクリトスの言葉。「そこからわれわれに善が生じる、その同じところからわれわれは悪もまた受け取るであろうが、しかしわれわれは悪の外にいることもできるであろう。例えば深い水は多くのことに有用であるが、また反対に有害でもある。溺れる危険があるから。そこで、泳ぎを教える方法があみ出されたのである。」

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 9, 2)

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「善を巧みに導き、しっかりと運用するすべを知らないとき、善から悪が人間どもに生じてくるが、そういったことを悪の内に入れるのは正当でなく、善の内にあるもののひとつ〔と見なすべき〕である。そして、もし人がそれを望むなら、善を悪に立ち向かう力として使うこともできるのである。」

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 9, 3)

法に適った正しい行為に向かって進む朗らかな人は現においても夢においても機嫌よく、健やかで、憂いがない。他方、正義を無視し、然るべきことを行なわない者には、そういったことのすべてが、それが思い出されるとき不愉快となり、恐ろしくなって、自らを罵ることになる。

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 9, 4)

神々は昔も今も善きもののすべてを人間どもにお与えくださる。悪しきもの、有害なもの、無益なものはこの限りでなく、これらは昔も今も神々が人間どもに贈りたまうのではなく、むしろ人間自身が知性の盲目と無知によって自らこういったものを身に招くのだ。

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 9, 5)

偶運は気前がよいが、確かでない。それに対して自然は確実である。それゆえそれは、小さいが確かであることによって、大望に勝っている。

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 15, 33)

多くの者が、極めて醜いことを行ないながら、極めて立派な論理を作り上げる。[本章B 5 3に同じ]

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 15, 36)

徳の行ないと実践を求めるべきであって、その言論を追い求めるべきでない。[本章B 5 5に同じ]

177

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 15,40)

デモクリトスの言葉。「よき言葉が悪しき行為を隠すことはないし、またよき行為が言葉の冒瀆によって傷つけられることもない。」

178

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31,56)

デモクリトスの言葉。「すべての中で最も悪しきものは若者の教育におけるなおざりである。というのも、悪行の温床たる快樂を生むのはそれだから。」

179

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31, 57)

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「外国におけるように、子供たちが苦勞せず、したい放題にするなら、彼らは文字を学ぶこともなければ、音楽とか競技も学ぶこともなく、またとりわけ徳を維持するものなる恥じる心を学ぶこともないであろう。まさにこれらのものから恥じる心は生まれるのである。」

180

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31, 58)

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「教養は順境にあつては飾りであり、逆境にあつては避難所である。¹⁾

(1) ディオゲネス・ラエルティオスはこれをアリストテレスの言葉として挙げている(『ギリシア哲学者列伝』V 19)。

181

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31, 59)

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「徳の場合には、励ましと言葉を用いて説き勧める方が法と強制によるより勝れているように思われる。というのは、法によって不正から遠ざけられている者は見えないところで不正を犯すことも当然ありうるが、説得によって然るべきことへと導かれた者は、見えないところであっても見えるところであっても、道から外れたことを行なうとは思われないからである。それゆえに分別と知識によって正しく振舞う人は、勇敢で同時にまっすぐな人になるのである。」

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31, 65)

デモクリトスの言葉。「自然と教育は似たところがある。なぜなら、教育もまた人間を変様させるが、変様させることで〔新たな〕本性を作り出すから。」 [本章B 3 3に同じ]

182

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31, 66)

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「美しいものは学習が苦勞してこれを作り上げるのである。他

方、醜いものは苦勞なしにひとりでに実を結ぶ。というのも、それは欲さぬ者もしばしばそういった者となるよう強制するから。」

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31, 71)

技術も知恵も到達不可能、学ぶのでなければ。 [本章B 5 9に同じ]

183

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31, 72)

同じ人 [デモクリトス] の言葉。「ある場合には若者たちに分別があり、老人たちに無知がある。時間は思慮を教えないからである。むしろ時宜に適った教育と素質が教えるのである。」

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31, 73)

デモクリトスの言葉。「反論ばかりして多く喋る者は、なすべきことを学ぶのに不向きである。」 [本章B 8 5に同じ]

184

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31, 90)

デモクリトスの言葉。「悪しき者との絶え間ない交わりは悪の性状をますます増長させる。」

185

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 31,94)

デモクリトスの言葉。「教養ある人の希望は無教養な者の富に勝る。」

186

ストバイオス(『倫理学抜粋集』II 33, 9)

デモクリトスの言葉。「心の一致は友情を作り出す。」

187

ストバイオス(『精華集』III 1, 27)

デモクリトスの言葉。「人間にとっては、身体よりも魂に意を用いることこそふさわしい。なぜなら、魂の完全さは肉体の悪を正すが、肉体の強さは、思慮がなければ、魂を何らよきものとはしないからである。」 [本章B 3 6に同じ]

ストバイオス(『精華集』III 1, 45)

デモクリトスの言葉。「法と統治者と、より賢明な人にしたがうは節度あること。」 [本章B 4 7に同じ]

188

ストバイオス(『精華集』III 1, 46)

有益なことと無益なことを分ける境界石は喜びのある・なしである。

ストバイオス(『精華集』III 1, 47)

人間にとって最善のことは、人生を送る上で、できるだけ多く喜び、できるだけ少なく悲しむことである。もし人が死すべきものに快樂を見出すようなことをしないなら、このことは可能となるう。

ストバイオス(『精華集』III 1, 91)

デモクリトスの言葉。「悪しき行為については、語ることすら避けるべきである。」

ストバイオス(『精華集』III 1, 95)

恐れゆえではなく、なすべきことのゆえに、過ちから遠ざかること。[本章B 4 1に同じ]

ストバイオス(『精華集』III 1, 210)

デモクリトスの言葉。「なぜなら、人間たちに明朗快活さが生じるのはほどほどの喜びと生活の釣合によってだからである。不足したり限度を越えたりするものは状況を急変させ、魂の内に大きな動揺を生じさせるのが常である。魂の中でも大きな振幅で動くものは安定性も明朗快活さも欠く。そこで、手の届くものに想いを致して、手元にあるもので満足すべきである。羨望の的になるようなものや驚嘆されるようなものはほとんど記憶にとどめることも思考の傍らに置くこともなく、その反面、苦勞に耐える人々の人生を見て、それらの人々が耐えている災禍に想いを致さねばならない。そうすれば、君の手元に現に存在するものが〔どれほど〕大きく羨むべきものであるか分かり、もはやより多くを望んで魂に災いを蒙らせるようなことはなくなるであろう。というのも、持てる人たちや他の人々によって幸福と称えられている人たちに目を見張り、いつも記憶の中でその人たちの傍らに座しているような人は、絶えず新しいことを始め、野心によって法が禁ずる取り返しのつかないようなことも敢えて行なうことを自らに課さざるをえなくなるからである。それゆえに、そういったものを追い求めるべきでなく、手元にあるもので明朗快活に過ごすべきである。自らの人生を悪しき実践に生きる者のそれと比べ、彼らが蒙っていることを想い、また彼らより自分がどれだけ仕合せな状態にあり、仕合せに過ごしているかに想いを致して、自らを幸福と考えねばならない。けだし、こうした考えにしたがうなら、君は〔人生を〕より一層明朗快活に過ごし、人生における災厄の少なからずを追っ払うことになろうからである。妬み、嫉妬、敵意といったものを。」

ストバイオス(『精華集』III 2, 36)

デモクリトスの言葉。「称賛すべきでないことを称賛し、非難すべきでないことを非難するのはたやすいが、どちらも何か卑しい品性に属する。」

ストバイオス(『精華集』III 3, 43)

デモクリトスの言葉。「思慮の働きは将来の不正を避けることにあり、無思慮のそれは過去の不

正から身を守らぬことである。」

194

ストバイオス(『精華集』III 3, 46)

デモクリトスの言葉。「大きな喜びは立派な行為を見ることから生れる。」

195

ストバイオス(『精華集』III 4, 69)

デモクリトスの言葉。「衣装や装飾によって見るには素晴らしい像であるが、心がない¹。」

(1) 神々についていわれたものとする説と女性についていわれているとする説の二通りの解釈がある。

196

ストバイオス(『精華集』III 4, 70)

自分の悪い点の忘却は思い上がりを生む。

197

ストバイオス(『精華集』III 4, 71)

愚か者は偶然の利得によって作られ、そういったことを知る人々は知恵の利得によって作られる。

198

ストバイオス(『精華集』III 4, 72)

〈動物の方が人間より賢明である。〉それは必要とするものをどれだけ必要とするか知っているが、人間は必要としながら、それを知らない。

199

ストバイオス(『精華集』III 4, 73)

愚か者は死への恐れによって生きようとするが、生きることを憎むかのようなものである。

200

ストバイオス(『精華集』III 4, 74)

愚か者は人生を楽しむことなく生きている。

201

ストバイオス(『精華集』III 4, 75)

愚か者は長生きを楽しむことなく、長生きを望む。

202

ストバイオス(『精華集』III 4, 76)

愚か者は手元にないものを希求し、手元にあって、過ぎ去ったものより有益であるものを貶める。

203

ストバイオス(『精華集』III 4, 77)

人間どもは死を避けつつ追いかけている。

204

ストバイオス(『精華集』III 4, 78)

愚か者は全生涯において誰ひとり喜ばさない。

205

ストバイオス(『精華集』III 4, 79)

愚か者は死を恐れるために生を希求する。

206

ストバイオス(『精華集』III 4, 80)

愚か者は死を恐れるために年を取って行くことを望む。

ストバイオス(『精華集』III 4, 81)

多くの者は博識ではあるが、分別を持たない。[本章B 6 4に同じ]

ストバイオス(『精華集』III 4, 82)

知性の伴わぬ名声と富は確かな財産たらず。[本章B 7 7に同じ]

207

ストバイオス(『精華集』III 5, 22)

デモクリトスの言葉。「すべての快ではなく、美しさにおける快を選び取らねばならない。」

ストバイオス(『精華集』III 5, 23)

正しきエロス〔愛〕は礼を失しない仕方であらう美しいものを求める。[本章B 7 3に同じ]

208

ストバイオス(『精華集』III 5, 24)

父の節度は子供にとり最大の教訓。

209

ストバイオス(『精華集』III 5, 25)

デモクリトスの言葉。「食糧の自足にとっては小さい夜(?)¹は決して生じない。」

(1) 小さい夜=眠れない夜という解釈が古代において可能かどうか(ディールス)。

210

ストバイオス（『精華集』III 5, 26）

デモクリトスの言葉。「贅沢な食卓は偶然がこれを提供し、自足した食卓は節度がこれをもたらす。」

211

ストバイオス（『精華集』III 5, 27）

デモクリトスの言葉。「節度は楽しさを増大させ、心地よさをさらに大きくする。」

ストバイオス（『精華集』III 6, 26）

若干の人は、国家は支配しているが、女の奴隷となっている。

212

ストバイオス（『精華集』III 6, 27）

デモクリトスの言葉。「真っ昼間から寝ているのは身体の不調か魂の患いなしは怠惰、あるいは教育のなさを示すもの。」

ストバイオス（『精華集』III 6, 28）

性交は小さな卒中である。なぜなら、人間が人間から跳び出してきて、ある種の打撃によって引き離され、分割されるのだから。[本章B 3 2に同じ]

213

ストバイオス（『精華集』III 7, 21）

デモクリトスの言葉。「勇気は禍を小さいものにする。」

214

ストバイオス（『精華集』III 7, 25）

デモクリトスの言葉。「勇敢な人とは敵に打ち勝つのみならず、快樂にも打ち勝つ人である。だが若干の人は、国家は支配しているが、女の奴隷となっている。」[後半部はB 2 1 1のストバイオス『精華集』III 6, 26に同じ]

215

ストバイオス（『精華集』III 7, 31）

デモクリトスの言葉。「正義の栄光は見解の果敢さと動じなさであり、不正の果ては不幸への恐れである。」

216

ストバイオス（『精華集』III 7, 74）

デモクリトスの言葉。「動じることのない知恵は万物にも値する。」

ストバイオス（『精華集』III 9, 29）

デモクリトスの言葉。「不正をなさないことではなく、それを欲さないことがよきことなのだ。」[本章B 6 2に同じ]

217

ストバイオス（『精華集』III 9, 30）

デモクリトスの言葉。「不正を敵とする人のみが神に愛でられる人である。」

218

ストバイオス（『精華集』III 10, 36）

デモクリトスの言葉。「悪しき行ないから結果する富はそれだけ一層明らかな非難を身に招く。」

ストバイオス（『精華集』III 10, 42）

デモクリトスの言葉。「知性を有すると思っている者に意見する人は無駄な骨折りをするものである。」 [本章B 5 2に同じ]

219

ストバイオス（『精華集』III 10, 43）

同じ人 [デモクリトス] の言葉。「金銭欲は、もしそれがもう十分ということで限られるのでないなら、最たる貧窮よりずっと厄介な代物である。というのも、より大きい欲求はより大きい欠乏を作り出すから。」

220

ストバイオス（『精華集』III 10, 44）

デモクリトスの言葉。「悪しき利得は徳の損失をもたらす。」

221

ストバイオス（『精華集』III 10, 58）

デモクリトスの言葉。「悪しき利得への望みは損失の始まり。」

222

ストバイオス（『精華集』III 10, 64）

デモクリトスの言葉。「度を越して金を蓄えるのが子供のためというのは金銭欲の口実で、彼固有の性格をさらけ出すものである。」

223

ストバイオス（『精華集』III 10, 65）

同じ人 [デモクリトス] の言葉。「身体が必要とするものは誰にでも容易に具わり、苦労も難儀も必要としない。苦労や難儀を必要とし、人生を煩悶させるものは、身体がそれを求めているのではなく、漠然とした思いが求めているのである。」

224

ストバイオス（『精華集』III 10, 68）

デモクリトスの言葉。「より多くへの欲求は、アイソポス [イソップ] の犬に似て、現にあるも

のも失わせる。」

225

ストバイオス（『精華集』III 12, 13）

デモクリトスの言葉。「真理を語るべきであって、多くを語る必要はない。」

ストバイオス（『精華集』III 13, 46）

デモクリトスの言葉。「自分の過ちを責めるのは、他人のそれを責めるよりよい。」 [本章B 6 0に同じ]

226

ストバイオス（『精華集』III 13, 47）

デモクリトスの言葉。「言論の自由は自由に固有のこと。好機の判定は冒険。」

ストバイオス（『精華集』III 14, 8）

デモクリトスの言葉。「うるわしき行ないに称賛を送るはうるわしきこと。というのも、悪しき行ないにそうするは、人をたばかる詐欺師のすることだから。」 [本章B 6 3に同じ]

227

ストバイオス（『精華集』III 16, 17）

デモクリトスの言葉。「吝嗇な人は蜜蜂の定めを有していて、永遠に生きるかのように仕事にいそむ。」

228

ストバイオス（『精華集』III 16, 18）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「吝嗇な人の子供たちは無学者となるのがおちであって、ちょうど短剣に飛び乗る踊り子のようなものである。踊り子は、飛び降りるとき、そこに両足を据えねばならない唯一の場所を踏み外してしまうなら、破滅する¹。（そのひとつの場所を捉えるのは〔極めて〕難しい。足の跡の分しかないからである。）そのように彼らもまた、もし用心深くてケチな父の跡目を得そこなうなら、破滅するのがおちである。」

（1）この曲芸については、クセノポン『饗宴』2, 11 参照。

229

ストバイオス（『精華集』III 16, 19）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「儉約と飢えは有益である。また時宜に適った出費もそうである。しかしこれを知るのは立派な人〔思慮ある人〕に属すること。」

230

ストバイオス（『精華集』III 16, 22）

デモクリトスの言葉。「祭りのない人生は泊まる宿もない長い道のりのごとし。」

231

ストバイオス（『精華集』III 17, 25）

デモクリトスの言葉。「持たぬもので苦しむことなく、持つもので喜ぶ人が賢明な人。」

232

ストバイオス（『精華集』III 17, 37）

デモクリトスの言葉。「快いものの中でも稀にしか生じないものが、とりわけ喜びとなる。」

233

ストバイオス（『精華集』III 17, 38）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「適度ということを超えるなら、最も喜ばしいものも、最も喜ばしくないものになってしまう。」

234

ストバイオス（『精華集』III 18,30）

デモクリトスの言葉。「人々は祈りによって健康を神々に乞い願うが、その力を自らの内に有することを知らない。そして無節制によってその反対のことは行ない、諸種の欲望によって自ら健康の裏切り者になっている。」

235

ストバイオス（『精華集』III 18, 35）

デモクリトスの言葉。「食卓とか飲酒とか色事で適正を越えて胃袋から快を得ようとする者たちは、そういった者にはすべて快は短く、わずかしかつづかない。すなわち、食べたり飲んだりしている間しか快適でなく、他面苦痛がいっぱい生じる。つまり、そういうものへの欲求は常に存在するからであり、たとえ欲求するものを得たとしても、たちまちその快は過ぎ去るからであって、それらの内には暫時の喜び以外に好ましいものは何もなく、また再び同じものを求めねばならないことになる。」

236

ストバイオス（『精華集』III 20, 56）

デモクリトスの言葉。「怒りと戦うのは難しい。それに勝利するはよく計算する人にみのなしうるところ。」

237

ストバイオス（『精華集』III 20, 62）

デモクリトスの言葉。「対抗心はすべからく愚かしい。というのも、それは敵における害のみを見て、何が自分に有益かを見ないから。」

238

ストバイオス（『精華集』III 22, 42）

デモクリトスの言葉。「というのも、より優れたものへと背伸びする者は悪評に終わるのがおち

だから。」

239

ストバイオス（『精華集』III 28, 13）

デモクリトスの言葉。「くだらん連中は苦境にあつてなした誓いを、それを遁れたときには守らない。」

240

ストバイオス（『精華集』III 29, 63.83 a）

デモクリトスの言葉。「すすんでする苦勞はいやいやするそれより耐えることをより楽なものにする。」

241

ストバイオス（『精華集』III 29, 64）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「連続する苦勞は慣れることでその都度より楽になる。」

242

ストバイオス（『精華集』III 29, 66）

デモクリトスの言葉。「より多くの方が、本性からよりは、修練によってよき人となる。」

ストバイオス（『精華集』III 29, 67）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「いつもそのうちにとというのは、行為を未完のものにする。」
[本章B 8 1に同じ]

243

ストバイオス（『精華集』III 29, 88）

デモクリトスの言葉。「苦勞も、そのために苦勞するものを手に入れたり、あるいは手に入れるであろうことを知るときには、すべて安逸より快いものである。しかし目標が達成できない場合は、苦勞するのはいつも同じように不快で惨めなものである。」

244

ストバイオス（『精華集』III 31, 7）

デモクリトスの言葉。「下劣なことは、たとえひとりであるときでも、口にすべきではないし、また行なうべきでない。他人に対してよりなお一層自らに対して恥じることを学べ。」

ストバイオス（『精華集』III 36, 24）

デモクリトスの言葉。「傲慢とは、いうばかりで、何ひとつ聞こうとしないこと。」 [本章B 8 6に同じ]

ストバイオス（『精華集』III 37, 22）

デモクリトスの言葉。「よき人であるか、あるいはよき人を真似るべし。」 [本章B 3 9に同

じ]

ストバイオス（『精華集』III 37, 25）

デモクリトスの言葉。「その性格が秩序立った人は、その人生もまた秩序あるものとなる。」
[本章B 6 1に同じ]

ストバイオス（『精華集』III 38, 46）

デモクリトスの言葉。「悪しき者が咎めだてても、よき人はそれを意に介さない。」 [本章B 4 8に同じ]

ストバイオス（『精華集』III 38, 47）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「嫉妬深い者は、敵を苦しめるかのように自らを苦しめる。」
[本章B 8 8に同じ]

245

ストバイオス（『精華集』III 38, 53）

デモクリトスの言葉。「法は、もし人が他人を傷つけるようなことがなかったなら、各人が自らの自由にしたがって生きることを妨げることはしなかったであろう。というのも、妬みが争いの始まりを作り出すからである。」

246

ストバイオス（『精華集』III 40, 6）

デモクリトスの言葉。「外国生活は足るを知ることを教えてくれる。というのも〔そこでは〕、大麦パンや藁のベッドが飢えや疲労の甘美この上ない癒となるから。」

247

ストバイオス（『精華集』III 40, 7）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「知者には全大地が開かれている。なぜなら全世界がよき魂の祖国だから。」

248

ストバイオス（『精華集』IV 1, 33）

デモクリトスの言葉。「法は人々の生活に善を施したいと思っているのであるが、それが可能となるのは、彼らが善を施されることを欲するときである。というのも、法はそれにしたがう人々に固有の徳を示すのだから。」

249

ストバイオス（『精華集』IV 1, 34）

デモクリトスの言葉。「内紛は双方いずれにとっても禍である。なぜなら勝った者にも負けた者にも等しく破滅があろうから。」

250

ストバイオス（『精華集』IV 1, 40）

デモクリトスの言葉。「心の一致があつてこそ、偉大な事業も、また国家にとっての戦争も遂行が可能となるが、さもなければ不可能である。」

251

ストバイオス（『精華集』IV 1, 42）

デモクリトスの言葉。「民主制のもとにおける貧乏の方が有力者支配のもとで幸福と呼ばれているものより、自由の方が隷属よりよい分だけ、好ましい。」

252

ストバイオス（『精華集』IV 1, 43）

国家に係わることは、国家が立派に統治されるよう、自余の何にもまして重要と考えねばならない。然るべき限度を越えて野心を持つべきでないし、また公共の利益に反して権力を自らのものとするべきでもない。なぜなら、立派に統治された国家は〔もうそれだけで〕最大の繁栄だからであり、その一事にすべてはかかっているからである。そして、国家が救われるなら、すべては救われ、国家が減びるなら、すべては減びる。

253

ストバイオス（『精華集』IV 1, 44）

有為な人の場合には、自分のことをおろそかにして他人のことをするのはふさわしくない。そうすれば、その人の固有のよさが損なわれてしまうからである。だが公のことをおろそかにするなら、悪し様にいわれることになる。たとえ何の盗みも、何の不正もしていないにしてもである。物事をおろそかにしたり不正を行なったりしない人であっても、悪し様にいわれたり、その上ひどい目に遭う危険さえあるのである。そして誤りを犯すことは不可避であるが、人がそれを許すのは容易でない。

254

ストバイオス（『精華集』IV 1, 45）

悪しき者たちが官職に着くとき、それに値しない分だけ、それだけ一層職を顧みない者となり、無知と無謀に満たされる。

255

ストバイオス（『精華集』IV 1, 46）

有力な人々が持たざる者に代って支払ったり、援助の手を差し延べたり、恩恵を施したりすることに敢えて踏み出すとき、そこにはすでに、哀れに思う気持とか、独りぼっちではないということとか、仲間になるといったこととか、また互いに守り合うことや市民が心をひとつにするといったことなど、その他、数え上げられないほど多くの善が存する。

ストバイオス（『精華集』IV 2, 13）

思慮のない者は、支配するよりされる方がよい。〔本章B 7 5に同じ〕

256

ストバイオス（『精華集』IV 2, 14）

正義はなすべきであることをなすことであり、不正義とはなすべきことをなさなず、脇にうちやることである。」

257

ストバイオス（『精華集』IV 2, 15）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「動物の場合は、それを殺すか殺さないかは以下のことにかかっている。害をなすか、害をなすのが常であるようなのは、殺しても人は罪に問われない。むしろそうすることが、そうしないことより公益にかなっている。」

258

ストバイオス（『精華集』IV 2, 16）

どのようなものであれ、正義にもとって害をなすようなものはすべて殺さねばならない。これを行なう者は、どんな世界においてであれ、明朗快活さと正義と勇気と所有のより大きな分け前に与ることになろう。

259

ストバイオス（『精華集』IV 2, 17）

敵対的な獣や爬虫類について書いたのと同じように、そのように人間の場合もまたなすべきであるとわたしは思う。どの世界においても敵対するものは祖国の法に則って殺さねばならない。ただし法がそれを拒まない場合である。しかしまたそれぞれの場合には、聖域や協定や誓いといったものがそれを拒むことがある。

260

ストバイオス（『精華集』IV 4, 18）

追い剥ぎや盗賊といったものはすべて、これを殺しても人は罪に問われることはないであろう。自らの手によるせよ、命じてするにせよ、票決によるにせよ。

ストバイオス（『精華集』IV 4, 27）

劣った者に支配されるのは、耐え難し。〔本章B 4 9に同じ〕

261

ストバイオス（『精華集』IV 5, 43）

デモクリトスの言葉。「不正を行なう者には力の限り復讐しなければならず、これを見過ごしてはならない。そうすることが正義であり善であり、そのようにしないことが不正義であり悪なのである。」

ストバイオス（『精華集』IV 5, 44）

デモクリトスの言葉。「また追放とか拘禁に値することを行なった者とか、あるいは罰金に値する者たちは断罪されねばならず、放免してはならない。利得や快樂を斟酌して法にもとって放免する者は不正を犯す者である。このことは心に深く刻み込まれていなければならない。」

ストバイオス（『精華集』IV 5, 45）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「最大の報いを（最も値する人に）分け与える人は正義と徳の最大の分け前に与る。」

ストバイオス（『精華集』IV 5, 46）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「誰ひとり知ることがなかろうとも、あるいはすべての人が知ることになろうとも、人に対して恥じるに劣らず、自分に対して恥じねばならないし、また不当をなしてはならない。否、むしろとりわけ自分に対して恥じるべきであり、何ひとつふさわしからぬことをしないよう、このことを魂の法とすべきである。」

ストバイオス（『精華集』IV 5, 47）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「人は立派になされたことより、失敗したことをよく覚えているものである。けだし正義の場合もまたそうである。預かっていたものを返したからといって称えられる必要はないが、返さないなら、非難され、懲らしめられねばならない。統治者もまたそれと同じようにされるべきである。なぜなら、彼がそれに選ばれたのは、悪いことをするためではなく、善いことをなすためなのだから。」

ストバイオス（『精華集』IV 5, 48）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「現在確立している〔統治〕形態には、支配者階層に対して不当な仕打ちを加えないためのいかなる仕組みも存しない。たとえ彼らが極めて善良な人々であってもである。というのも、〈支配する者が〉自分以外の他の者に〈責任を持ったり、あるいは他の者たちを支配したのち、年が変わると〉¹自身が他の者の配下に服するようになるというのは適当でないからである。そこで、不正を働いた者を厳しく査問した人であっても、その人が何の不当も犯していないとき、その人は〔将来も〕前者〔不正を働いた者〕の配下に立つようなことはなく、何らかの定めとか他のそういったものが正義を行使する者を守るというように、そのように何らかの方法によって統治形態が整えられていなければならない。」

（1） 〈 〉内の補訂、ディールス。

267

ストバイオス（『精華集』IV 6, 19）

デモクリトスの言葉。「支配するということは、優れた者に本性的に固有する資質である。」

268

ストバイオス（『精華集』IV 7, 13）

デモクリトスの言葉。「恐れはお追従を生み出すが、そこに好意は存しない。」

269

ストバイオス（『精華集』IV 10, 28）

デモクリトスの言葉。「実行の始めは大胆、終わりを支配するは偶運。」

270

ストバイオス（『精華集』IV 19, 45）

デモクリトスの言葉。「召使たちは、身体の部分のように、それぞれのためにそれぞれ使用すべし。」

271

ストバイオス（『精華集』IV 20, 33）

デモクリトスの言葉。「恋に係わる咎め立てを、恋される女は水に流す。」

272

ストバイオス（『精華集』IV 22, 108）

デモクリトスの言葉。「婿をうまく獲得した人は息子を見出すが、それに失敗した人は娘も失う」とデモクリトスはいった。

273

ストバイオス（『精華集』IV 22, 199）

デモクリトスの言葉。「悪しき企みにかけては、女は男よりはるかにたけている。」

274

ストバイオス（『精華集』IV 23, 38）

デモクリトスの言葉。「女にとって口数の少なさは飾り、装飾の簡素さもまた美しい。」

ストバイオス（『精華集』IV 23, 39）

デモクリトスの言葉。「女に支配されるは、男にとって究極の屈辱。」 [本章B 1 1 1に同じ]

275

ストバイオス（『精華集』IV 24, 29）

デモクリトスの言葉。「子供の養育は躓きの種。成功するにしても苦勞と心配に満ちており、その失敗は別の苦痛によって越えられないから。」

276

ストバイオス（『精華集』IV 24, 31）

デモクリトスの言葉。「子供は持つべきでないとわたしは思う。というのも、子供を持つことには多大の危険と苦悩がある一方、その恵みはわずかで、しかも〔恵みといっても〕貧相かつ貧弱であるのをわたしは見て取るからである。」

277

ストバイオス（『精華集』IV 24, 32）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「何か子供を作る必要がある人は友人の誰かからもらった方がよいとわたしは思う。そうすれば、彼には彼が望むような子供ができることになる。欲するような子供を選ぶことができるからである。そしてまたふさわしいと思える子であるなら、とりわけまたその本性において適合しているであろう。そしてこれは、この場合には、どのような子を求めるのであれ、多くの子供の中から意に叶った子を得ることができるという点で、それだけ勝れているのである。他方、自ら作る場合には、そこには多くの危険がある。なぜなら、どんな子が生まれるにせよ、その子と付き合っていく行かねばならないからである。」

278

ストバイオス（『精華集』IV 24, 33）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「人間にとって子供を持つことは、その本性とある原初的素質からして、必然的なことに属するように思われる。それはまた他の動物にとっても明らかである。なぜなら、すべての動物が何かのために役立つということがなくとも自然に子供を設けるからである。むしろ〔一旦〕生まれたなら、それぞれ死力を尽くし、苦勞して育てる。まだ幼い間は心配し、何か不幸があれば、嘆き悲しむ。魂を有するすべてのものの本性はかくのごとくである。だが実に人間には、子供から何か享受されるというような考えがすでに生み出されてしまっている。」

279

ストバイオス（『精華集』IV 26, 25）

デモクリトスの言葉。「子供にはできるだけお金を持たせるべきである。そして同時に、それを手にするがゆえに何か破滅の基になるようなことを行わないように配慮してやらねばならない。なぜなら、〔そのことによって〕彼らはお金に対してなお一層儉約になると同時に、所有することにより熱心となり、そして互いに競い合うようになるからである。支出は公においては私的な場合ほど苦しく感じられないし、また収入も喜ばせることなく、〔私的な場合に比べて〕はるかに劣るのである。」

280

ストバイオス（『精華集』IV 26, 26）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「自分のものを多く費やさなくとも、子供を教育することで自らの財産と身体の周りに城壁と安全柵を張り巡らせることができる。」

ストバイオス（『精華集』IV 29, 18）

デモクリトスの言葉。「家畜の良さは体の壮健さ、人間のそれは品性の良さ。」[本章B 5 7に同じ]

281

ストバイオス（『精華集』IV 31, 49）

デモクリトスの言葉。「潰瘍においては癌が最も悪しき病であるのと同じように、金銭においては …¹。」

（1）文の後半欠損。

282

ストバイオス（『精華集』IV 31, 120）

デモクリトスの言葉。「金銭の知性を伴った使用は自由人にふさわしい人物たることにも公共に役立つ人物たることにも有用であるが、知性を伴わぬそれは共通の負担となる。」

ストバイオス（『精華集』IV 31, 121）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「金を稼ぐのは無益なことでない。しかし不正によってそうするのは何よりも悪しきこと。」[本章B 7 8に同じ]

283

ストバイオス（『精華集』IV 33, 23）

デモクリトスの言葉。「貧乏と金持ちは不足と十分の別名。したがって不足している者は金持ちでないし、不足していない者は貧乏でない。」

284

ストバイオス（『精華集』IV 33, 24.25）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「多くを欲しないなら、わずかなものでも君には多いと思われるであろう。小さな欲求は貧をも富と等しい力を持つものにする。」

ストバイオス（『精華集』IV 34, 58）

デモクリトスの言葉。「よきことは求める者にかろうじてやってくるに過ぎないが、悪しきことは求めぬ者にもやってくる。」[本章B 1 0 8に同じ]

285

ストバイオス（『精華集』IV 34, 65）

デモクリトスの言葉。「人間の命は弱く短命であり、多くの悲運と窮乏にまみれていることを認識しなければならない。適度の所有に心掛け、苦勞が必要に基づいて測られるために。」

ストバイオス（『精華集』IV 39, 17）

デモクリトスの言葉。「適度の財産で明朗快活である人は幸福であり、多くのそれでも不機嫌な人は不幸である。」

ストバイオス（『精華集』IV 39, 25）

明朗快活な気分でいたいと思う者は、公私いずれにおいても多くのことをしてはならない。何をするにしても、自らの能力と本性を越えて求めるべきでない。むしろ、幸運が舞い込み、その見かけによってより多くものへと誘われるときでも、それを押し止め、自分の能力に適ったもの以上のものに手を出さぬよう用心すべきである。なぜなら適度は過度より安全だから。[本章B 3に同じ]

ストバイオス（『精華集』IV 40, 20）

デモクリトスの言葉。「公共の難事は個々人のそれより厄介である。というのは〔その場合には〕救援の望みが残されていないから。」

ストバイオス（『精華集』IV 40, 21）

家と人生の病も、体のそれと同じようにして生じる。

ストバイオス（『精華集』IV 41, 59）

デモクリトスの言葉。「偶然の機会が開くのでなければ、富の門戸はそれほど確かであるわけではでない。」

ストバイオス（『精華集』IV 44, 64）

デモクリトスの言葉。「無知とは人生における諸々の必然に同意しないこと。」

ストバイオス（『精華集』IV 44, 67）

デモクリトスの言葉。「麻痺した魂の出所不明の苦しみを、理性によって叩き出せ。」

ストバイオス（『精華集』IV 44, 68）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「不運の内にあって、なすべきことを考えるというのは偉大である。」[本章B 4 2に同じ]

ストバイオス（『精華集』IV 44, 69）

度量の大きさととは非礼を穏やかに耐えること。[本章B 4 6に同じ]

291

ストバイオス（『精華集』IV 44, 70）

同じ人〔デモクリトス〕の言葉。「貧乏に立派に耐えることは、節度ある人に属すること。」

ストバイオス（『精華集』IV 46, 18）

デモクリトスの言葉。「正しきことを思慮する人たちの希望は実現可能であるが、愚かな者たちのそれは不可能。」〔本章B 5 8に同じ〕

292

ストバイオス（『精華集』IV 46, 19）

デモクリトスの言葉。「無知蒙昧な連中の望みは不合理。」

293

ストバイオス（『精華集』IV 48, 10）

デモクリトスの言葉。「隣人の不幸を喜ぶ者は、運命はすべての者に共通であることを理解しておらず、自らの喜びからも目をそらしている。」

294

ストバイオス（『精華集』IV 50, 20）

デモクリトスの言葉。「強さや姿の美しさは若者の善。節度は老人の華。」

295

ストバイオス（『精華集』IV 50, 22）

デモクリトスの言葉。「老人は〔かつて〕若かったが、若者が老齢に達するかどうかは不明。されば、達成された善は将来の不明確な善に勝る。」

296

ストバイオス（『精華集』IV 50, 76）

デモクリトスの言葉。「老人は五体満足にして不具である。すべてを持ちながら、すべてに欠けるから。」

ストバイオス（『精華集』IV 50, 80）

デモクリトスの言葉。「身体が成長するにつれて心もまた成長し、身体が老いれば心もまた老い、すべてにつけて鈍くなる。」〔ヘロドトス『歴史』III 134 に同じ〕

297

ストバイオス（『精華集』IV 52, 40 [IV 34, 62]）

デモクリトスの言葉。「ある人たちは死すべき本性が分解することを知らない一方、人生においてなした悪行を意識して死後にまつわる嘘の話をでっち上げ、人生の時間を混乱と恐怖の内に煩悶させる。」

『スーダ』（「アルパ (α) の項」）

短母音のひげの生えた形〔すなわち $\check{\alpha}$ の形〕での用法としては、例えばヒポクラテスのもとにおける $\check{\alpha}\tau\tau\upsilon\alpha$ 〔何であれあるもの〕、デモクリトスのもとにおける $\check{\iota}\delta\iota\alpha$ 〔固有のもの〕、ホメロスのもとにおける $\tau\grave{\alpha}\ \acute{\epsilon}\alpha\upsilon\tau\omicron\upsilon$ 〔自分のもの〕などがある。

疑 問 断 片

298 a

デメトリオス・ラコン(『詩作について』II 20 [Voll. herc. V 16 fr.28, 4; Crönert, *Kolot und Menedemos*, S.107.130])

「汝の胸中に積りし憤怒をきっぱりと押し返(せ)。そして魂を乱(さ)ぬよう用心(せよ)。また(もの)ごとのすべてをいつも舌に委ねるようなことをしてはならぬ」と彼はい(う)。(このように)(わ)れ(われは)その内に(怒りっぽいものが横たわる部分)に〔常に〕気を配らねばならない。

偽 作 断 片

I.トラシュロスの『覚書』から。

298 b [『覚書』1]

『バビロンの神聖文書について』

299

クレメンス(『雑録集』I 15, 69)

[ピュタゴラス、エウドクソス、それにプラトンは異国人の弟子であるということ。] デモクリトス〔もまた〕『バビロニア人の言葉』という倫理的(?) 著作をものしている。というのも、彼はアキカロスの石柱¹〔の碑文〕を翻訳して、自らの著作に書き加えたといわれているからである。このことは自ら「デモクリトスはこういっている」と記していることに示されている。実際また彼は自分について〔述べて〕、あるところでなど、その博識を自慢して次のようにいっているのである。「わたしはわたしと同時代人の中で最も多くの土地を遍歴し、最も広く探索し、最も多くの気候と風土を知り、最も多く学識ある人々に聞いた。そして証明を付した図形の構成にかけては、未だかつてわたしを凌いだ者は誰ひとりいなかった。エジプト人のもとにおいてアルペドナプタイと呼ばれる人たち²ですら、そうである。全体として80年間³わたしはこの人たちと共に異国の地で過ごしたのである。」すなわち、彼〔デモクリトス〕はバビロンやペルシアやエジプトに赴いて、マゴス僧や神官たちの弟子となったのである。

- (1) アキカロス(あるいはアヒカル)は前8-7世紀のオリエントの知恵文学『アヒカル物語』に登場する賢者。アッシリアの王セナケリブ(前705-681年在位)の財務大臣であったが、甥ナダンの讒いにあい、死刑を宣告される。しかし死刑執行人がかつてアヒカルに命を救われた人物であったために助けられ、かくまわれる。その後エジプトから突きつけられた

難題をその知恵によって解決して国難を救い、復帰を果たす。なお旧約聖書の外典『トビト記』ではニネベで虜囚の身にあった敬虔なユダヤ人トビトの甥とされている。おそらくアヒカルの知恵を記した石柱がオリエント各地に見られたのであろう。

(2) ἀρπεδονάπται。文字通りには「綱を結ぶ者たち」の意味で、エジプトの土地測量技師。

(3) ディオドロス『世界史』I 98, 3 p.230, 18 には「5年」とある。

299 a [『覚書2』]

『メロエの神聖文書について』

299 b [『覚書3』]

『オケアノス周航』

299 c [『覚書4』]

『歴史について』

299 d [『覚書5』]

『カルダイア人の言葉』

299 e [『覚書6』]

『プリュギア人の言葉』

299 f [『覚書7』]

『発熱および病から咳き込む者について』

299 g [『覚書8』]

『法の根拠』

299 h [『覚書9』]

『ケルニカ [ないしはケルニバ] あるいは防具』¹

(1) 本章A 3 3の注5参照。

II. その他の偽作断片

300

ボロスの『ケイロクメータ¹』と『効能ある自然物』（『共感的なものと反発的なものについて』）

(1) 「ケイロクメータ (χειρόκμητα)」は文字通りには「人の手による処方」を意味し、「効能ある自然物」すなわち自然的処方に対置される。

300. 1

『スーダ』(「ボロス」の項)

ボロス¹はメンデスの人で、ピュタゴラス学徒。『諸報告を読む中からわれわれに関心を持たせるものについて』『驚くべきものについて』『効能ある自然物』、またアルファベット順に『共感的なもの』と反発的なものについて』……『石について』、『太陽、月、熊星、燈火、虹から読み取れる兆候について』〔といった書があった〕。

[別の典拠から] ボロス=デモクリトス、哲学者。『探究』『医術』(自然の助けに基づく自然的な治療を含む)。

- (1) エジプトのナイルデルタの都市メンデスの人。おそらく前3世紀の人。哲学者、自然学者、医者、鉱物学者といったさまざまな顔を持つ。ピュタゴラス学徒といわれるのは、アレクサンドリアに移植された新ピュタゴラス派に属していたためであろう。新ピュタゴラス派がすでに神秘主義的傾向を強めていたことからして、彼自身も神秘主義的・魔術的傾向を示している。デモクリトスの徒ともいわれ、またしばしばデモクリトスと等置される。その書物もデモクリトスのそれとしばしば混同された。

300. 2

ウィトルウィウス(『建築について』IX 1, 14)

わたしはまたデモクリトスの『事物の本性について』の諸巻や、彼の『ケイロクメータ』と題された注釈書にも賛辞を惜しまない。この書においてもまた彼は試みた治療に指輪を使って柔らかい蠟で捺印している。

プリニウス(『博物誌』XXIV 160 f.)

『ケイロクメータ』がデモクリトスの手になるものであることは確かである。しかしこの書における彼はピュタゴラス以降最も熱心なマゴス〔魔術師〕であって、何とも異様なことを伝えている。例えばアグラオポティス草¹は、それはその格別な色のゆえに「人類の讚美」という名称を得たものであるが、ペルシアあたりではアラビア大理石〔マルモル〕の中に自生し、そのゆえに「マルマリティス」とも呼ばれるといった具合である。これをマゴス僧は神々を呼び出そうとするときに使用するという。……(167) 彼の信奉者のアポドロス²は、これらにアエスキュノメネ草³を付け加えている。

- (1) 「アグラオポティス」というのはギリシア語で「輝く光」というほどの意味で、ランの一種か。
- (2) この「デモクリトスの信奉者」といわれているアポドロスはローマのティベリウス帝(在位紀元14-37年)時代の人で、ボロスの信奉者でもあり、魔術的要素をまじえた植物学者であった。
- (3) 「恥らう草」というほどの意味。手で触れると葉をたたむので、そう呼ばれる。すなわち「おじぎ草」。

300. 3

コルメラ(『農業について』VII 5, 17)

しかし著名なエジプト人作家、メンデスのポロスは(この人のギリシア語で『ケイロクメータ』と呼ばれる注釈書は誤ってデモクリトスの名で伝えられている)、この病(膿疱)のゆえに羊の背をもっと頻繁に、そして細心に検査すべきことを提いしている。そして万一いずれかの羊においてそういった疾患が認められたなら、ただちに家畜小屋の入り口に穴を掘り、膿疱に罹った羊を生きたまま仰向けに埋め、〔羊の〕群れ全体にその埋められた羊の上を歩ませるようにせよという。そうすることで病は撃退されるというのである。

コルメラ(『農業について』XI 3, 53 ff.)

しかしエジプトの人、メンデスのポロスのもとに、もっとたやすい作業でこのことがなされうるのをわれわれは見出す。彼の指示するところは次のごとくである。畑の中の日当たりがよくてよく施肥した場所にウイキョウとキイチゴを代わるがわる植えておく。それから、春分が終わった頃、前者を地面より少し下で切り、云々。……(61) 昔の作家の中には、デモクリトスのごとく、種はすべてベンケイ草と呼ばれる草の汁液で処理し、また害虫に対してもその同じ薬剤を用いるように指示している人がいる。……(64) しかしデモクリトスは、ギリシア語で『ペリ・アンティパトーン〔反発的なものについて〕』と題された書物の中で、この害虫(芋虫)そのものは、月経中の女が髪を振り解いて素足で三度畑の各区画を廻れば、死んでしまうと断いしている。すなわち、その後蛆虫はすべて落ち、そのようにして死滅するというのである。

300. 4

逸名著作家の古注(ニカンドロス『動物詩集』764 への古注)

デモクリトス学徒のポロスは『共感的なものと反発的なものについて』において、ペルシア人たちは自国に自生していた致死性の植物をエジプトに移植して多くの人間を殺そうとしたが、土地がよかったために植物が反対の性質のものに転化し、極めて甘美な実をつけるようになったと述べている。

300. 4 a

クラテウアス(『植物学』ed. M. Wellmann 18, 14 [Abh. d. G. G. d. W. N. F. II 1])

ルリハコベ …… デモクリトスの処方でも用いられている。

300. 5

プルタルコス(『食卓歓談集』II 7, 1 p.641 B)

反発性を語る者たちもいたし、またその他多くの〔反発的な〕影響を受けるものも聞くことができた。〔例えば〕荒れ狂う象は牡羊を見ると鎮まるといったことなどである ……。

300. 6

プリニウス(『博物誌』XXV 23)

〔ピュタゴラスは『草木の効能について』という書を著した。彼のあと〕デモクリトスもまた〔同種の書を〕著したが、彼ら兩人ともペルシアやアラビアやエチオピアやエジプトのマゴス僧を歴訪することによって〔それらをものしたのである〕。古代人たちはそれらに熱狂して、到底信

じられないようなことまで主張するにいたっている。

ペトロニウス(『サテュリコン』88, 2)

というのも、古の未だ素朴な徳が愛されていた時代には自由人たるにふさわしい学芸が盛んであり、後世に永く有益であるものをいち早く見出そうと人々の間に高度な競争があったからである。かくてデモクリトスはあるとあらゆる草木の汁液を搾り出し、石や灌木の効能を明らかにせんと、その生涯を実験の内に費やしたのであった。

300. 7

ガレノス(『単純な薬物の調合比率と効能について』X 1 [XII 250 K.])

動物についてクセノクラテス¹と似たようなことを書いている人は他にもいて、クセノクラテス自身もまた大抵の場合そういった人々から書き写しているのである。というのも、あれだけのことを、またああいったことを、自分〔ひとり〕で実地見聞することがどうして可能であったろう。とにかく、かつてわれわれの王であったアッタロス²もそういったものを実地見聞することにかけては並々ならぬ情熱の持ち主であったが、書いた物としてははるかに少ないように思われる。わたしの仲間のひとりが〈ヘルメスの〉同じ主題を扱った研究を褒め称えて、それを仔細に吟味する機会をわたしに与えてくれたが、少なくともわたしの見るところ、それは著者が自分の目で見てなったものでないようである。そこでわたしとしては、バシリスコス³のことも、象のことも、ナイルの馬〔カバ〕のことも、その他そういったもののことは・・・〔ここでは〕述べない積りである。

- (1) アプロディシアスのクセノクラテスであって、プラトンの弟子の有名なカルケドンのクセノクラテスではない。アプロディシアスのクセノクラテスは1世紀の初頭に活躍したやや魔術ががった博物学者。
- (2) ペルガモン王国最後の王アッタロス3世ピロメトル。在位138－133年。彼の遺言によってペルガモン王国はローマに遺贈された。また文中にも見られるように、植物や動物、鉱物や薬物、金細工や彫刻、その他さまざまな珍物に関心を示したことで知られる。
- (3) 毒蛇の一種であろうが、不明。後出の本章B 300. 7 aの記述、またプリニウスの『博物誌』VIII 78-79、XXIX 66などの記述から、本邦におけるまぼろしの珍獣「つちのこ」のようなものでないかと想像される。

プリニウス(『博物誌』XXVIII 112)

カメレオンには一卷を当てる値打ちがあるとデモクリトスは考えた……。

[参照] ゲリウス(『アッティカの夜』X 12, 6-8)

プリニウス・セクンドゥス¹によって報告されているこれらの異様なものや怪しげなものにはデモクリトスの名を冠するに値しないとわたしは思う。あるいは、その同じプリニウスが第10巻〔137〕である鳥について〔デモクリトスが〕書いていると主張しているようなのもそうである。・・・(8)しかし悪知恵において巧みなそういった人々によってこの種の作り話の多くがデモクリトスの名において語られてきたように思われる。彼の名声と権威が隠れ蓑として使われているのである。

- (1) 有名な『博物誌』の著者のプリニウスのこと。彼のフルネームはガイウス・プリニウス・セクンドゥス。

ゲリウス(『アッティカの夜』IV 13,2)

マムシの噛み傷は笛を上手に調子よく吹き添えるなら癒されると、*** [欠文] ***¹と題されたデモクリトスの書もまた述べている。その書において彼は笛の奏鳴が多くの人にとって癒しになったと教えているのである。

- (1) Περί συμπαθειῶν (『共感性について』) といったような表題がギリシア語で記されているが、それが脱落したものと想像される(ディールス/クランツ)。

300. 7 a

ローデ所引の逸名著作家(E. Rhode, *Kl. Schr.* I S.397)

デモクリトスは、自身もその動物の目撃者であるとして、次のように伝えている。「バシリスコスというこの怪物は(彼はそれをこのように呼ぶ)、体は小さく、動きが鈍く、頭がとがっており、頭の上に星形の王冠のようなものを戴いている。皮膚は赤褐色で、力は比類なく、凌ぐものがない。リビウアのキュレネ地方の奥地で見出されるが、そこにはプシュロイ人と呼ばれる人々の種族もいる。すなわち、この怪物の噛み傷はプシュロイ人によって〔しか〕治療されないのである。その怪物に対しては家に住み着いているイタチが反発的である〔天敵である〕。すなわち、それはイタチの臭いにも姿にも耐えられず、即死してしまうのである。またイタチは穴の前でそれを見つけると、バラバラに引き裂いてしまう。」これが反発性の作用である。

300. 8

[博物学的な驚異や共感性による治療などのデモクリトスを典拠とする記事がプリニウスのもとに頻繁に見られる。『博物誌』VIII 61, X 180, XIII 131, XIV 20, XV 138, XVII 23, 62 [本章B 2 6 fの『農業論』参照], XVIII 47, 159, 321 [ウェルギリウス『農耕詩』I 276 ff.の引用文と共に], XX19, 28, 149, XXI 62, XXIV 156, XXV 13, 14, XXVI 19, XXVII 141, XXVI II 7, 118, 153, XXIX 72, XXXII 49, XXXVII 69, 146, 149, 160, 185。またソリヌス『異聞集』I 54 p.13, 4 Momms., III 3 p.45, 15 (これらはプリニウスによらない)。アンミアヌス・マルケリヌス『ローマ史』XXVIII 4, 34。コルメラ『農業について』VI 28, VIII 8, 6, IX 14, 6, XI 64 [本章B 3 0 0. 3参照]。パラディウス『農事記』I 35, 7。さらに『農事記集成(ゲオポニカ)』におけるアナトリオスのもとにも多くのものが見られる。(これらはカシウス・ディオニュシウス、ケルスス、プリニウス、アフリカヌス、アプレイウスを経ている[ベックの『索引』531頁を見よ。あるいは *Rhein. Mus.* 45, 1890, 70; M. Wellmann, *Abh. Akt.* 1921, 4ff. 1928, 31ff. 参照]。天候の予告、雑草、害虫、野獣などに対する共感性による治療法が述べられている。ボドレー図書館蔵のエピクテトスへの古注 p.LXXIII 2 Schenkl 参照。デモクリトスの『水脈探索術』については『農事記集成(ゲオポニカ)』II 6 参照。あるいは *Philol.* の補遺 VII(1899) 240ff.参照。]

逸名著作家の古注(バシレイオス『創造の六日間についての講話』への古注 2 1 ed. Pasquali, *Göt. Nachr.* 1910, 200)

デモクリトスの『井戸掘り術』という作品があるし、また他にも『水脈探索術』を書いた人もいる。

300. 9

[ビュザンティン時代の偽書、デモクリトスの『共感的なものと反発的なものについて』(ed. W. Gemoll Striegau 1884)はアイリアノス『動物誌』I 35-38, VII 7, 8 とアナトリオス [『農事記集成(ゲオポニカ)』XIII および XV]を典拠としている。]

300. 10

[ボロスの著作『反発的なものについて』においては、明らかに人間の病を扱った部分が相当部分を占めていた。]

ケルスス(『医術について』I prooem. p.2, 11 Dar. [CML I 18])

したがって知恵〔哲学〕の教師たちの多くがそれ〔医術〕に熟達していたことをわれわれは知るのであって、その中でも最も有名なのはピュタゴラス、エンペドクレス、デモクリトスである。

タティアノス(『ギリシア人への訓告』16-17 p.18, 6 Schw.)

そこで、病気ということも、われわれの内なる質料の〔機能の〕停止ということもあるが、それらの原因はダイモンなのであって、それらが自分の身に降りかかってくる時〔病気になるのだとして〕、人々はそれらに原因を帰している。疲労に捕えられるとき襲いかかってくる時である。(しかし時にはまた自身の愚かさという嵐によって自ら身体の状態を不安定ならしめることもある。)神の力を帯びた言葉で打たれると、それらは恐れをなして退散し、病は癒される。(17)デモクリトスのいう共感的なものと反発的なものについては、このアブデラ出身の男は、一般にもいわれているように、愚かなことを語る人物だという以外に何をいうことができようか¹。

(1) アブデラは愚か者が多く生まれたことから「愚か者の国」と呼ばれた。本章A 2 1「ユウエナリス」の注1参照。

カエリウス・アウレリアヌス(『慢性疾患について』IV 1 [象皮病])

先人の医者のうち誰もこの病〔象皮病〕の治療を処方したものはなかったが、ただ例外はテミソン¹と哲学者の中ではデモクリトスである。象皮病について著作したといわれているのがもし本当のことならば。

(1) プリュギアのラオディケイア出身の医者。プルサのアスクレピアデスの弟子。おそらく1世紀にかけてローマで医師として活動。

[未刊行資料](Anecd. Paris. ed. Fuchs, *Rhein. Mus.* 49, 1894, 557)

昔の医者の中でも象皮病にい及していない。哲学者の中ではデモクリトスが『象皮病について』というその書において、それに言及している。

オリバシオス(『医学論集』XLV 28, 1 CMG VI 2, 1 III 184)

というのも、デモクリトスに帰せられるこの病気〔象皮病〕に関する書物は明らかに偽書だからである。

300. 11

〔古写本〕(Vaticanus graecus 299 f., 304 ff. [E. Rhode, *Kl. Schr.* I 383, ed. M. Wellmann, *Berl. Sitz. Ber.* 1908, 625 ff.]

デモクラテス〔デモクリトスカ〕の『頭痛』、デモクリトスの『眼について』、アブデラのデモクリトスの『眼の炎症について』、デモクリトスの『眼の出血に対して』、デモクリトスの『眼の逆睫について』、デモクリトスの『眼の充血に対して』、デモクリトスの『角膜症について』、デモクリトスの『〔眼の〕かすみについて』、デモクリトスの『眼の下の黒痣と青痣に対して』、デモクリトスの『喉ぼとけの炎症について』、デモクリトスの『胃の嘔吐に対して』、アブデラの人〔デモクリトス〕の『鎮吐剤』。

アエリウス・プロモトゥス(『薬物誌』26)

疫病の症状を呈し、皮膚が鉛色になった患者に対して……。デモクリトスの処方には、その他に湿地の空気に当たった者に対処するものもある。

300. 12

〔『共感的なものについて』における共感性による治療法のうち、最もおぞましいものはマゴス僧のオスタネスの名と結びついていたように思われる。〕

タティアノス(『ギリシア人への訓告』17 p.18, 15)

そのポリスにとってその名のいわれとなった人〔アブデラの建国者アブデロス¹〕が — 彼はヘラクレスの友人であったといわれている — ディオメドスの馬どもに食い尽くされたのとちょうど同じように、マゴス僧のオスタネス²を自慢する者もまた最後の〔審判の〕日に永遠の火の餌食とされるであろう。……この症状は反発性〔に基づく治療〕によっては退散させられないし、気が狂った者も革のお守りをつけることでは癒されない。

- (1) ヘルメスの子といわれる神話上の人物。ヘラクレスからビストン人の王ディオメデスの人食い馬を管理する任を与えられたが、馬に食い殺された。ヘラクレスは彼を記念してトラキアにアブデラを建設したといわれる。
- (2) 前5世紀前半のペルシアのマゴス僧。マゴス僧の中でも最大級の人物で、オリエントの魔術に関する著作の多くは彼に帰されている。またペルシア支配下のエジプトのメンフィスにあってエジプトの全神殿を監督・指導する最高神官職にペルシア大王によって任じられるなど、ペルシアの宗教行政において重きをなした。

アブレイウス(『弁明』27)

また彼らのことを人々は一般に、かつてエピメニデス¹やオルペウスやピュタゴラスやオスタネスがそうであったように、あたかも生じると知っているものを生じさせもできるかのように、マゴ

ス〔魔術師〕と呼んでいる。

(1) エピメニデスについては、クセノパネスの章A 1の注6参照。

300. 13

プリニウス(『博物誌』XXX 8 ff.)

実際にわたしが見出した限りでは、その著作がなお現存している中でそれ〔魔術〕について著作した最初の人オスタネスであって、彼はペルシア王クセルクセスの対ギリシア戦争に随行し、その途次この奇怪な術のいわば種を撒き散らし、行く先々で世間を〔この悪習に〕染ませた。より入念な人たちはこの拝火教徒の少し前にもうひとり別のプロコンネソス人〔アリスティアス¹〕を置いている。しかし確かなことは、誰にもましてこのオスタネスがこの学の狂気 — これはもう熱狂なんてものではない — へとギリシアの民衆を駆り立てたということである。もっともわたしとしても、文筆における最高の栄光と栄誉は古来ほとんど常にこの学から生れてきたことに気づいていないわけではない。(9) 疑いもなくピュタゴラス、エンペドクレス、デモクリトス、プラトンはそれ〔魔術〕を学ぶために渡航した。それは旅行というよりは真実には亡命としてなされたものであったが。そして帰国後彼らはそれを公に披瀝もしたが、また後には秘密にした。デモクリトスはコプトスの人アポロベクスやポイニクス人〔フェニキア人〕ダルダノス²を世に明らかならしめた。ダルダノスの書物をその墓の中まで探し求めた〔といわれている〕。実際彼らの教えに基づいて彼は自分の著作を公刊したのであるが、これらがいかなる人によってもせよ、人々に受け入れられ、記憶を通じて伝えられてきたということほど驚くべきことは人の世においてまたあるものではない。(10) それらには信頼性も道理も一切欠けているため、その人のその他のことは是認する人も、これらの作品が彼のものであることは否定しているほどである。だがそれは無駄である。誰にもまして人々の魂にその甘い魅力を印象づけたのがこの人〔デモクリトス〕であったことはあまねく知られている事実だからである。そして、双方の術のいずれもが、わたしがいうのは医術と魔術のことであるが、その双方が同時に花開いたということ、このこともまた不思議に満ちたことである。前者はヒッポクラテスが、後者はデモクリトスが同時代に、すなわちローマ建都300年から戦われたギリシアのペロポネソス戦争の時代³に流布させた。……(11) またアレクサンドロス大王の時代⁴にも、大王随行の栄誉に浴した第二のオスタネス⁵がこの仕事に少なからず権威を増し加えた。明らかに彼は全世界を歴訪したのであって、そのことに疑いを持つ者はいない。

(1) 前6世紀のプロコンネソス(プロポンティスの島)の人で、アポロンの神官であったといわれる半ば伝説的人物。アバリスやサルモクシスと同様、さまざまな奇跡的事跡に結びつけて語られる。ヘロドトスは彼をはるか北方の部族について語った六脚韻の詩『アリマスピア』の著者としているが、しかしまた同時に、プロコンネソスの町で急死したが、その同時刻に別の町で目撃されたとか、それから7年後にまた再びプロコンネソスに姿を現わしたとか、さらに240年後にイタリアのメタポンティオンに肉体をとって現われたといった数々の不思議な話を伝えている。

(2) アポロベクスはエジプトのコプトスの魔術的色彩の強い知者。年代、その他については、不詳。またダルダノスはソロモン王の魔術上のライバルのひとりで、魔術的な内容の薬物誌『デュナメラ』を書いたといわれる。ここでは「ポイニクス人〔フェニキア人〕ダルダノス」と読んでおくが、この「ポイニクス人」を独立させる読み方も可能で、フェニキア人の

モコスのことがいわれているという解釈もある。通常ダルダノスはプリュギア人と見なされているからである。さらに「ポイニクス」を個人名と解することも可能で、アキレウスの師で文字の発明者ポイニクスと考えるのも悪くないとディールスはいう。オスタネス、アポロベクス、ダルダノスについては、Dieterich, *Pap. mag. Ludg. Jahrb. f. kl. Phil. Suppl.* XVI 752 ff. 参照。

- (3) ペロポネソス戦争は前431－404年。したがって「ローマ建都320年」への読み替えが提案されている。ローマ建都は前753年。
- (4) アレクサンドロスの生涯は前356－323年。なお東方遠征は前334－323年。
- (5) この「第二のオスタネス」といわれている人物については、不詳。

300. 13 a

ガレノス(『単純な薬物の調合比率と効能について』X 1 [XII 248 K.])

すなわち、それら〔薬物〕のあるものはなほだ疎ましいものであって、あるものなどは法の前に禁じられているものすらあるが、どのようにしてクセノクラテス¹(この人はそれほど古い人ではなく、われわれの祖父の時代の人である)が、ローマ帝国政府が人肉を口にすることを禁じている中であって、それらについて〔書物を〕書きえたのかわたしには分らないが、とにかくも彼は、彼自身が実際に見聞きしたこととして、いかにももっともらしく、どの症状を癒すには人間の脳とか肉とか肝臓を摂るのがよいか、頭蓋とか脛とか指の骨は焼いて飲む場合は何に効き、焼かない場合は何に効くとか、また血液そのものは何によいといったことを記しているのである。

- (1) アプロディシアスのクセノクラテス。本章B300. 7「ガレノス」の注1参照。

プリニウス(『博物誌』XXVIII 5 ff.)

ギリシア人のもとにも、爪の切り屑にいたるまで一切切切を調べ上げたあげく、内臓や四肢の味についてまで語っている者が少なからずいる。それはあたかも人間が獣になり、医療行為そのもの中において病気ともいふべきようなものを生じさせることが正気の沙汰と見なしうるかのごとくであるが、もしそれが何の役に立たないものであるなら、その無益さたるや尋常のものでないであろう。人間の内臓を見ることすら瀆神とされている。ましてやそれを口にすると何事か。誰がそのようなことを考えついたのか、オスタネスよ。(6) というのも、事はお前と共にあることだからだ。人間の法の破壊者にして怪物の造り主よ。お前こそが、その人生が〔決して〕忘れられないようにと、そういったことを初めて創始したのだとわたしは思う。誰が人間の四肢のひとつひとつを試してみるといふことを思いついたのか。どのような推測に導かれたのか。どのような起源でかかる医術が起こりえたのか。誰が有毒飲料を薬剤より無害と信じ込ませたのか。なるほどこの儀式を考え出したのは異民族や外国人であったかもしれないが、ギリシア人もまたこの術を自らのものとしてはいなかったか。(7) ある病には罪人の頭の骨がよく効き、またある病には友や客のそれがよく効くといっているデモクリトスの論文が現に存在しているのである。

ビュブロスのピロン(エウセビオス「福音の準備」I 10, 53 より)

[『ペルシア聖典集成』においてマゴス僧のゾロアストレス〔ゾロアスター〕が隼の頭を持つ神について述べているのにつづいて。] それについてはオスタネスもまた『オクタテウコス〔八書〕』と題された書物の中で同じことをいっている。

300. 14

セネカ(『書簡集』90, 32)

「デモクリトスは、徐々に傾けた石のカーブを中央の要石で繋ぐという仕方で、アーチを発明したといわれている」と彼〔ポセイドニオス¹〕はいつているが、これは誤りだとわたしはいいたい。なぜなら、デモクリトス以前にも橋や門があったこと必然であるし、それらの頂は大抵湾曲しているからである。その上、その同じデモクリトスが象牙を柔らかくする方法とか、小石を煮詰めてエメラルドに変換する方法、今日でもこのことに適すると分かった石がそういった煮沸でもって染められているその方法を見出した〔といわれている〕ことを諸君は忘れていてる。

- (1) シリアのアパメイア出身のストア哲学者。前135－50年頃。中期ストア派最大の哲学者。

300. 15

[『ケイロクメータ』はすでに部分的には錬金術の性格を有しているが、これに結びつけて古代末期に錬金術師たちの文書が書かれた。失われた著作、デモクリトスの『自然学と神秘学』¹の中ではデモクリトスはマゴス僧オスタネスの高弟のごとき姿で現れている。彼はメンフィスの神殿でオスタネスから古代書の奥義を伝授され、そしてそのエッセンスを伝えたといわれている。その主要著作五篇の名称は以下のごとくである。]

1. 『金について』
2. 『銀について』
3. 『石について』
4. 『紫貝について』
5. 『レウキッポスに向けて』

- (1) デモクリトスあるいはメンデスのボロスの名を冠した本書をW. ヴェルマンは紀元2世紀の偽作と考えている。

300. 16

シュンケロス(『年代記』I 471 Dindorf)

アブデラの自然哲学者デモクリトスが盛年にあつた。彼はエジプトでメディア〔ペルシア〕人のオスタネスによって秘儀を伝授された。オスタネスは当時のペルシア王によってメンフィスの神殿にあつて他の神官や哲学者と共にエジプトの諸神殿を監督するために派遣されていたのである。その中にはヘブライ人の賢女マリア¹がいたし、またパンメネス²もいた。デモクリトスは金や銀や石や紫貝について著述したが、両義的な仕方でであつた。マリアも同様である。しかし彼ら、デモクリトスとマリアは、多くの賢明な謎によってその術を覆い隠したとして、オスタネスから褒められた。他方パンメネスはあからさまに書いたとして非難された。

- (1) ヘブライにマリアと呼ばれる女性が多いが、この魔術に係わって言及される「賢女マリア」なる女性を特定することは難しい。
- (2) パンメネスについても、前5世紀の錬金術師以外、不詳。

300. 17

擬シュネシオス(『ディオスコロスに与うるデモクリトス注解』 [Berthelot, *Coll. d. Alchim. I* p.56, 7])

デモクリトスはアブデラ出身の自然学者。あらゆる自然物を探究し、諸存在をその本性に即して記述した。アブデラはトラキアのポリスであるが、彼は最高の学識者となった。彼はエジプトに赴き、メンフィスの神殿でエジプトの全神官と共に大オスタネスから秘儀を伝授された。そしてそれを出発点として染色に関する四書、『金について』『銀について』『石について』『紫貝について』を著した。つまりわたしがいいたいのは、デモクリトスの〔これらの〕著作は大オスタネスを出発点としているということである。というのも、この大オスタネスこそ「自然は自然を喜び、自然は自然を支配し、自然は自然に打ち勝つ」と書いた最初の人だからである。

300. 18

[この四書の抜粋がデモクリトスの『自然学と神秘学』というタイトルのもとに Berthelot, *Coll. d. Alchim. I* p.41 以下に収められている。以下はその見本]

(Berthelot, *Coll. d. Alchim. I* p.43, 14)

さて、われわれがその神殿の中にいたとき、一本の石柱がひとりでに破裂した。われわれはそれを見分したが、その中には何もなかった。たがオスタネスはその中に父祖伝来の文書が保管されていると主張し、それを一座の前に持ち出させた。われわれは覗いて見て、驚いた。われわれは何も見逃していなかった積りであったが、この「自然は自然を、云々」という極めて有用な言葉をそこに見出したからである。

[収集にはつづいて、デモクリトスの書『レウキッポスに向けて』第5巻が収められている。]

(Berthelot, *Coll. d. Alchim. I* p.53, 16)

御覧のように、レウキッポスよ、わたしはこれらエジプトの術についてペルシアの預言者たちの書(の中に)あったものを一般語で記しましたが、それらは実際それに極めてふさわしいものです。しかしその書そのものは一般的なものではありません。なぜならそれには古い太古の神秘的な暗号が載っているからでありまして、それはまさにエジプトの往古の神的な王たちがフェニキア人に伝えたものなのです。あなたの友であるわたし自身は、エジプト人の奴隷たちによってわたしのために書き写された太古の暗号を用いたいと思いますが、しかしあなたのためには、医師よ、通訳してでもすべてを判然と説明することをわたしは止めないでありましょう。この書は白色化や黄色化、あるいは銅鉱石の溶解、溶かす法から染色法まで含みます。またそれらにつづいて、銅そのものや辰砂から生れる思いもよらないものども、例えばカドミウムやその他の種類の鉱石(から)金をつくることとか、さらにまた燃焼(や)結合から生じる思いもよらないものどもを含みます。

ゾシモス(Berthelot, *Coll. d. Alchim. II* p.122)

[デモクリトスからの引用] 石にあらざして石であるもの、価値なきものにして高価であるもの、多くの形を有しながら形なきもの、知られざるものにして万人に知られているもの、多くの名を有しながら名なきもの(わたしのいうのは月長石のことであるが)を受け取られよ。」

ゾシモス(Berthelot, *Coll. d. Alchim.* II p.159, 3)

そのことをデモクリトスは次のようにエジプトの預言者たちに向けて書いている。「わたしは御身のために、ピラレトス¹よ、その能力のある御身のために、その術を幅広く記しているのです。」

(1) 不詳。

ゾシモス(Berthelot, *Coll. d. Alchim.* III p.448, 19)

[賢者の石] デモクリトスは王に向けていっている。「王よ、もし実体を知って実体を混ぜ合わせるのではないなら、また形相を見て取って類と類を結びつけるのではないなら、努力は空しい企てになってしまうのです。」

[錬金術の主要写本 Venet. 229 の索引中に『金の製造について』と『はっきりしないもの〔ここでは銀を意味する〕の製造について』が特にデモクリトスの名を冠して掲載されている。]

300. 19

[三世紀の『ロンドン・パピュロス』121 c.5 b v.168 に見られる処方集の最初のものがすでに錬金術の端緒を示している。]

デモクリトスの消閑処方集

1. 銅が金に見えるようにする。自然のままの硫黄を白墨と混ぜて乾かせ。
2. 卵をリンゴに似せる。卵をゆでて酒と混ぜたサフランで染めよ。
3. 料理人が火をつけられないようにする。彼のかまどの中に常緑の植物を入れておけ。
4. ニンニクを食べても匂わないようにする。サトウダイコンの根を焼いて食せ。
5. 老婆があまりお喋りしないように、またあまり飲まないようにする。松を砕いて彼女の混酒の中に入れよ。
6. 絵に描かれた剣闘士を戦わせる。その下で兎の頭をいぶせ。
7. 冷たいものを食べた人を暖める。ぬるま湯の中に浸した海藻を洗って彼に与えよ。オリーブ油による解決法。
8. [テキスト脱落]
9. 大酒を飲んで、しかも酔わないようにする。豚の肺を焼いて食せ。
10. 歩いても喉が渴かないようにする。卵を酒〈に〉落として泡立てて飲み干せ。
11. 何度も性交できるようにする。どんぐり五十個と胡椒の実〈二十粒〉をコップ二杯の葡萄の汁ですり潰して飲め。
12. したい時に勃起するようにする。胡椒を蜂蜜と一緒にすり潰してお前の足の裏に塗れ。

300. 20

[パピュロス] (Papyr. Magic. Lugd. 384 [Dieterich, *Jahrb. f. kl. Ph.*, Suppl. XVI 813. Preisendanz, *Pap. Graec. mag.*, II. S.81])

デモクリトスの球。[病人の] 生と死の予後判定器¹。どの月齢の頃に[月の何日に] 患って寝ついたかを知れ。生れによる名前[から導き出した数]をそれに合算して、幾つ30が生じるか見よ。そして数の余りを「球」の中に観察せよ。数が上にあれば生き、下にあれば死ぬ。[この下に図表がある]

- (1) デモクリトスの予後判定器は、1ヶ月30日の日付のうち18が上部に、12が下部に神秘的に配列された四角い表を有する球。生れによる名前から導き出した数に日付を加えたものを30で割って、余りの数が上部にあるか、下部にあるかを見、それによって生死を判定した。

301

[フルゲンティウスの『神話集』が、その2巻の14において「ドロモクリテスの『神統記』」に、3巻の7において「ドロモクリトスの『自然研究(フィジオログメノン)』」にい及しているが、「ドロモクリトスの」を「デモクリトスの」と校訂することができよう。しかしいずれにせよこれらはフルゲンティウスによる偽作と推定される。]

302

[Corpus Parisinum Profanum (Cod. Paris. gr.1168, Elter) の『デモクリトスの箴言集』も真作であるとの保証はない。マクシモスの『デモクリテア』はこの Corpus を典拠としている。]

- 163 もし学ぶということがなかったなら、… [ひたすら] 受身とならばならないからである。
- 164 食糧の自給にとっては小さい夜は決して生じない。 [本章B209に同じ]
- 165 人々は祈りによって健康を神々に乞い願うが、その力を自らの内に有することを知らない。そして無節制によってその反対のを行ない、種々の欲望によって自ら健康の裏切り者になっている。 [本章B234に同じ]
- 166 時が変われば、極めて有力な者も力の最も弱い者に及ばなくなる。
- 167 (アイスキネス 3, 147) [=ストバイオス『精華集』III 43, 35]
- 168 死体を治療するのと老人に意見するは同じこと。
- 169 よき友は、喜びのときには呼ばれて居てくれ、苦しいときは呼ばれなくても共に居てくれるのでなければならない。
- 170 友を助けることができないのは不如意の、助けようとしなないのは悪意の印。
- 171 真の友は友情を快いものに、不幸をより軽いものにしてくれる。前者は共に分かち合うことによって、後者は共に担うことによって。
- 172 (イソクラテス『デモニコスに与う』23)
- 173 法と統治者とより賢明な人にしたがうは節度あること。 [本章B47に同じ]
- 174 生涯において恐れられる者であるよりは、愛惜される者である方を選べ。万人が恐れる者は万人を恐れるからである。
- 175 目標はより確実なものを、行動はより輝かしいものを選ぶべし。
- 176 (イソクラテス『ニコクレスに与う』38)
- 177 指揮官たる者、好機に対しては計算力を、敵に対しては果敢さを、部下に対しては温情を持たねばならない。
- 178 他人を支配しようとする者は、まず自分自身を支配しなければならない。
- 179 小さな好意も、逆境にあってそれを受ける者には、極めて大きなものとなる。
- 180 教養は順境にあっては飾りであり、逆境にあっては避難所である。 [本章B180に同じ]

- 181 鏡の中で視覚の性格が、交わりの中で魂の性格が見て取れる。
- 182 [ストバイオス『倫理学抜粋集』II 31, 53 参照]
- 183 媚をうまく獲得した人は息子を見出すが、それに失敗した人は娘も失う。[本章B 2 7 2に同じ]
- 184 万人に絶えなきは富への欲望。所有していなければ苛み、所有しておれば気掛かりで苦しみ、失えば悲嘆で苦しめる。
- 185 ふさわしくないことを何ひとつつなさないことがお前を神にふさわしい者とするであろう。
- 186 よき行為を売り物にしないとき、人は神に似た仕方によき行為を所有する。善行を行なうことも真実を語ることもである。
- 187 よき舵取りも時には難破し、優れた人も蹉跌する。
- 188 [ストバイオス『精華集』III 17, 30 参照]
- 189 短剣は切り裂き、中傷は友を離間させる。
- 190 教養ある人の希望は無教養な者の富にまさる。[本章B 1 8 5に同じ]
- 191 よき人たちの競い合いは、羨望される側を害することなく、羨望する側を益する。
- 192 大きなものを約束するより、小さなものを与えることを欲せよ。それには危険がないし、それに受け取る側が必要とするものは言葉ではなく、行為だからだ。
- 193 最も多くの不正を受けて、しかもそれに耐えることができる人が、友情に最も向いている。
- 194 悪しき行ないから結果する富は、それだけ一層明らかな非難を身に招く。[本章B 2 1 8に同じ]
- 195 自分の過ちを責めるのは、他人のそれを責めるよりよい。[本章B 6 0に同じ]
- 196 物を食べるとき、急いでガツつくな。それは犬のごとき行為であり、人間より獣にこそ似つかわしいことだからだ。
- 197 さて、そこで香油は香りがよければよいというものでもなければ、長く持続すればよいというものでもなく、健康によいものがよいのである。ちょうどそれと同じように、食べ物も、うまければよいというものでも、多ければよいというものでもなく、健康によいものがよいのである。
- 198 徳を尊重する人はまず第一に真理を尊重する。すべての善を導くものとして、何にもましてそれを尊重する。
- 199 真っ昼間から寝ているのは身体の不調か魂の患いなしは怠惰、あるいは教育のなさを示すもの。[本章B 2 1 2に同じ]
- 200 勇敢な人とは敵に打ち勝つのみならず、快樂にも打ち勝つ人である。だが若干の人は、国家は支配しているが、女の奴隷となっている。[本章B 2 1 4に同じ]
- 201 外国生活は足るを知ることを教えてくれる。というのも[そこでは]、大麦パンや藁のベッドが飢えや疲労の甘美この上ない癒しとなるから。[本章B 2 4 6に同じ]
- 202 金を稼ぐのは無益なことではない。しかし不正によってそうするのは何よりも悪しきこと。[本章B 7 8に同じ]
- 203 思慮のない者は、支配するよりされる方がよい。[本章B 7 5に同じ]
- 204 女に支配される、男にとって究極の屈辱。[本章B 1 1 1に同じ]
- 493 恐れのおゆえではなく、なすべきことのおゆえに、過ちから遠ざかること。[本章B 4 1、デモクラテスの箴い7に同じ]
- 563 前項に同じ。[ストバイオスより]

- 588 贅沢な食卓は偶然がこれを提供し、自足した食卓は節度がこれをもたらす。[本章B 2 1 0に同じ]
- 591 [本章B 2 1 4 bに同じ]¹
- 595 正義の栄光は見解の果敢さと動じなさであり、不正の果ては不幸への恐れである。[本章B 2 1 5に同じ]
- 691 傲慢とは、いうばかりで、何ひとつ聞こうとしないこと。[本章B 8 6に同じ]
- 875 強さや姿の美しさは若者の善。節度は老人の華。[本章B 2 9 4に同じ]
- 710 妬みは真理の傷であるとデモクリトスはいった。
- 711 不正を犯す者ではなく、犯そうと意図する者が敵である。[本章B 8 9に同じ]
- 745 富や名声のゆえに人を幸福であるといつてはならない。なぜなら、そういったものすべてをよきものと思わせているものは、風よりはかない信仰なのだから。
- 746 [DEI(『デモクリトス、エピクテトス、インクラテスの箴言』ed. Wachsm. *Stud. z. d. Floril.*) 193]
- 747 [DEI 194]
- 748 多くを欲しないなら、わずかなものでも君には多いと思われるであろう。小さな欲求は貧をも富と等しい力を持つものにする。[本章B 2 8 4に同じ]
- 749 [DEI 189]
- 749a [前掲 188 に同じ]
- 750 [DEI 190]
- 751 [DEI 191]
- 752 [DEI 200]

(1) テキストにはこう表記されているが、当該項なし。

302 a

セネカ(『書簡集』7, 10)

デモクリトスはいふ。「わたしにとってはひとりでも万人に値し、万人でもひとりにしか値しない。」

303

[シリア語(グレコ=シリアン)文書](Ryssel による独訳から [*Rhein. Mus.* 51, 1896, 53 9] n.33)

デモクリトスはいった。「賢者たる者、自国でない異国に赴いたときには、黙して静かに〔その国を〕よく観察し、その地の賢者たちが携っている研究の噂に耳をすませて情報収集に努めねばならない。すなわち、彼らはどのような状態にあるか、彼らは自分に相對しうるような者であるかということ、彼らの言葉を心中ひそかに自らのそれと比較対照することによって、確かめねばならない。そしてそれを比較検討し、どちらの側が立ち勝っているか見て取ったなら、しかる後に自らの知恵の豊かさを知らせるべきである。自らの所有物である宝物で他の人たちを富ませることによって、その宝物のゆえに称賛されるために。しかし、もし自らの持ち物ではそのことに寄与しうるに足りないとなれば、むしろ彼らから得て、さらに旅をつづけるべし。」

304

〔シリア語（グレコ＝シリアン）文書〕（Ryssel による独訳から [*Rhein. Mus.* 51, 1896, 53 9] n.42）

デモクリトスはいった。「わたしは、わたしが何も知らないということ、このことだけは知っている。」

〔参照〕〔金い集〕（Gnom. Vatic. 743 [*Wien. Stud.* 10, 1888, 232] n.56）

同じ人〔デモクリトス〕はいった。「わたしは、何も知らないという、ただこのひとことだけは知っている。」

305

キフティ(A. Müller, *Gr. Philos. in d. ar. Überl.* S.36)

デモクリトス、ギリシアの哲学者、『哲学について』なる書の著者。

306

マサラ(古写本 : Vatic. gr. 1056 [*Catal. codd. astrol. gr.* I (Brux. 1898) p.82])

デモクリトス〔の著作〕は14巻、すなわち『誕生に係わることについて』6巻、『質問について』4巻、『天体の合について』2巻、『計算について』1巻、『気候について』1巻。

307

擬オリバシオス(『ヒポクラテスの箴言集』ed. Io. Guinterius Andernacus, Paris. 1533 f.5 v)

次にわれわれは、哲学者たちが自然の友と呼んだヒポクラテスのそのような作品〔箴言集〕は何人もものしえなかったと主張する。実際デモクリトスがそういったものを作成しようとしたが、しかしヒポクラテスのようには完成することができなかった。

308

〔古写本〕(Cod. Paris. 1630 f.191 r)

〔ヘラクレイトスの人生悲観論に対して〕哲学者デモクリトスのはその反対であって、〔彼は〕人生の多様性を〔主張している〕・・・。

309

アルベルトゥス・マグヌス(『倫理学』I 1, 3 [Vol. IV ed. Jammy p.4])

次のこともまたデモクリトスのいったことである。「人間が存在する万物の尺度である。すなわち、感覚によって可感的なものの尺度であり、知性によって可知的なものの尺度である。なぜならそれぞれのものは自分の属する類の第一の最も単純なものによって測られるのだからである。しかるに、それぞれの類の第一の最も単純なものとは徳である。かくてそのもの自身の徳がそれぞれのものの認識の原理である。それゆえ、あらゆる認識はそのものの徳の認識において完成されるのである。」

C 倣 作

1

ダモクセノス(断片2『乳兄弟』 [アテナイオス『食卓の賢人たち』 III p.103 B])

- 12 それだから、読み書きもできない料理人、
デモクリトスを全部読み切ってもいなければ、
ましてやそれをわが物にもしていない料理人を見たら、笑ってやることだ。
- 15 エピクロスの規準論も知らぬ者は、糞でも食らえと放り出せ。
学校から放り出すようにね。というのも次のことは知っておかねばならないことだからだ。
いいかね、お前さん、まず第一に
青身の魚は冬と夏ではどのように違うかということだ。さらに、
すばる星が沈む頃と冬至にはどのような魚が
- 20 旬かということも一緒に知っておかねばならない。
なぜなら、[季節の] 交替とか変転は、
人間の手に負えない禍で、食材の内に
変質を生み出すからだ。お分かりかな、
時季に適って摂るものこそ喜びを与えるのだ。
- 25 だがこんなことを誰が追っかけているだろうか。そこで、さしこみが
起こったり、ガスがたまったりして、招待客に
無様なまねをさせることになる。だが小生のところでは、
出される料理は滋養になるし、正しく消化されて
拡散して行く。そうしてこそ[身体の] 孔の中へと[入って行って]
- 30 体液があらゆるところに均等に組成されるのだ。
というのも、デモクリトスも語っているが、然るべきところでないところに
生じた物が食べた者を通風にするからである。
— [対話の相手] 医術の心得もおありのようすな —
自然の内にいる者はすべからくそうですぞ。

2

擬ヒッポクラテス(『書簡集』 10, 3 [IX 322 L.])

その男[デモクリトス]はハデス[冥界]がどんなものであるか探究し、それについて書いてもいます。そしてまた大気は剥離像[エイドーラ]に満ちみちているとあって、鳥の鳴き声に耳を傾けているのです。

3

擬ヒッポクラテス(『書簡集』 17, 11 [IX 352 L.])

[ヒッポクラテスの語り] それから … わたしは近づきになりましたが、わたしが彼のところに行ったとき、彼[デモクリトス]は憑かれたように何かを書いているところでした。

擬ヒッポクラテス(『書簡集』 17, 15-16 [IX 354 L.])

[ヒッポクラテスとデモクリトスの対話] 「一体何を書いているところかね。」 「狂気についてだ

よ」と彼〔デモクリトス〕はいった。… (16)「狂気についてどんなことを書いているのかね。」「どんなことといっても」と彼はいった、「狂気とはそもそも何であり、どのようにして人々の内に生じ、どのような仕方で鎮めることができるかということ以外に何があるというのかね。というのも、君が見ているこれらの動物をぼくが切開するというのも、少なくとも神の御業を憎んでのことではないのであって、胆汁の本性とその位置を探し求めてのことなのだ。すなわち、君も知っての通り、人間の精神錯乱の原因は、多くの場合、胆汁が過剰であることにあるのだ。胆汁は本来すべての人の内にあるものであるが、人によって多い少ないがある。その不均衡が病気ということなのだ。」

擬ヒポクラテス(『書簡集』17, 24-25 [IX 360 L.])

〔ヒポクラテス〕それでは、人生に対する君の笑いについて説明してくれたまえ。(25)〔デモクリトス〕… ぼくは…〔とりわけ〕次のような人間を笑うのだ。愚かさに満ち、正しいことは空っぽで、することといえば万事子供じみしており、何の役にも立たないことのために甲斐のない苦勞に苦しみ、際限のない欲に駆られて地の果てや茫漠たる奥地まで旅し、金や銀を溶かして、それを得ようと止むことがない。絶えず多い少ないということを巡って騒ぎ立てるが、それも自分の方が少なくならないように〔というただそれだけの〕ためなのだ。そして幸福だといって恥じるところがない〔そういった人間をだ〕。

4

擬ヒポクラテス(『書簡集』17, 40 [IX 368 L.])

ただ人間の感覚だけが悟性の確かさによって遠くまで輝き、現在と将来を見越すことができる。彼らは何事にも不満であるが、また再び同じ事態に陥っている。

5

擬ヒポクラテス(『書簡集』18, 1 [IX 380 L.])

ぼく〔デモクリトス〕は宇宙のあり方、天極図、さらに天の諸々の星について著作したことがある。… すなわち、天空で見かけ上の姿を変えてわれわれを迷わせるもの、それはまさに宇宙に見渡され、絶えず形を変換させているものであるが、それらをぼくの知性はその本性を探究することによって正確に明るみにもたらしただのだ。ぼくによって書かれた書物がその証人である。

6

擬ヒポクラテス(『書簡集』23, 1 ff. [IX 392 L.])

人間の本性についてのデモクリトスのヒポクラテス宛書簡。

(1) ヒポクラテスよ、人は誰でも医術の心得を有しているべきである。(なぜなら、それは立派なことであるし、また同時に生きてゆく上で有益なことだからだ。) とりわけ教養のある人、言論の心得ある人はそうである。というのも、わたしの思うに、知恵の探究は医術の姉妹であり、配偶者だからだ。(2) 「知恵は情念から魂を汲み上げ、医術は身体から病気を取り去る。」健康があるとき、知性は増進する。優れた思慮を有する人が健康に配慮するのは当然のことである。身体の状態がおかしいとき、知性は徳の実行に熱意を持つことができない。というのも、病気がひどい状態にあるとき、それは魂を曇らせ、共に思慮を苦しませるからである。(3) 人間の本性の概観は以下のような観察をもたらす。脳は身体の頂を護り、安全を委ねられている。そして腱質の膜に

一緒に収まっているが、その膜の上には二様の骨があって、それらの本性が必然性によってぴったり合って、悟性の護り手である主なる脳を覆い、整然とした髪の毛が皮膚を装わせている。(4) 水の幾重もの被いの内に潜む眼の視力を司る部分は額の下の窪みに落ち着きをもって鎮座している。正確な観察をもたらす瞳は適切にも護り手であるまつ毛の下にとどまる。臭覚の判定者たる二つの鼻孔が〔双方の〕眼を隣人として切り分けている。(5) 口を包む唇の柔らかい接触が操られて、言葉の正確で分節化された感覚を提供する。とがった下顎と上顎が留め具で嵌め合わされている。言葉を受け取る耳を造物主は開きたもうたが、それに盲従すると気概は安定性を欠いて無思慮の僕になりさがる。舌は弁舌の母、魂の使者、味覚の門戸であって、歯の堅固な扉で守られている。(6) 〔喉では〕気管と咽喉がうまく合わさって隣り合っている。前者は〈息を〉息の通路へと、後者は食べ物を胃の奥へと強く押し送り込む。松毬の形をした女王たる心臓、激情の養い手たる心臓はあらゆる企みに対抗して胸郭を着けている。肺の密集した気孔体が、その中を空気が通過することで、声のもととなる氣息を生み出す。(7) 大静脈で何度も巡る葉と一緒に血液を供給し、栄養に転化させるものは肝臓、欲望の源である。肝臓には黄緑色の胆汁がとどまるが、それが泡立って溢れると、人体の破壊となる。人体の有害かつ無用の住人、脾臓は何事も求められないまま肝臓の真向かいに眠っている。(8) あらゆるものを受け容れる胃がそれらの間にあってリーダシップを取り、横たわって消化を司っている。胃に結びつき、人体を構成した造物主の業によって一緒に揺り動かされつつ、腸が胃の周りに巻き束ねられているが、〔食物の〕吸収と排泄の原因である。(9) 双子の腎臓が腰部に位置して脂肪に包まれているが、その本性からして尿の排泄と無関係でない。腹全体の主はエピプルスと呼ばれる膜で、それが内臓全体を包んでいる。ただし脾臓だけは別である。(10) 次いで腱質の膀胱が腰部に開口部を据え、編み合わされた容器となって尿の排泄の原因となっている。その隣には胎児の母、(はなはだ痛ましいことであるが)女性の数限りない苦勞の原因となる子宮が潜んでいる。腰の最奥部の門番たる湧き上がった肉〔臀部〕は腱でしっかりと閉じられている。これは出産を配慮して腹部の多量の原質から流れ出てきたものである。(11) 子孫を設ける睾丸は外に住居を割り当てられて、幾重にも包まれ、体からぶら下がっている。男根は尿の排出を行ない、性交に役立つものであるが、自然によって血管と腱から編んで作られており、陰毛に蔽われている。(12) 脚と腕、そしてそれらの先端に取りつけられているものが奉仕活動の原理をすべて一括して有しており、腱の不動の役目を果たしている。そして〔身体の〕内奥に存する非物的な自然があらゆる形の種類の臓器を造り出したのであるが、実にそれらには死が襲ってきて、たちどころにその機能を停止させるのである。

7

ストバイオス(『精華集』IV 44, 81)

束の間の時しか有さぬ人間が全永遠と比べてその人生を問うとき、人生において、あたかも異国を旅するかのよう、明朗快活に過ごすなら、それが最も素晴らしいことであることを〔人は悟るであろう〕。しかしこのことは、何にもまして、自分が死すべきものであり、肉の存在であることを、傷つきやすく滅び行く身体を持つものであることを、そして最後の一息にいたるまであらゆる辛苦が自らの上に蔽い被さっているということを正確に認識し、しっかりと見届けることによって、初めて得られるものなのである。(2) それではまず最初に身に振りかかってくるものを見て行くことにしよう。身体に関しては、肋膜炎、肺炎、精神錯乱、痛風、排尿困難、下痢、嗜眠症、癲癇、壊疽、その他無数のもの。魂に関しては、はるかに大きくて厄介なものが振りかかってくる。すなわち、人生のいたるところに見られる犯罪、悪事、違法、瀆神。これらは魂における情念に由来す

る。(3) というのも、自然に反した計り知れない欲望によって多くの者が抑制のきかない衝動に迷い込み、娘からも母親からも冒瀆極まる欲望を得ることを控えないのみならず、父親殺しにさえ加わったからであり、また多くの者がわが子を打ち殺したからである。(4) 外から振りかかってくる災いはいわずもがなである。豪雨に旱魃、酷暑、酷寒、その結果、大気の異常からしばしば疫病や飢饉が起り、ありとあらゆる種類の悲運の絵巻物となって、全ポリスを荒廃させるのである。(5) そこで、こういった多くのものが蔽い被さってくるのであるから、身体上のすこやかさに目を向けて勿体ぶって得意になるのは止めることにしよう。それらは、ちょっとした熱が出ただけで、花のように簡単にしぼんでしまうようなものなのである。また外的な幸運と見なされるものについてもそうである。それらもまた生じるより滅ぶ方が何倍も速いといったものなのである。それらはすべて、エウリポス海峡¹のごとく、じっとしても安定してもおらず、数多くの多彩な変転の中で〔たまたま〕生じたものをわれわれが手にしたに過ぎないものなのであって、それらのどれひとつとして永続的でもなければ不動でもなく、確固たるものでも取り去ることのできないものでもないのである。(6) よってこれらのことに心を留めて、現にあるもの、与えられているものがほんの束の間でも手元にありつづけければ〈儲けもの〉見なすなら、身に降りかかってくるものにも気高く耐えて、明朗快活の内に人生を送ることができよう。(7) ところがしかし、多くの者が、自然と偶運によって彼らのもとにあり、彼らに与えられているものを、よりよきもの、計算できるようなものではなく、頂点にあってこそ手に入れることのできるようなものに作り変えようとする。すると突然多くのものが欠けていることになり、大きな、そして不公正で馬鹿々々しい不幸で魂を打ちひしがせることになる。そしてそのようにして彼らは苦く耐え難い人生を手にするようになるのである。(8) 財産を失った時とか、友人や子供やその他最も大切に思っている人が亡くなったとき、こういったことが起る。すると彼らは嘆き悲しみ、自分ほど不幸で巡り合わせの悪い者はないといって〔嘆き〕、同じことは他の多くの人にも起こったし、今も起こっているということに思が及ぶことがない。そして、現に存在している人々の人生も、すでに人生から去った人々のそれも、どれほどの不幸、どれほどの禍の大波の内にあっただか、今も多くの人の中にいるし、以前にもいたということを悟ることができない。(9) そこで、多くの人々が財産を失ったが、後には財産をなくしたことで自身の命は助かったということ、すなわちそういったものために盗賊とか僭主の手に掛からんとしていたが、なくしたことによって助かったということを考えるなら、また多くの人が誰かを愛し、はなはだ仲が良かったが、その後大いに憎しみ合うようになったということ、これらすべてをわれわれにまで伝えられてきた歴史から数え上げ、多くの人が最愛の子供や友の手に掛かって滅んだということを学ぶなら、そして自らの人生をそれほど幸運でなかった人たちのそれと比較対照して、身に降りかかってくる災いも人間によくあることであり、〈自分〉だけに起るわけでないと思えば、われわれはより明朗快活に人生を送ることができよう。(10) すなわち、人生はそのいたるところに多くの破滅があることを見ていながら、他人の不幸は容易に耐えられる、それは自分の悲しみではないと思えば、人間にとって許されることではないのである。(11) 泣き叫び、嘆き悲しんだところで、死者や故人にとっては何の役にも立たず、〔むしろ〕魂をより大きな苦悩の内へと追い込んでしまうだけである。〔それだけでなく〕魂は多くの悪しき自然的傾向に満ちみちているのだから。(12) そこで、哲学に則った議論によって、手立てを尽くして染みついた汚れを洗い清め、落としてしまうべきである。思慮と節度から離れず、〈明朗快活さこそ〉わが物であると主張し、現にあるもので〈満足して〉、多くを求めないなら、われわれはこれをなすのである。(13) というのも、多くのものを備えようとする人たちは、〔われわれは〕寿命を越えては生きられないということ、そして〈ただの一度し

か) 生まれてくることができない (ということを忘れて) のである。 (そうであるなら、) 現にあるよきものを活用しようではないか。そして哲学から得られるものにもっと食欲になろうではないか。哲学から得られる美しく厳かなものに食欲になるなら、つまらないものへの食欲から解放されることにもなろうからである。

(1) ギリシア本島ボイオティアとエウボイア島との間の海峡。潮流が速いことで知られていた。

8

[ヒッポクラテスの『法』におけるデモクリトスの模倣については、Herm. 54 (1919) 49 掲載のヴィラモーヴツの論文を参照のこと]